

東洋美術大観 四

Dojo Bijutsu Taikan - Vol 4

Blank Page Digitally Inserted

東洋美術大観 四



東洋美術大觀第四冊

目次

第五編 足利時代

第四章 雪舟派

雪舟派—雪舟の傳

小圖第三十 雪舟墓

小圖第三十一 雪舟尺牘

小圖第三十二 雪舟肖像

雪舟の遺作

第二百五十五 雪舟筆雪景山水圖

第二百五十六 同筆峯巒競秀圖

第二百五十七 同筆山水圖長卷一部

第二百五十八 同筆夏冬山水雙幅二圖

第二百五十九 同筆壽星及夏冬山水三幅對三圖

第二百六十 同筆破墨山水圖

第二百六十一 同筆花鳥圖屏風一雙全面二圖及一部分

第二百六十二 同筆鳥窠和尚圖

第二百六十三 同筆益田兼堯壽像

雪舟の門人—等悅—秋月

第二百六十四 秋月筆山水雙幅二圖

第二百六十五 瀑布水禽圖

二百七十五—二百八十
頁數

二百八十一—二百八十一

二百八十二—二百八十三

宗淵……………二百八十三

小圖第三十三 宗淵筆山水小景圖

周德……………二百八十三

第百六十六 周德筆布袋圖

周耕……………二百八十四

小圖第三十四 周耕筆鍾馗圖

宗悅—等澤—季英—等本……………二百八十四

雪舟風の諸家—拙宗等揚……………二百八十五

第百六十七 拙宗等揚筆春夏山水圖_二圖

楊月……………二百八十五

小圖第三十五 楊月筆布袋圖

雲溪……………二百八十五—二百八十六

第百六十八 雲溪筆山水圖

山田道安……………二百八十六

小圖第三十六 山田道安筆山水圖

爾餘雪舟派諸家……………二百八十七—二百九十三

小圖第三十七 雪江筆山水圖

雪村……………二百九十三—二百九十四

第百六十九 雪村筆夏冬山水圖雙幅_{全圖二面及冬景の一部分}

第百七十 同筆風浪帆船圖

第百七十一 同筆松鷹圖_{雙幅の一}

第百七十二 同筆花鳥圖雙幅_二圖

雪村風の諸家……………二百九十四—二百九十五

第五章 狩野派

狩野派—景信—正信……………二百九十七—三百一

第七十三 狩野正信筆周茂叔愛蓮圖

第七十四 同筆虎溪三笑圖雙幅

第七十五 傳同筆竹鶴圖屏風

長吉……………三百一

第七十六 長吉筆觀瀑圖

元信……………三百一—三百四

第七十七 狩野元信筆琴棋書畫山水圖八幅の一幅

第七十八 同筆月夜山水圖八幅の一幅

第七十九 同筆瀟湘八景圖四幅中の二幅

第八十 同筆豐干寒拾圖雙幅二幅

第八十一 同筆群雁圖屏風一雙二幅

之信……………三百四

第八十二 狩野之信筆耕作圖八幅の三幅

第八十三 同筆布袋圖

國松—之季—宗信—秀賴……………三百五

小圖第三十八 秀賴筆山市晴嵐圖

松榮……………三百五—三百六

第八十四 狩野松榮筆竹林七賢圖

宗陳—德菴—養拙—殊牧—玉樂—宗祐……………三百六—三百七

第八十五 宗祐筆李白觀瀑圖

狩野派諸家……………三百七—三百八

第六編 豐臣時代

第五章 狩野派

永徳

三百十一—三百十四

第百八十六 狩野永徳筆琴棋書畫圖障子畫其一

第百八十七 同筆梅花禽鳥圖障子畫

宗秀—源七郎—玉樂の末流—松榮の門人—山樂

三百十四—三百十七

第百八十八 狩野山樂筆鷺鷹圖屏風一雙二圖及其一部分

第百八十九 同筆鷺鶴及蒼鷹圖二幅二圖

爾餘の永徳門人—爾餘狩野家の畫人

三百十七—三百十八

第二章 海北派

友松

三百十八—三百十九

第百九十 海北友松筆文王呂尙及南山四皓圖屏風一雙二圖

第百九十一 同筆牡丹圖屏風

第三章 雲谷及長谷川派

雲谷等顔

三百十九—三百二十一

第百九十二 雲谷等顔筆四季山水圖屏風一雙二圖及其一部分

第百九十三 同筆同圖屏風一雙二圖及其一部分

第百九十四 同筆春夏吉野山圖屏風一雙二圖

第百九十五 同筆竹林七賢圖屏風一雙二圖

第百九十六 同筆同圖屏風一雙

第百九十七 同筆群馬圖屏風一雙

長谷川等伯

三百二十一—三百二十二

第百九十八 長谷川等伯筆松林圖屏風の一雙

第百九十九 同筆枯木猿猴圖の二幅

長谷川信春……………三百二十二

第四章 雜派

曾我直庵……………三百二十二

第二百 曾我直庵筆花鳥圖屏風一雙の二圖

土岐洞文……………三百二十二—三百二十三

第二百一 土岐洞文筆子母鷹圖

南都の繪佛師—芝慶順—芝侍從—芝琳賢—宮内卿—大藏卿—信春……………三百二十三—三百二十四

土佐派—光吉—土佐家門人……………三百二十四—三百二十五

雜派諸家……………三百二十五—三百二十八

東洋美術大觀

第五編 足利時代

第四章 雪舟派

雪舟派

雪舟の傳

足利時代に於いて、宋元の畫風より出で、一大流派を成し、もの二あり。即ち雪舟派と狩野派とす。今先雪舟派を敘すべし。

僧雪舟諱は等楊備溪齋、米元山主、雲谷等の別號あり。姓は藤原、氏は小田。應永二十七年備中國都窪郡赤濱今三須村に屬す。雪舟所産之地。梅花無盡藏

に「山谷先生畫像贊」叙に「桑城人」とあり。十二三歳の頃、その父これを同國井山の寶福寺に投じて僧と爲らしむ。性畫を好みて經卷を事とせず。師僧常にこれを戒め

しが、後その志篤く技妙なるに感じてこれを許せり。畫史曰、「一朝師僧大怒、縛雪舟於堂柱、日漸及暮、師僧又憐之、自到堂上、將解縛、索于時、雪舟膝下鼠驚走、師僧又驚、驟恐傷雪舟、急逐之、然鼠不動、搖師僧、僧恠見之、雪舟終日愁苦之所、致淚痕滴堂、雪舟自以脚大拇指點淚、滿鼠於堂板、其勢恰似活鼠奔走之體、於是師僧服其妙、自是後不戒畫」。壯年に及びて京に上り、相國寺に入りて春林周藤萬年廿六代、寬正四年寂を師とす。桂悟の「天開圖畫樓記」に依る、梅花無盡藏の「屏風雪舟楊公所畫」或は曰く、左

街僧祿司洪德禪師の弟子たりと。畫史此の頃同寺の都司周文丹青彫像の兩技を以て一世に重ぜらる。雪舟これに従ひて畫を學び、其心の天開

曰く、「案公之畫家之系、如拙翁之的孫、而所謂德元文公之眞子也。青出於藍、斯人云乎」。桂悟の同記に曰く、「親佩能畫師文公左券、竹居清事西遊集跋如拙畫後」に曰く、「雲谷等楊、海東善くその

法を得て更に新意を加へ、天才出藍、畫名忽ち京洛に高し。雪舟の相國寺に在るや、知客し客の職を勤む。故を以て、當時禪苑名流の詩文中、皆雪舟

を呼びて楊知客又は楊知賓と稱せり。雪舟の號は、その好みて集めたる古墨蹟の中、楚石の雪舟の二字を喜びて、これを用ゐしものなるこ

と、相國寺同慶軒の僧龍崗眞圭の「雪舟二字說」に詳なり。雪舟鎌倉に至りて建長寺玉隠永璵に從ひ、永璵爲に漁樵齋記を作り、仍りて漁樵を

その別號と爲せりと言ふ。畫史、畫は、永璵の「題漁樵齋」詩敘の文意、某人が雪舟の畫ける齋軸を齋して詩を乞へるものなることを誤解し、且

その永正九年即ち雪舟寂後六年の作なることを注意せざるに出でたるならむ。雪舟が京都より周防山口天花山下野田山の天花の米元山雲谷

寺に移りしは、何れの年なるや明ならず。或は寬正二年こゝに來りて雲谷庵を創すこ云ふ。惠鳳が細川勝元の使者西堂承勳の副使として、

山口に至れるは、寬正六年の事にして、この時惠鳳雪舟を訪ひ、「寄楊知客并敘」竹居清事西遊集を作りて曰く、「今筭維下登畫榜者、不過數人、里譚巷論、

兒童走卒、咸知西周有楊知客、予偶以事屆此間、一日扣蠅房、頗說前十年握手者、不能無故人之意、乃揮毫而作有聲之畫、以戲之云、京洛曾遊楊知

客、結茆此地、要終生、喜君畫格出天下、兒輩亦知雲谷名。又西遊集の「題江山小景」に曰く、「雲谷得意落筆、知るべし、雪舟當時既に雲谷に居り、畫

名早く京洛に轟きしことを、而して雲谷又雲谷軒の號は既にこの頃より用ゐしにて、入明歸朝後山口に住せるに始まりしに非ず。されば雪舟

が明より歸る時、明人徐璉が送りし詩の敘にも、「日本雲谷長老」と呼べり。應仁二年雪舟杏林良心其心の圖畫樓記に曰く、「公嘗南遊、余亦同舟」と同舟くして明に遊ぶ、或は

これを寛正六年とし、書史曰、寛正年中、乗海舶入大明、山縣孝儒雪舟、傳曰、寛正六年、或曰應仁元年、託海舶而遊明國。或は應仁二年建仁寺の清啓が足利氏の遣明正使として行けるに従ひしものと爲す。日本繪畫史清啓は寛正六年足利義政の命を受けしかど、故ありて遷延し、應仁二年に出發しつるなり。雪舟の入明を寛正六年又は應仁二年と

するは、何れも清啓の受命及出發との關係より出でし説には非じか。雪舟の歸朝を送れる徐璉の詩後につの序に、成化丁亥（即ち應仁元年）陪貢至鄞と

あり、又明の成化四年即ち應仁二年季夏、明人純拙老人魯庵が雪舟に贈れる詩の序に、「自去歲遊四明、陞天童山第一座、茲因朝京、詣余丈室、

と曰へるに考ふれば、應仁元年入明せしこと疑なく、その歸朝の文明元年なることは諸書的一致する所。雪舟傳曰、居五年、至文明元年、始歸國矣。明に在るこ

と三年なりしことは、了庵桂悟の天開圖書樓記更三霜而歸本朝及梅花無盡藏の「屏風雪舟楊公所畫跋」「扣大明國者三霜」等に依りて明なるを以て、應仁元年即

ち雪舟四十七歳の入明と爲すを正しとすべし。桂悟の圖書樓記中に「成化四年入大明」とあるは、その京に入りし年を謂へりと見るべか

らむ。想ふに、雪舟は桂菴玄樹が同年明に使せるに伴ひしならむ。桂菴號を島隱と云ひ、周防山口の人なり。その詩集島隱漁唱の一詩序に曰

く、「予嘗以日域應仁元年、奉使而赴中華、其翌年在燕都、早朝大明宮、實成化四年戊子春」と見るべし。雪舟の入明及上京のこれに同じきを、雪舟

明に入り、四明天童山寧波の東の六十清里の第一座と爲りしことは、著名の事實なり。梅花無盡藏屏風畫跋曰、入四明之天童、而位于板首、同書山谷先生畫像贊序曰、入天童補舍、歷第一座、同書題雪舟楊知賓之小軸註曰、雪舟南遊、在天童山、轉位第一座、故畫軸之上、自書云天童第一座

と交渉あるに非ざりしならむ。半陶集の楊知客筆四景圖の賛に、「挾藝遠往中華、天子觀其畫、以爲國奇寶、非有詔不得畫、遂命爲天童名山第一

座、以旌其藝焉」と曰へるは、信じ難し。入明の翌年上京せしことは、又前記魯庵の詩序にて知らる。明應四年雪舟が門人宗淵に與へたる自畫

破墨山水雪舟畫集に出づの題記に曰く、「北涉大江、經齊魯之郊、至于洛、求畫師、雖然、揮染清拔之者稀也、於茲、長有聲并李在二人得時名、相隨傳設色之旨

兼破墨之法矣。」雪舟の明より齎せし樹石の畫本一軸ありて、雪深等澤後につこれを傳へたりと云ひ、その縮圖載せて古畫備考に在り。雪舟が

等悦に與へし畫本の奥書に曰く、「予嘗南遊、看中朝名手畫、以彥敬爲師者多矣、爾來予亦從一時之好、凡畫山水、則爲效顰于彥敬、吾從等悦、求畫

本、仍寫此與之。」吳興夏士良曰、「高彥敬筆意、作者鮮及、悅其勤哉。」文明六年甲午正月下院、大明國明州天童第一座、雪舟大。その請益せし所以て知るべし。さるを、本朝畫史に曰く、「在

明也、問當時能畫人、明人曰、「今世能畫不乏其人、就中李氏張氏推爲一雙高手、舟見其畫曰、「我遠遊明、其志在求畫師、今見二氏跡、不足學、然則、大明

國裏無可師之人、唯明國名勝之地、山川草木、是我師也、然則、師在我、不在人、豈他求乎、自是激勵不怠、圖畫爲奇。」これ雪舟のみづから言ひし所と

同じからざるを以て、固より信すべからずと雖も、雪舟の畫を以て、往々我が國に傳存せる李在の作に較ぶるに、畫風の頗る異なるを見れ

ば、たゞ畫法を問ひしに過ぎずして、必しもそを撫倣せしに非ざるべきのみならず、雪舟の畫く所、元來主として支那の山水景物に在りし

が故に、歷遊の間、畫材を自然に得たるもの多かりけむことは、その遺作にも著し。されば良心の圖書樓記にも、歷覽乎天下之名山大川、以都

邑之雄富、州府之盛麗、及九夷八蠻、并服縑衣、異形奇狀之物、一々摸寫、以得之於手、而應心、則其畫意濶而大者、不言而可知矣」と曰へり。かくて雪

舟の雄富、州府之盛麗、及九夷八蠻、并服縑衣、異形奇狀之物、一々摸寫、以得之於手、而應心、則其畫意濶而大者、不言而可知矣」と曰へり。かくて雪

舟は、日本人と云ふを以て珍重せられしにも由りけむ、その畫名は頗る明國に喧傳せりと見ゆ。されば魯庵の詩序に曰く、日本僧楊雪舟者、天性善畫、於佛菩薩羅漢等像、援筆立成、生意逼真。毛利家所藏の山水長卷に附して、明の烏鼠道人が雪舟に贈れる詩あり。その序に曰く、「日本等楊禪師、法號稱雪舟、畫山水最妙也、奇絶之餘、書以贈之云。」その京に入るや、尙書姚公の命を奉じて、禮部院の壁に畫く。その事良心の圖畫樓記に精し。曰く、「向者、大明國北京禮部院、於中堂之壁、尙書姚公命公、令畫之曰、凡外蕃重譯入貢者、殆到二十餘國、未見如公之所畫、況又本部司科舉事、則中朝名士莫不升斯堂者、及是時、而召諸生、指壁上必言、是乃日本上人楊雪舟之墨妙也、外夷而猶有斯絶手、二三子何各勤汝之業、以不到于斯域乎、方於大邦見加賞歎、若此也。」梅花無盡藏、屏風畫跋曰、大明之君臣瞻之絶倒、遂受官命、畫禮部之院壁、姓名共雲霞飛翔矣、雖非祖師文字之二禪、嘗其一藝而得至妙、則豈非本邦之光華乎哉。梅花無盡藏の雪舟が金山圖を作りて贈りしを謝する詩に曰く、「翁昔南遊海外、閑三年、著眼飽看山、春風禮部題名後、四百州橫一筆間。」雪舟弟、其禮部院壁上。雪舟が明人の請に應じて富士三保、清見寺の絶景を畫き、當時の鴻儒詹僖字仲和これに題せしことは、本朝畫史に見えたり。雪舟弟、其禮部院壁上。蕉軒日錄文明十八年三月十四日の條に曰く、「予出雪舟所作之蕉庵軸、而示之西（來朝の支那人、金子西なり）云、日本人甘蔗ヲ沙唐ト云、中寧波府南門金湜家、有日本等楊所畫三咲圖、南山四皓圖、壁之左右掛之、湜今年七十六歲也、大官人也、詩畫俱妙也、成化五年即ち我が文明元年中夏下瀬、去りて日本に歸る。四明の徐璉字希賢これを送るに一律毛利公を以てして曰く、「家住蓬萊弱水灣、丰姿瀟灑出塵寰、久用詩賦超方外、賸有丹青落世間、鷺嶺千層飛錫去、鯨波萬里躡杯還、懸知別後相思處、月在中天雲在山、」歸朝の後、豐後府内の西北隅に天開圖畫樓を構へて居る。梅花無盡藏の屏風、雪舟公所畫、文明三年三月三日、洛東の杏林良心爲にその記を作る。畫師楊公雪舟、相攸勝地、豐府西北之隅、築一小樓、題曰天開圖畫、滄海接前、群峰連後、孤城左聳、二水右流、位置勢排、千變萬態、天即留神品、以之不在開張、於此境而何也、顧其以樓上景致、而擬此公之筆跡、則太山之於丘壑、之類也、筆跡甚高、而景致彌低、何其有然也、下署杏塢、杲夫、良心、誌之。この頃、筑前葦屋の釜工雪舟の畫を乞ひてこれを鑄る。その圖樣松杉梅竹等多く、茶家これを珍賞す。後山口雲谷庵に移り、又天開圖畫樓を建て、住す。東福寺の了庵桂悟又その記を作れり。文中曰く、「爾後來防城郡府、卜地而新築之、望之若村塢、然、岩石之幽、遠流泉之榮、迴、跬步之際、與城市皆霄壤、亦以天開圖畫、顯于小閣北牕、（中署昨寄一幀子、乃天開圖畫樓記、洛東釋杏林公文以題之、）中署老人在豐之日所施設也、若是雲谷易地皆然、胡爲請了疏、連源委、姑質之雲谷老人、（中署終爲天開圖畫樓之後記、漫于壁陰、前洛東慧峰、無價主人了庵桂悟、）今その舊址に、近ごろ再興せし雲谷庵あり。古畫備考に、高野山成慶院に、大内義興の寄附せる、雪舟の明の天子より賜はりし釋迦三尊及十六羅漢等の像亦稱檀尊像、黑漆厨子入也、裏書雲谷雪舟有之、唐帝守本尊、讓與雪舟云々、あることを載せ、その添狀好便之條、一筆申候、仍此尊像、雲谷雪舟、於漢朝被顯圖畫候、依其觀感、被下賜此旨可有演說候者也、三月十一日、三位判宮内卿殿（成慶院）廿三世、法印秀筆をもち上げた。雪舟の豐後より周防に移れるは、蓋し大内家の屈請に由りしならむか。後石見國美濃郡益田に移る。山縣孝孺の雪舟傳には、大内侯曾て明畫を購ひて雪舟に示し、に雪舟これを見て、己の在明中の作なりと言ひしかば、侯信ぜずして怒り、雪舟仍りて石見に行けりと爲せり。雪舟の歿後、改裝の爲にその絹を洗ふに及びて、雪舟の名識露れ、侯始めて詐ならざりしことを知れりと云ふ。されどこは雪舟を崇拜するの深きよりして作爲せられし傳説ならむ。益田は即ち今の男爵益田家の舊居城なり。同家の傳説に依るに、雪舟大内氏を去りて益田氏に寄る。益田兼堯これを善遇し、城下の醫光寺に住せしむ。後城北の乙吉村今吉田村の内に退隱す。大喜庵今相續庵、これなり。益田家珍藏する所の兼堯の壽像後には雪舟の作なりと云ひ、圖上に文明十一年中冬周鼎の題賛あり。文明十五年兼堯の孫宗兼の



雪舟墓 十三 圖小

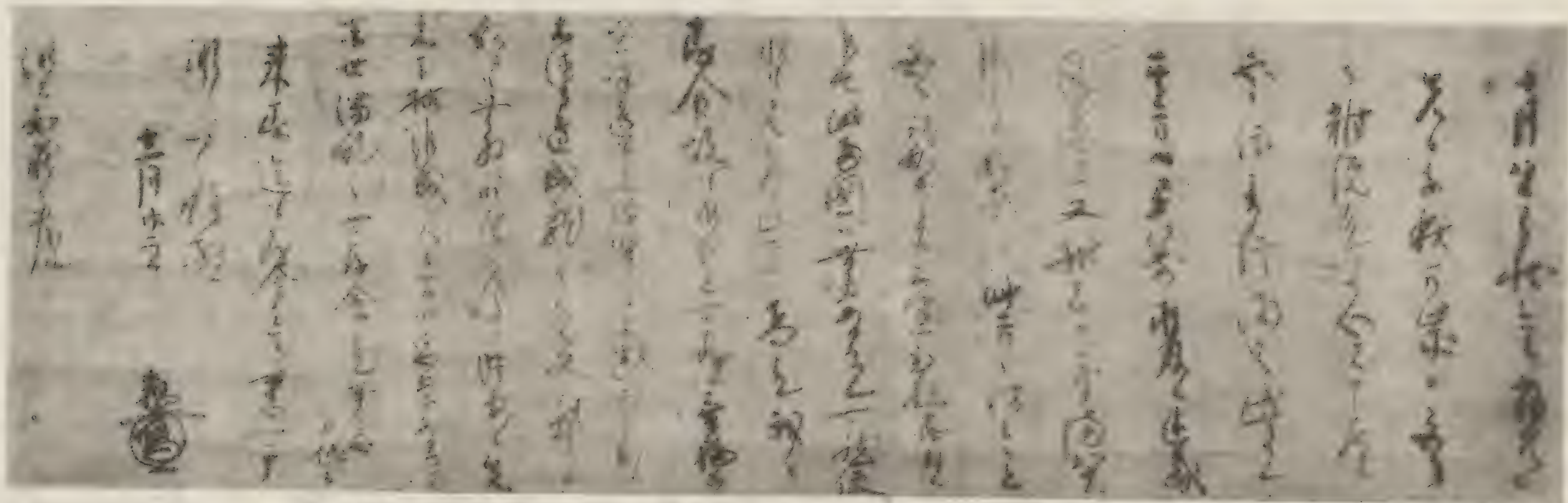
日、研丹涉月、志倦神疲之時、凭欄一拍、披襟當風、屢蘇息、褰肺、以寓意於繪事。桂悟の同記に曰く、賢太守（大内時々周旋于此、消搖於此野客官僚、好事之儔、接踵而至。梅花無盡藏の山谷先生畫像賛の序に曰く、及鼓舫棹、丹青之妙無出其右者。半陶集四景圖詩の序に曰く、一朝歸來、聲價十倍。その當時に重ぜられて、遺作の今に傳はれるもの多きも、誠に偶然に非ざるなり。平生交はる所、皆禪苑の名流にして、五山の詩文集

中、雪舟の畫事に關する唱酬題賛の作頗る多し。宜竹殘稿に題楊知客畫三首、空華集に次韻忠大本寄題天開圖畫二首、島隱集に雲谷老禪所畫琴高列子二墨人贊、猿吟集に天開圖畫（亭名）竹居清事西遊集に寄楊知客并序、題江山小景、梅花無盡藏に雪舟楊知客贊爲余作金山圖此詩以謝之、山谷先生畫像贊、題雪舟楊知客贊之小軸、屏風雪舟楊公所畫跋、半陶集に四景圖、景一幅、楊知客筆、臥雲日伴錄に諸贊四首、楊知客所造走筆、胡蘆集に題楊知客畫二首、角虎集に題雪舟畫本あり、その餘前出の雪舟二字、說、圖畫樓記及雪舟眞蹟畫幅に見ゆるもの少からず、古畫備考に村庵の題楊知客贊所畫山寺圖、臥遊道人中衡の題畫師雪舟授筆法於淵藏主圖、周省の山水畫贊、了庵の同圖、追賛、龍澤及周麟

贊の晴雪齋圖足利義政曾てその東山の殿舎に畫かしめむ（雪舟狩野正信を薦めてこれに譲れり。畫明の魯庵の詩序に曰く、絶無計利、凡求索者、徧應無拒、故人皆德之。徐璉の詩序に曰く、日東雲谷長老冲淡人也、（中）而性無所嗜。桂悟の圖畫樓記に曰く、天資淳謹、梅花無盡藏の屏風畫跋に曰く、雪舟當欲畫之時、先斟半器之淥、快吹尺八數聲、或唱和歌、或吟唐詩、箕坐盤礴、而後吮筆和墨、臨紙意氣揚々、如龍得水、（中）乘興而遊戲諸州、行履無滯、有風塵表之質。桂悟の圖畫樓記に曰く、老人竹椅蒲團爲侶、掃地裝香爲課、採花汲水、（中）主賓唱酬、風月來往、皆是天開圖畫中之一事。以てその爲人と風丰を想ひ見つべし。曾て明に在りて作りし清見寺の圖に塔を畫さしが、歸後清見寺を過ぎて塔なきを見、その

畫の終に虚ならむことを惜み、爲にみづから貲を集めてこれを建てき（云ふ横井時冬日は、果して事實なりや否やを知らず。雪舟の遺蹟、造庭及その開創と稱する寺少からず。備考に曰く、豐後日田來里村、有雪舟之舊跡、古謂醫王山正法寺、同郡中鶴河内、亦有雪舟舊跡、於此地瀧紙、名四方切、此紙畫散在於世也、豐前彦山龜石房亦有雪舟之筑山築後下妻郡小田村禪院山建仁寺有雪舟築山、同國高柳淹留之時、於扇之地紙描爲畫、寺ヲ創、丁三ヶ寺相ノ了義寺石ノイ

コウ寺、今一寺失念、各所ニ塔廟アリ、雪舟相州藤澤近所山田村ト云所ニ了義寺ト云禪寺有、（中）畧、雪舟再ビ是ヲ創シ、爰ニ住職ス、其寺ニテハ開山也トシテ、本尊ノ背ノ側ニ、雪舟ノ木像ヲ安置ス、梅花五尺許モ有様ニ、承ル左アラバ立像成ベシ、雪舟ノ塔所モ爰ニアリ、至テ小ナル禪ナル由、（中）畧、雪舟杉田東禪寺ヨリ、小田原龍華寺へ轉住ノ由、東禪寺コリヤリ和尚話、これ等尙後考ヲ期ス、



小 圖 第 三 十 一 雪 舟 尺 牘



小 圖 第 三 十 二 雪 舟 肖像

無盡藏の屏風畫跋には、「東遊在岐陽之靈藥山、追悼集の季英説には雪舟が徧く河内の名藍を訪ひしこ
 こなぞ見えれば、廣く諸國を歴遊せしならむ。庭園の築造も雪舟の好める所にして、頗るこれに長ぜ
 しものとおぼし。徐璉の詩序に「能詩」と曰ひ、その送詩中に「久用詩賦超方外」とあり。雪舟の詩にして傳は
 れるものは、自畫山水賛〔洞庭日本一、天秋月夜在風波、穩處流、蘆荻洲前、明似畫、君山影、落釣魚舟、前東瀛雪舟更〕、布袋自畫賛〔不覺不知、獨往無益、不和不食、俱佳無益、不勝放逸、持戒無益、用心、膝味、坐禪無益、行學徒、絕僧形、無益〕、渡唐天神墨畫賛〔無清、沅江現神通、千里飛梅、一夜松、萬事夢、羅山吐月、觀音等〕等あり。その文には、
 前にも言へる破墨山水の題記〔相陽宗淵藏主、從余學畫有年、筆已有典刑、游意於茲、藝勉勵尤深也、今春告歸、謂曰、願獲翁一圖、以欲爲我家、畫後之、間、而彌仰兩翁心識之法矣、〕に至る。數年而歸本邦也、然知吾祖如拙周文兩翁製作、皆一承前輩作、敢不增損也、歷覽支、
 〔北涉大江以下〕破墨之法矣、〔至る〕數年而歸本邦也、然知吾祖如拙周文兩翁製作、皆一承前輩作、敢不增損也、歷覽支、
 等あり。尺牘亦一二を傳ふ。その古畫備考に錄せるものに曰く、「山水のおもむきは、木だち物ふり、はるか
 に幽微なるよく候。筆がるに、馬遠、夏珪などの筆のあとをも、として御まなび候が、第一の御稽古にて
 候。唯別物に似を畫させず、古人も申おかれ候へども、みななくぜんの景色、畫の師にて候。〔雪舟花押〕以て雪舟
 の學畫に關する所見の一斑を察するに足れり。〔末松子爵所藏尺牘に曰く、〕十月八日御狀今日拜見候、先々千秋萬歲候、色々之難
 我々存命故も候哉、可存候、乘福寺岩和邊も、老僧堅固候、不斷被申出候、大德寺邊成就候ば、是又可然事候、何にも無爲に御座候ば、人事肝要候、先天下

様難成見候間、御思案あるべく候、末世濁亂之時存命候て、無念至極に候、來春迄も存命候ば、重而可雪舟が延徳二年みづから畫きて門人秋月に與へし半身の壽像原本何中承候、恐々謹敬十一月廿二日、等楊花押淵公知藏貴報（明應九年宗淵に與へしもの小圖第三十二）雪舟が延徳二年みづから畫きて門人秋月に與へし半身の壽像原本何中承候、恐々謹敬十一月廿二日、等楊花押淵公知藏貴報（明應九年宗淵に與へしもの小圖第三十二）雪舟が延徳二年みづから畫きて門人秋月に與へし半身の壽像原本何中承候、恐々謹敬十一月廿二日、等楊花押淵公知藏貴報（明應九年宗淵に與へしもの小圖第三十二）

ずこ云ふ。史畫雪舟の印には鼎形白文、圓内方形朱文、方廓内白文及方形重廓朱文の「雪舟」、方形白文及瓢形朱文の「等楊」等あり。款識中間「前東禪雪舟叟」こ記せるものあり。東禪は前註にも見えたる杉田の東禪寺なり。

雪舟の畫風
及遺作

雲舟の畫系は如雪、周文より出でしこ言ふに及ばずこ雖も、畫風必しも周文の畦蹊を步趨せず。されば興彥龍は「雪舟從之（彌）學畫、有寒氷青藍之作、」（半陶集四）と曰ひ、又「雪舟於藝、神品妙品、實千歲一人而已」こ曰ひ、惠鳳は「楊雲谷、蓋慕顏秋月、常牧溪之爲人、以傳染居於人之上者也」（居竹清事西遊集「寄楊知客并叙」）と曰ひ、良心の圖畫樓記には評して曰へらく。「余竊閱古今之畫評、假雖爲一世之名工、而僅能一二之樣耳、到公之活法、不翅兼備其衆體、看畫臨摸、莫不咄々逼眞也、道釋人物、依據於唐之吳道玄、宋之梁楷子、山水樹石、或出馬遠、或入夏珪、水墨淋漓、自然有雅趣者、西湖之僧若芬之流也、掃出雲山、驚動人之耳目者、西域畫者之孫高彥敬之亞也、水禽山獸、則齊于長沙之易元吉、花鳥著色、則類于雪溪之錢舜舉、龍虎猿鶴、蘆雁白鷺、粗學法常、不師其蠱惡、墨鬼鍾馗等、頗及於龔翠岩之怪矣。漆桶萬里曰く。「着眼於江山而得其意、粉墨之妙、悉究六法三品六要六長、畫者之法、其氣韻活動、出於天成、人莫測其巧者、可謂神品之上々也」（梅花無盡藏）本朝畫史の品第頗る肯綮に中れり。曰く。「至其妙處、則得之天性、不踐古人蹤跡、而既立一家、尤長於山水、人物次之、花鳥又次之、兼善牛馬、而龍虎次之、凡於人物牛馬、一點筆而成、此法始自雪舟、常好水墨、少設丹青、專尙風致、故大抵寫意、不求形似、筆力位置、清氣豪放、聊有無墨法、但傳于世者、無不至妙也」（中畧）鋪排草々而成矣、體裁奇々而出矣、先輩稱畫中三昧手、宜哉。要するに、宋元北畫の精粹は、盡く雪舟の爲に奪ひ來られて、集成して以てその能事を成し、又高克恭等を慕ひて、宋元古南畫の趣に兼ね長じたり。さればその老勁の筆致、蒼雅の墨情に至りては、馬遠、夏珪と雖も、恐らくは一籌を輸せざるこ難かるべく、如雪、周文の如きは、固より背後に瞠若たらざるこを得ず。眞に我が國古今第一位の山水家なり。たゞ人物、花鳥は稍これに及ばずして、固より雪舟の長所に非ず。然れども尙決して凡手の企及すべき所に非ざるなり。その遺作、傳存頗る多し。これを觀るに、畫風の變化少からず。左にその題科を別ちて各種の優品を掲ぐ。

第百五十五 雪舟筆雪景山水圖

第百五十六 同筆峰巒競秀圖

第百五十七 同筆山水圖長卷一部

第百五十八 同筆夏冬山水圖雙幅二圖

第百五十九 同筆壽星及夏冬山水圖三幅對三圖

第百六十 同筆破墨山水圖

雪舟の山水には略三體の變化あり。雪景山水、峯巒競秀、山水長卷、曼殊院の夏冬山水等は、老勁の筆、蒼雅の墨、最も雪舟の秀絶なる長所の特色にして、遺作中多く見る所とす。壽星圖を中幅とせる左右の夏冬山水圖の如きは、前者の宋風院體の精粹なるに反して、輒雅の用筆、謂はゆる披麻の皴法に類し、頗る南宗畫に近きものなり。前に述べたる能阿彌、相阿彌等の祖述せし所とは格調を異にすと雖も、雪舟のこの種の作は、我が古南畫の一體たること言ふを須ゐず。これその往々高克恭等に倣ひしより來れるなり。破墨法に屬するもの、又別に一体を爲せり。明應四年門人宗淵に畫き與へし山水圖(帝室博物館藏、雪舟畫集に出づ)等と共に、その畫風は即ち張有聲、李在より學び得し所に係り、洒脫の妙味おのづから別調を具ふ。その餘多少の變化あり。黒田侯爵家所藏の富士を中幅とせる左右の徑山、金山二圖(雪舟畫集に出づ)の如き、破筆頗る健跋なるは、即ちその一例とす。

雪景山水には蘭坡景菴(南禪寺僧、文龜元年寂、天隱龍澤、建仁寺僧、文明頃)二人の賛あり。峯巒競秀圖にも二賛あれど、その人を詳にせず。山水長卷は卷末に「文明十八年嘉平日、天童前第一座雪舟叟等揚六十有七歲筆受とあり。これに附して、明人烏鼠道人の雪舟に贈れる詩、文祿二年雲谷等顔の本卷を藝州太守より得しことを記せる文、及北海筠溪の跋文一卷を傳へたり。

第百六十一 雪舟筆花鳥圖屏風一雙全面二圖及その一部分

雪舟又往々花鳥を作り、或は水墨、或は設色を用ゐき。その畫風、樹石は前記勁筆體の山水に同じく、花葉、翎毛、設色のものは、勾勒の黃氏體に屬して而も甚淡泊なり。水墨の花鳥に至りては、草筆疎雅の趣味、その破墨山水と相似たるものあり。こゝに掲ぐるは、即ち前にも言へる益田宗兼に獻せし屏風にて、文明十五年雪舟六十四歳の作に係る。

第百六十二 雪舟筆鳥窠和尚圖

第百六十三 同筆益田兼堯壽像

雪舟又能く人物を書けり。多く道釋とす。畫趣、筆致竝にその山水と髣髴たり。往々勁輒の變化を見る。前出の壽星及鳥窠圖(懶山圖と雙幅、懶山圖は雪舟畫集に出づ)の如きは、即ちその勁筆の好例たる佳作とす。益田兼堯の壽像に至りては、實に雪舟人物畫遺作中の珍品にして、平生の疎雅と全くその畫風を異にし、謹巧稀に見る所たり。文明十一年雪舟六十歳の筆とす。

雪舟の門下頗る多し、その直接に教を受けしと見ゆるは、等悦、等觀、宗淵、周德、周耕、宗悦、季英、等本等とす。等悦俗姓は松田。畫史に曰く、畫大黒并雜圖、筆意學雪舟。文明六年、雪舟より高克恭に倣へる畫本を授けられき。その跋は既に出せり。古畫備考拾彙を引いてその跋文を掲げ、且記して曰く、右豐之前州刺史細川氏之家中松田圓齋所持之畫本、奧書也。等悦者圓齋先祖也。按傳聞、此畫卷、後年裁爲二、其有跋一卷、爲丙丁亡、今不傳矣。予既得展觀、雲山景趣、眞堪賞、今爲侯家珍藏云。島隱漁唱に、題畫工悦書記扇面詩あり。曰く、雲幾重山接水光、島陰茆壁我漁房、就君欲借畫工手、船尾添僧記謝郎。この詩桂菴玄樹が明應二年九州に遊びし時の作とおぼしければ、等悦はその頃も九州に居りしならむ。備考には更に、等悦山水秋月の如く、禿筆にて塔など書す、按畫纂に、等悦の瓢印に三谷といふあり、是は別人にて雲谷派なり、玆に出す等悦にあらず、混ぜべからずと記して、等悦の白文方印を掲げたり。

等觀秋月の傳記は、備考錄する所の三曉菴談話記最も精し。曰く、秋月は高城權頭と言し人にて、東郷澁谷氏杯兄弟にて、東郷高城を一所に持、大中公御代、合戰致、皆々隨身仕候處、權頭一人相見えず。何方へ遁行けん、又は討死にても致候哉。數年尋候處、周防山口の雲谷寺雪舟弟子になり出家致居候由相聞候。兄弟の内差越、大中公へ一門皆々隨身致候、難有被召仕候間、其方にも歸國致候様、段々中聞候ニ付、同州神島筋罷通、庄内へ參著之處に、大中公へ御目見仕、難有御意を蒙り候人にて、落命の地、加治木にて候。庄内山伏の總職十福房等見は、先弟子になり、一番弟子にて、其流儀庄内には數々有之候。繪能無之。秋月庄内より福昌寺に差越、桂菴和尚（福昌寺九世桂山の誤なるべきこと、註に見えたり）へ謁し、自畫賛を取出す。和尚被見、師匠雪舟繪は能候へ共、字形又讚等は、其方程に無之と被申候由。秋月俗體の時の子あり。高城十左衛門先祖之由、其血筋の人直話之由。畫史には、從師入中華と曰ひ、秋月の畫欸常に「入唐秋月」又は「在唐三年」など署したれば、雪舟に從ひて入明せしならむ。延徳二年雪舟が自筆の像を秋月に與へしことは上に見えたり。秋月の薩摩に歸りしは明應元年の事なり。島隱漁唱に曰く、秋月緇郎、薩之產、而遊藝于中州、年既久矣、專師雲谷翁、畫工究其妙焉。壬子之秋、錦旋以爲榮、於是、福昌老師飭客軒而居焉、玆歲雞日、寫山水一幅、傍題詩、以希家國昇平也。於戲乎、詩也畫也、二美備矣、實可嘉尚者乎。仍庚韵綴三章。西南極地薩陽城、世出名緇誇價聲、此老能詩又能畫、心如水鏡自清平。官軍超海夜圍城、畫角吹殘月下聲、一陣東風雪消盡、繞花啼鳥語昇平。中州要路赤間城、舟子朝々喚渡聲、君說東遊我傾耳、寒垣風物恨初平。秋月の書詩に兼ね長じたりしこと知るべきなり。その享壽及歿年は明ならず。たゞその畫欸に依りて、七十歳尙世に在りしことを知るのみ。その畫印には方廓内圓形朱文及方形白文の「等觀」、鼎形内「秋月居士」、方形朱文の「入唐秋月居士」、「東海秋月圖書」、「日本薩陽釋氏等觀」等あり。畫史秋月を品して曰く、能雖得其所傳、聊出己意、而長於水墨雜畫、標格清秀、勝於諸徒、故秋月所畫、其無印者、世人誤爲雪舟筆、其爲潑墨、筆愈簡而氣愈壯、品目甚高。備考三曉庵談話記に、秋月が門人等坡に畫き與へし玉澗流八景圖の事あり。その中に曰く、夜雨を書候畫に、戲做玉澗筆意、附與等坡公、入唐秋月と有之候。それはく見事にて候珍物にて候。

第百六十四 秋月筆山水雙幅二

第百六十五 同筆瀑布水禽圖

雪舟門下秋月も秀で、善く師風の的傳を得たりたりとは、既に定論たり。たゞその布局、樹容稍緊肅を缺きて、雪舟よりも少しく散漫なる所あるのみ。山水雙幅最もその特色を認む。瀑布水禽圖は山水と花鳥との折衷とも謂ふべき圖にして、前者の如き散漫の弊あることなく、殆ど雪舟の墨を摩すと評するに足れり。

宗淵

宗淵は雪舟のこれに與へたる破墨山水あるにて著れたり。畫史に曰く、僧宗淵字如水、相陽僧也、又自書畫中曰、オ、子、師雪舟、筆差細、其山水彩墨、有咫尺千里趣、中翰林葫蘆集曰、如水宗淵、禪誦之暇、遊意於殷濟川、常牧溪之戲墨、以西周之雪舟爲師、親炙之者有年矣、獲究其妙也、一日訪予宜竹之室、出小橫畫、以見示幻作、彼所謂玉津島和歌浦者、小詩三章題其上、亦所自作也、請題其後、瑞龍雪樵老師已有贊辭、胸次瀟灑、頗得趣向、又雪舟畫自像、有附宗淵藏主、備考に手鑑にて見たりとて臥遊道人中衡清が題畫師雪舟授筆法於淵藏主圖詩二首を録せり。曰く、胸中醉墨最奇哉、咄作酒旗山水隈、因憶聖門論繪事、芳名惟數一顏回。能畫師雪舟師、予舊識也、因拙語示的嗣如水知藏。如水不波心是水、有雲生谷迹同、

周德



小圖第三十三 宗淵筆山水小景圖

雲、阿翁毫末渾多了、今古江山說與君。宗淵の畫印には、方形朱文の「如水」、坦齋が「頓首再拜」と讀める朱文方印、壺形の「案雪」等あり。その跋陀羅菩薩漢羅像圓覺寺に在ること鎌倉志に見え、備考には渡唐天神圖等の落款、韋駄天の縮圖等を載せたり。こゝに宗淵の一佳作山水小景小圖第三十三、福岡孝弟子爵藏紙本墨畫、縦一尺三寸、横九寸八分を掲ぐ。その畫風の頗る疎淡なる、別に一家の調あるを観るべし。

周德の傳は畫史の外所見なし。曰く、僧周德號惟馨、師雪舟、山水戲墨甚似雪舟、眞體傳彩剛眞、而有無墨之法、余近觀墨山水、畫上有龜陰僧周良贊、云、雲谷庵主周德藏局、以繪事鳴西周者也、其徒波月等薩、出紙以見需畫本、周德所筆、寫玉礪所摹之佳山水、以付焉、然則周德者雪舟之高弟、而爲雲谷庵後住者乎。備考の系圖に「字等雪」とあり。畫印に「周德」の朱文重廓方印後出の布袋圖に在り及「周惠」の白文方印備考にあり、尾張名所圖會には、名古屋興國山大光院に忠吉公寄附の達磨像ありし由見え、古畫備考には佳境甘蔗道人、乾瞳前福山昌忠

の賛ある山水建長寺に在りと言へりの縮圖を掲げ、甚周文ニ似テ、雪舟ノ所少シ、周文ヨリ疎ナリ」と曰へり。

第百六十六 周德筆布袋圖

周德遺作中の佳品なり。洒脫の畫風おのづから師家と異なりたる一種の妙味を具ふ。賛者宗桂千林は、大徳寺第八十五代にして、天文十二年二月十五日に寂せし人なり。

周耕

周耕は和州多武峰の僧。畫を雪舟に學べり。畫史に曰く、「善畫水墨山水、艸々而成、極似雪舟矣、人物花鳥次之、又畫鍾馗像、然有靈焉、曾從雪舟遊于中華、故其印文書曰東海周耕」。備考に性智、大椽の賛ある山水（壓紙、畫至テ佳、雪舟ヨリ周文ニ似タリ）萬里の賛ある墨梅及枯木翠鳥圖の縮圖を載せたり。畫印には「扶桑周耕の長方朱文及周耕の壺形等あり。こゝにその遺作鍾馗圖（小圖第三十四東京美術學校藏、紙本墨畫）を掲ぐ。老勁疎朴の秃筆能く師家の衣鉢を傳へたるを

宗悦

觀るべし。

雪舟の一門人宗悦は、畫傳の諸書これを逸したり。たゞ蔗軒日録に依りてこれを知る。同書文明十八年三月十四日の條に、明人金子西の言を録して、先（先に雪舟の傳中に）楊之弟子宗悦ト云者之畫、在唐禪人皆美之云。秋月も周耕も雪舟に従ひて入明せりと云へれば、宗悦と共に合せて三人隨行せしにや。或は知らず、宗悦は周耕の一名にもや。こゝに附記して後考を期す。

等澤



小圖第三十四 周耕筆鍾馗圖

等澤雪深と號す。拾彙に曰く、「雪舟弟子、工畫」。先に雪舟の條に述べし樹石の畫本は、即ち等澤に授けしものにて、その奥書（備考に出づ）に曰く、「此一軸者、雪舟渡唐之時、求來之繪本也。然自雪舟余相傳之、誠雖爲家祕傳書乎、其方事、云親族、其上依畫工之弟子、而與之者也。聊以卒爾、勿免附與他人乎云々、可深祕矣、于

季英

時永祿十九（九は誤なり）年冬日、雪深等澤（花押）。

季英は畫史に「僧季英名周孫、河内人也、學畫於雪舟、得師傳、能雜畫」とあり。備考に引ける追悼集の季英説あり。曰く、「雪舟座元、（中）遍訪河内名藍、駐歸旆諸道傍、次于此、（中）有悦子名周孫、需字余、余雅以季英畫格驚人、咄々逼真、（中）出季運之出、騰筆端之英、（中）遂書以爲季英説」。便覽に曰く、「筆力形似、一々學周文、最可稱」。古畫備考の系圖に、「等悦書記、山城人」とあるは、前出の等悦か。或は季英説中言ふ所の悦子即ちこれか。明ならず。

等本

等本は畫史に「畫法出於周文雪舟、其山水花鳥有師傳、所畫扇面多」とあり。備考に角虎集を引いて曰く、「題雪舟畫本、（略）雪舟近世之牧溪、玉澗

也、特爲等本「掃墨」二帖、蓋畫家傳衣鉢也。同書存「畊祖默」の賛ある山水を録し、その瓶形等本の印を掲げたり。便覽に「其圖畫多在于常與二州雪村門人」と曰へるは、如何にや。

雪舟風の諸家

拙宗

雪舟の畫名籍甚するや、天下の畫人靡然としてその畫風を慕ひき。されば、雪舟の法を學ぶと傳へ、又は雪舟の筆に似たりと稱せらるゝ者極めて多し。就中その名稍著れたるは拙宗等揚、楊月、雲溪及山田道安等の數家とす。拙宗等揚は畫史に「僧等揚不知世姓、自書畫後、曰「日本禪人等揚筆、有二印、一曰等揚、一曰拙宗、墨畫學周文、極似等楊、或謂等楊始用楊字、後改揚字也、不知其實否、蓋其徒之傑者乎」と曰ひ、その落款及拙宗の朱文方印を載せたり。同書又別に拙宗を擧げて、「畫墨觀音、出白周文筆意」と曰へるは、即ち同人なり。その雪舟と別人なることは、遺作の畫風に由るも明にして、等揚は雪舟の諱等揚の楊字を換へたるに過ぎず。拙宗の二字、はたその吳音の雪舟に通ずるを思へば、深く雪舟を慕ひし人か。然れども、古畫備考に一休の賛ある文殊像ありしこ見えたるに考ふれば、或は雪舟以前の一名手にして、同書に一枚摺畫系ニハ周文弟子トス」と曰へるかた當れるやも知れず。その遺作、備考録する所、梁楷風張果老、雪舟ハ更ニナシ山水之景、並寫諸鳥之圖、付與池上與次郎等揚の款記ある畫本雪舟風手本卷物及半身達磨縮圖を載す等あり。畫印には「拙宗」の壺形印、等揚の白文方印あり。その落款、等揚の二字を聯綴して一字の如くしたるもの、備考増補に見ゆ。

第百六十七 拙宗等揚筆四季山水春夏二幅

拙宗の蹟往々傳存す。こゝに掲ぐるは遺品の尤なるものなり。その畫風の雪舟に異なるは、圖様、筆墨の頗る明の浙派に似たる所に在りて、規模雄大、技巧壯拔なるを見る。その雜畫往々周文に似たる古致あるものあり。

楊月は畫史に「僧楊月號和玉、本薩州人、居城南笠置寺、故世謂笠置楊月、師周文、雪舟、墨畫學牧溪、能畫山水、人物、花鳥、筆法太粗矣、然略有柔潤之體」とあり。古畫備考には、その遺作の山水に、文明十七年村庵の賛ある由を記し、李翱問道、月見布袋、破墨山水の縮圖及畫印を録せり。その印には「和玉」の長方白文、「臣僧楊月」の方形白文及「楊月」の重廓白文方印等あり。こゝに掲ぐる布袋圖小圖第三十五、建仁寺禪居卷、藏、堅一尺八分、横七寸一分以てその墨戲の風を見るに足る。

雲溪は諱を永怡と云ふ。本朝畫史に「諱支山、世姓土岐之種族也、故分岐字爲諱」と曰へれど、支山雲溪は相國寺の僧にして、畫を能くせしこ僧傳に所

雲溪

楊月



小圖第三十五 楊月筆布袋圖

見なく、明徳二年十一月十四日六十二歳にして寂せし人なり。畫史に「筆法學雪舟、能畫山水、人物、花鳥、略不相似矣、其畫軸皆有『天文年號』」こあるは、雲溪永怡ならざることを得ず。辨玉集に「雪舟ノ門入、高野僧」こあるは即雲溪永怡なること、その掲ぐる所の印文（雲溪の虛形印、永怡の朱文方印、備考、鑑定、便覽、收むる所の印亦同じ）に依りて明なり。別に筆室雲溪あり、後に出づ

第百六十八 雲溪筆山水圖

雲溪の遺品往々存ず。雪舟に似て筆墨の情趣稍異なり。こゝに掲ぐる山水圖の如きはその一佳作にして、以て雲溪の畫風を觀るに足れり。

山田道安

山田道安（安一に庵に作る）は大和岩掛の城主筒井の一族にして三代あり。福住卿山

田村に住せり。初代は諱を順清と云ふ。文龜頃の人なるべし。第二代は諱を

順貞（一に定に作る）と云ひ、從五位下、民部大輔に敘任せられ、天正元年十月廿一日卒

す。第三代は諱を順智と云ふ。慶長頃の人なるべし。この三人共に入道の名

を道安と號して、印章も同じかりきと云ふ。扶桑名畫傳本朝畫史に曰く、「山田道

安始稱民部、不知其諱、道安者剃髮之號也、世武門、而居和州福住郷、福住在春

日山南、或曰筒井一族也、性好能畫、師周文雪舟、又學宋畫、而用其意、然筆法疎

而草、其後三世工畫、而同印、然筆力有勝劣、又精刻木、曾南都興福寺西堂中、有

擊鳧鐘之小僧、爲賊竊去、道安重刻此像、或曰、東大寺釋迦像頭頂、爲松永久秀

被燒落、後道安出資財以補鑄之、可知、又其富榮有功、佛寺者也。畫工譜略には

「周耕ノ流下」こ爲せり。畫蹟の往々世に傳はれるは即ち畫史に出でたる初

代道安ならむ。されど民部大輔に任せられたるは第二代なるに、畫史には

初代が民部と稱せる由見えたるは、稍疑なきこと能はず。但し名畫傳に言

へるが如く、初代よりして通稱を民部と云ひしにや。こゝに道安の遺作山

水圖（小圖第三十六、原富太郎氏藏）を掲ぐ。以てその畫風の一斑を觀るべし。



小圖第三十六 山田道安筆山水圖

上記四家の外、雪舟派を見るべき諸家略左の如し。

甫雪等禪 畫史に曰く、「師等楊、而畧相似矣、時々用己意、又學於宋元名書法、便覽蒲雪に作りて曰く、「住松浦、不知何人、師雪舟、其形似能學得舟、舟云、蒲雪之所畫、形似而已、不逮書於意、備考には「甫雪筆」の落款、甫雪の鼎形及「等禪」の白文方印を掲げたり。某書別に出せる等祥は等禪の誤なること、備考に辨じたるが如し。同書又別に東陽を挙げ、「山水甚拙」と曰ひ、「東陽」の朱文方印を載せたれど、増補には「東陽、等禪ノ二印併捺シアレバ、東陽亦等禪ノ別號ナルカ」と曰へり。

甫舟等元 畫史に曰く、「書壽老人、筆法學雪舟、印文有等元之字、畫印には鼎形の「甫舟」、方形白文の「等元」あり。

周陽 畫史に曰く、「畫墨鐘馗、學雪舟」。

周元 畫史に曰く、「畫半身達磨、筆法出自雪舟、潑墨尤清雅可愛、備考に曰く、「其畫山水、紙本豎幅、似周文、禿筆ハ雪舟に似、不精工、上有建仁東輝永杲和尚題詩、永杲ハ文明、永正頃人」その印文、方形白字の「周元」あり。或は曰く、「周一」なりと。便覽に曰く、「周之、不知何人、師周文、甚佳、作圖繪少、蓋し同人か。

照陽 畫史に曰く、「僧照陽、不知世姓、書法學等楊、而善相似矣、間有水冰之作、但其氣弱耳、畫印に鼎形「朱玉」の文あり。

楊富 畫史に曰く、「楊富好畫達磨像、學雪舟、方形白文「楊富」の畫印あり。

楊溪 畫史に曰く、「僧楊溪、能畫墨達磨、學雪舟、每畫自贊其上、その落款及奇形の畫印同書に見えたり。

等歳 畫史に曰く、「僧等歳、不知世姓、九州人、住高野山、師雪舟、能畫、然筆力稍粗而不相似、便覽には「精應鵠」と曰へり。備考に寄菴の賛ある壽老の縮圖を載せ、「紙立、對月、上に今世沙彌賛あり、拙弱、枯木翠鳥、七絶賛蘭景、墨地紙形、羅漢觀音立像」等の遺作を録し、「宗氏半雪」の朱文及白文方形の「等歳」の印を掲げたり。

等梅 畫史に曰く、「學雪舟、能畫載笠鍾馗圖、筆格與周耕相似矣、備考には「筑後人、師雪舟、後住高野山」と曰ひ、「鍾進士圖、梁應」の遺作を録し、「枇杷に鷹の縮圖を載せ、方形重廓朱文及鼎形「等梅」の畫印を掲げたり。

等耕 畫史に曰く、「學周文雪舟、畫人物花鳥、能得其氣韻、雪舟徒弟中聊勝者乎、同書又「等耕」の方形朱文印あり。

等譽 畫史に曰く、「僧等譽、專念宗之僧、而居泉州堺津安養寺、學雪舟、畫鍾馗並雜圖、得其名、同書に「等譽」の白文方印を載せたり。備考の系譜には「又尼崎如來院ニ居」とも曰へり。

等安 畫史に「學雪舟、而畫爲雅趣也」と曰ひ、「等安」の白文方印を載せ、備考系譜には「備中人」と註記せり。

等傳 畫史に「號清良、畫墨山水、學雪舟、又有畫大黑」と曰ひ、「等傳清眞」の白文方印を載せ、備考の増補には、渡唐天神の圖に押せる文字不明の長方印及鼎形「等傳」の印を載せたり。

等空 畫史に「畫墨觀音、學雪舟」と曰ひ、無廓「等空」の朱文印を載せたり。

等雪 畫史に「畫半身達磨、有雪舟之風、雖有豪氣之作、聊近俗」と曰ひ、「等雪」の重廓朱文方印を載せたり。備考には更に單廓の同文方印を載せ、「紙本墨畫山水ヲ見ル、雪舟末流、拙」と曰へり。



小 圖 第 三 十 七 雪 江 筆 山 水 圖

等秀 便覽に曰く「畫架鷹、仕薩州侯紙、中立、淡彩、永眞極爲雪舟筆、有秋月品格、備考に「等秀」の朱文方印を載せたり。

等巴 便覽に曰く「不知何人、師雪舟之筆力、有功、所寫柔弱也、以山水爲上」。

等余 備考に「有渡唐天神圖、紙本、堅幅、雪舟弟子也」と曰ひ、「等余」の朱文方印を載せたり。

等清 便覽に曰く「奥州人、以繪爲家業、學雪舟筆格、多以清之筆爲雪村、印字等清、亦同名有畫師、不知住處、備考には「雪舟」ニ似テ模様荒シ」と曰ひ、「等清」の朱文方印を載せたり。

等牧 畫史に「畫墨不動像、蓋類木筆之法、筆意出自雪舟」と曰ひ、「等牧」の朱文方印を載せたり。備考には「墨鍾馗立像、堅幅、摸本、(中略)何ニモ木筆ノ風アリト云ベシ、破墨ノ處アリ、墨不濃、工ミトハ云ガタシ」更有「祥啓之畫風」など曰ひ、鍾馗の縮圖を載せたり。

等作 備考に曰く「雪舟弟子」。

等桂 備考に曰く「蘆雁堅物、印中ニアリ、上ノ印禪客ト見ユル」。

等快 同書に曰く「釋迦像、紙本、雪舟弟子也」。

等琳 備考に「畫釋迦像、雪舟風、古拙」と曰ひ、「玉院」の長方「等琳」の方形朱文印を載せたり。

等賢 同書「畫蘆雁、雪舟風、筆力纖弱」と曰ひ、「等賢」の白文方印を載せたり。

等椅 同書「養朴縮圖中載之、山水、墨、紙、横、而爲雪舟筆、其畫品自可知」と曰ひ、「等椅」の白文方印を載せたり。

等啓 同書「印文云、木復、恐其氏乎、畫人物、法雪舟、嘗觀墨畫福祿壽圖、似周德筆法」と曰ひて、その縮圖を掲げ、又曰く「菊田伊德榮茂、本國奥州にて見たる由、繪は墨繪、松に唐人物四をゑがく、雪舟に似たり、尤古きものなり」と、近世雲谷などの及所にあらず、紙本立軸、又余閑樹下福祿壽圖、紙、立、周德位ノモノ有。又等啓筆の落款を掲げて「陸奥侯花

鳥屏風ニアリ、雪村弟子」と記し、等啓の朱文方印及「木復復一に得とも讀まる」の鼎形印を載せたり。

等遠 書工譜略に曰く、雪舟弟子」。

等漸 同書曰く、雪舟弟子」。

雪江 書史に「畫渡唐天神像、專學雪舟、能相似」と曰ひ、又その落款を載せたり。こゝにその遺作山水圖（小圖第三十七、岡本貞然藏）を掲ぐ。雪舟の破墨法より出でし疎淡の畫風を觀るべし。

雪汀 書史に曰く、學雪舟、畫墨竹、燕雀。備考に「雪汀の朱文方印あり。

雪工 拾彙に曰く、雪舟門人、按、此名未穩、疑以其印磨滅、妄讀爲雪工、凡有雪字、則當雪舟門人者、古來世習也」。

雪休 辨玉集に曰く、雪舟弟子。書工譜略に曰く、播州人、雪村弟子」。

雪心 書史に「畫出山釋迦、墨色枯稿、聊似雪舟」と曰ひ、雪心の白文長方印を載せたり。

雪丹 拾彙に曰く、慕雪舟畫格、好以八鳩作八幡大菩薩尊像、雖異作、儼然使人起敬禮」。

雪崖 備考便覽を引いて曰く、學等楊、能作墨繪、專畫圖、又學朝鮮之畫風、然少意趣。備考增補に「雪崖の白文方印を載せたり。同書又拾彙を引いて曰く、

「按今傳世、有墨梅竹畫幅、或以雪崖落款、或題翰林風月者、審視其描法、無我邦之習、疑是明畫、與此所載雪崖同名異人也、或以明人吳雪崖者、恐非乎」。

雪津 拾彙曰く、雪舟弟子。備考に「文殊像、立像、草行畫、小立物ノ摸、筆意解索ノ如ク、雪舟ノ秃筆ノ法ニ非ズ、雪字タルヲ以テ假ニ此所ニ出ス、拙畫也」と

曰ひ、その落款を掲げたり。白文方印に「春水」の字あり。

雪僊、雪潮 備考に曰く、俱明人、雪舟ニ學モノ也、櫻井氏說、等園ノ話、按甚難信、受說也」。

雪等 備考に曰く、畫山水、豎、有方印、雪舟ノ等楊ノ印程ノ大サ也」。

雪庵 備考に「畫釋尊像」と曰ひ、その落款、雪庵の朱文方印を載せたり。

雪山 同書に「畫文殊持劍像」と曰ひ、その落款、雪山の朱文長方印を載せたり。

雪洞 書史に曰く、能畫墨花鳥、又畫半身達磨像、其法出於雪舟之風」。

雪蕭 便覽に曰く、不知何人、好所畫人物、且有功、巖樹無見處、鳥獸學等楊筆力」。

雪圓 辨玉集に曰く、雪舟弟子」。

雪窓 萬寶全書に曰く、雪舟弟子」。

梅軒 書史に曰く、學雪舟、畫出山釋迦像。備考には「梅軒筆」の落款に押せる「資勝（か）の朱文方印及觀音の縮圖を載せ、又隻履達磨（淡著色、波蘆アリ）の遺作を録せり。便覽更に資騰を舉げて曰く、九州人、舟之風格、而亦學馬遠、筆力甚活動、而有士氣、恐らくは同人ならむ。

良富 書史に曰く、學周文、雪舟、而卒畧也、然筆力老成矣。同書更に別人良富を舉げて曰く、能畫墨出山釋迦並蘆雁、墨色筆法出於雪舟、曾似秋月。備考に

曰く、紙本、豎物、壽老人立て、側に鹿と鶴有、雪村と秋月を交たる如く也、墨繪へ丹朱の彩を加へたり、印（良富の朱文重廓方印）有、手あらくして秃筆に

非ず。又曰く、「達摩半身墨繪、啓書記を學ぶか」。

龍登 畫史に曰く、「不知世姓能畫山水、水仙、梅竹、學周文、雪舟、而筆意有清奇。書畫後曰、年八十八、龍登筆、便覽に曰く、「好畫鷹鵠、兼周文、雪舟二流筆法、一々能留意賦彩、設色甚有器動、印內爲以名、備考に曰く、「濃墨山水、雪舟橫物にある風にて和らか也。王湖山水に似たり。甚強く佳也。畫史に周文、雪舟を學ぶとあれども、周文の處は無之、同書の増補には、山水、紙、淡彩、雪舟に似て肉少し、見事なり、賛建仁寺常庵和尚と記して、龍登の朱文方印を載せたり。

宗歳 畫史に曰く、「畫淡彩山水、學雪舟、備考に曰く、按、嘗觀其畫柳鶯圖、絹本橫披、眞跡在會心齋、相傳爲可翁所畫、印文云宗歳、畫風精雅、品格在秋月輩之上、稍似可翁、周文筆法、今爲鳥有、可惜、同書畫史の朱文方印を收めて、宋英か、柳白鶯、著色、宋歳、今按、或ハ蔡ナラン」と曰へり。

月友 畫史に曰く、「畫釋迦、文殊、普賢像、學雪舟」。

殊賢 畫史に曰く、「畫釋迦、文殊、普賢、似雲溪、其筆法出於雪舟、備考には、朱賢の朱文方印を載せたり。

作仙 畫史に曰く、「畫墨花鳥、出自雪舟筆意、備考に曰く、按、便覽云、快仙用丸印、作岩樹宿鶯、其樹石學元信、應則宗、土岐風致云、今檢印譜、則作字誤讀爲快字而已、今改不立、快仙傳矣、又嘗見其畫白梅花白頭翁圖、聊似學宗、丹者矣、同書、作仙の圓形朱文印を載せ、山水印計、東華妙貞題詩有、水墨山水、紙本小直幅、雪舟ノ氣ナシ、少シ雪村ノ風アリ」と附記せり。

墨澤 畫史「印文在澤墨之字、書東帶天神像、筆法學雪舟」と曰ひ、その落款「澤墨」の朱文方印を載せたり。

守絜 畫史に「畫福祿壽、其墨色學雪舟者也」と曰ひ、守絜の朱文方印を載せたり。備考に曰く、「靈照女、紙本著色、鑿、守絜ノ印アリ、頗宗丹ニ似タリ」。

家繼 畫史に「畫鍾馗、學雪舟筆意」と曰ひ、一朱文方印を載せたり。備考の増補者曰く、「此印文家繼ノ缺畫トモ見エズ、或ハ家紱カ、或ハ家紀ノ缺畫カ」。

貞安 備考に曰く、「學雪舟」。

老雪 拾彙に曰く、「號嘉外、嘗見摸本落款云、行年八十六歲嘉外老雪、此嘉字不可讀、蓋似草書嘉字、遂釋爲嘉字、恐妄讀而已、俟後考。備考増補に曰く、「按、嘉外老雪即塵外老雪ニテ、雪舟戲ニ書上ニ斯モ題セシナランカ。サラバ雪舟ノ事也、辨玉集に收めたる落款の字は、雪舟の風と異なり。

生雲 備考増補に拾彙及名公畫譜を引いて曰く、「生雲又雲清と稱す、傳記不見、生雲號雲清、雪舟弟子」。

一船 名公畫譜に曰く、「師雪舟、善畫」。

書林 拾彙に曰く、「雪舟弟子」。

承虎 備考にその一方印を出し、附記して曰く、「山水牧童、猿猴、似雪舟、又闔達摩半身圖、紙本、此印、白文、墨繪、稍近秋月」。

何遊 同書その朱文方印を出し、附記して曰く、「小橫披、紙本著色、桃花小禽圖、作花二、蕾一、小禽二、似雪舟、佳作」又曰く、「晴雲印譜載此印云、鑿幅、松鶴壽星

圖、似秋月」。

墨心 便覽に曰く、「不知何處人、學雪舟風格、所繪甚有功、印字爲墨心」。

希材 同書曰く、「號雲谷、師做雪舟、傳神最在功、畫上爲於名」。

庭秋 同書曰く、「下野人、甚好於畫圖、等楊爲學、而能松竹人物、筆勢雄健也」。

得受 備考系譜雪舟門人として「河内人」と記し、文殊像、畫者岳林寺正受院得受藏主、弘治三年丁巳十月十八日、あしきなり、雪舟弟子畫也」と曰へり。

昌超 備考に「欠伸布袋、賛江月」と記し、その白文方印を載せたり。

幾馳 備考にその朱文方印を載せ、附記しく曰く「維摩半身、雪舟弟子中カ」

周栢 便覽に曰く「住紀州高野山、學雪舟。備考に「雪村」周繼の印文を誤讀せるに出でたるならむと爲せり。

良昶 備考に曰く「雪舟門人ト見ユ、賛永正年月日牧隱、畫枇杷鷹圖、似學雪舟及秋月。」

良旭 拾彙に曰く「工書多著色。備考に曰く「按、良旭、良昶、字形相近、誤昶字爲旭歟、猶可考索矣。」

周惠 便覽に曰く「不知住處、學雪舟、筆力風韻有功、方印爲周惠。」

景叔 備考に曰く「石陽景叔、或景狄、又景秋、明人下、山水、人物、石、竹、花トアリ、君臺觀（左右帳には見えず）按倭畫也、景叔、石見州人、學雪舟、其折枝、水石、皆可觀、署曰石陽景叔（便覽等、或誤有爲明人矣。同書「陽景」の朱文長方印を載せ、又更に景齋を挙げ、便覽を引いて「石陽人、倣舟之筆風、圖繪折枝水石有功。」

量風 便覽に曰く「不知何人、所畫宗秋月、亦兼異風、器動不少。備考に曰く「其畫鷺圖、在尾州熱田宮寶藏。」

如寄 畫史に曰く「不知其姓、號樗屋、畫後曰大明遊子一翁宗藝、筆力學雪舟、其所畫、有神農鍾馗圖、爲彩色人丸像、添兩贊、皆大明人之作文也、然則考之、畫人物、有人丸、其筆法慕雪舟者、疑是大明人、師雪舟、從來於吾國者乎。備考には「大明遊子樗屋如寄墨戲」及「一翁宗藝寫」の落款、方形「如寄」圓形「知忠」の朱文

印及「遮莫」の白文方印を載せ、著色達磨像の縮圖を掲げたり。その雲屋の賛の末に「德治丙辰六月廿又六日雲屋思胤」とあり。

等齋 「高野ニ居」。

等恕 「豐後人」。

等春 「大和人、學周文」。

雪遠 以上四人は古畫備考の系譜雪舟の下に挙げたり。

巢南 便覽に曰く「不知何人、見墨馬、相阿彌之風格、而兼雪舟、印內爲巢南、雪舟弟子。」

慶全 畫工譜略に曰く「雪舟弟子」。

染雪 同書曰く「生國大和人、雪舟弟子。備考系譜「波雪」に作れり。

隆慶 備考に曰く「畫福祿壽、雪舟ノ圖ニテ拙ナリ、印中隆慶トアリ」。

息梅 便覽に曰く「越前州人、曹洞宗僧、丹青倣雪舟、有墨畫」。

祐宜 畫史に曰く「僧正祐宜、智積院第二世之祖、而眞言宗之碩學也、暇日好丹青、善墨畫、學雪舟之筆法、得其眞趣」。

隱西堂 備考に便覽及辨玉集を引いて曰く「相國寺僧、學雪舟、畫山水、花鳥、有功、無士氣」。

秋月の門下
及末流

秋月の門下及末流の畫人亦少からず、左に略これを列舉す。

等碩 畫史に曰く「秋月之子也、又仕薩州大守、而能畫、自雪舟到秋月、等碩爲一家、然用筆粗矣、印文有牧雲之字、備考に文字不明の長印、等碩の朱文及白

文方印を載せ、半身初祖〔中畧〕後世ノ山雪、松花堂ノ筆意アリ」と曰へり。

等薩 畫史に曰く、弓削等薩號波月、隅州之産、而仕薩州大守、曾師秋月及周德喜、畫山水、花鳥、人物次之、粗豪而雄健、書於畫中曰、六十歲、天正三年乙亥六月日、後爲僧、從周德而居周防者也。即ち周德に次いで雪舟より第三代の雲谷庵主たりし人なり。古畫備考に三曉庵の談話を記して曰く、弓削等薩は國分素生の人にて、落命は田布施大野の地にて、墓あり。註に曰く、臨濟ノ畫ニ天正十年壬午十月吉日トアリ。自分廿歳之時分、田布施親類の僧、寺持にて、右寺へ差越候節、住持咄之由、弓削睡淵先祖候由。睡淵は當弓削文左衛門親父にて候。等薩は元龜中人也。太中公御影を被奉書候。尤入唐被致候て、西湖遊覽之中、圖之有之一冊被持渡候。其冊に何月幾日何方出帆、何月幾日に坊津へ入津候由、被書置候。入唐杯被致候人と申候と被書候義は文官之由、同書福祿壽圖の落款「波月筆」の字、等薩の朱文方印及文字不明の壺形黒印を載せたり。

等見 備考三曉庵談話記に曰く、隅州山伏總職十輪〔福〕坊等見は、秋月一番弟子にて、其流儀庄内に段々有之候。繪よく無之候。

等坡 畫史に曰く、畫十牛圖、其水墨蒼老、出於雪舟、筆法品不俗。備考三曉庵談話記に曰く、等坡和尚は小根古園林寺住持にて、秋月の弟子となり、畫をかゝれ候。畫の位は秋月の半分にも無之候。秋月より玉淵流の八景を畫、等坡に被送候處、于今傳り有之候。案、畫纂云、日向人、秋月門人、余亦閱其畫、荷橋閑歩圖、紙本橫披、摹雪舟畫者、筆法似秋月、稍不及矣。同書團扇形山水〔栢山賛〕の縮圖及〔等坡〕の白文方印を載せ、系譜には等坡の下に等益藏主を録せり。

等藝 畫史に曰く、學雪舟、畫意與等梅相同、其名有等之字者、皆是雪舟之徒也。便覽に曰く、薩州人、學秋月。備考三曉庵談話記に曰く、等藝は日州福島の人にて、此御方御領の時也。同書に曰く、按、其畫白砂翠竹、江村暮圖、即摹雪舟畫也、極得師法、眞跡在狩野洞白家、相傳爲雪舟眞跡、其畫品可知矣。同書又團扇形山水の縮圖、等藝の白文、等藝圖畫の朱文方印を載せ、系譜に等藝の門に等任藏主、等賢權大僧都、日向人、雪山〔肥前佐賀人〕を挙げ、雪山の門に等浦、日向人、始興甫弟子、江雪、日向人、雪舟末流の二人を挙げたり。

水月 畫史に曰く、登米水月、畫文殊像及雜圖、墨色甚佳、筆力恰似秋月。備考には、水月の畫ける渡唐天神の落款、文字不明の鼎形白文印を載せたり。

是道 備考に「寒山圖、秋月ノ類ノ畫、印中是道ト有之」と曰ひ、その白文方印を載せたり。

良欽 同書に「横紙、水墨、岩龜、安信外題秋月筆」と曰ひ、白文方印を載せたり。

秋景 同書に「又圓歟、龍虎、秋月ノ如キ畫ノ印ニアリ」と曰へり。

雪溪 備考系譜に秋月の門人と爲し、「字妙澤」と註せり。

等拙 同上、薩摩人と註せり。畫工譜略には「大隅人、秋月弟子」とあり。

湛賢 同上、日向人と註せり。

天海 同上、大隅人、秋月弟子」と註せり。

梅雪 同上、日向人、末流」と註せり。

等雪 同上、日向人、末流」と註せり。

壹默 同上「大和人」と註せり。

等海 長府雲谷系圖に曰く「長富等珍男。畫工譜略に曰く「大隅人、秋月弟子。等海の男に等仙あり。雲谷系圖に見ゆ。

雪村

雪舟派の一人にして、その技最も勝れ、その名最も高く、雪舟の門人と雖も終にこれに及ぶ者なかりしを雪村とす。雪村は諱を周繼と云ひ、鶴船老、中居齋、儉籥齋、如圭等の別號あり。磐城國田村郡三春の人なり。佐竹氏の一族にして俗名を平藏と云ふ。父故ありて平藏の嫡たるを廢し、代へて庶子を立てむとす。平藏仍りて家を出で、僧と爲れり。三春に福集寺を創してこれに住し、後同郷の内に退隱して閑居す。畫學提要には「受業於同郡洞雪、中後住常州太田二畫史備考一古畫備考には、その跡雪村菴とて尙存ずと曰へり。天文の頃常陸久慈郡に寓せりと見え、その一遺作の款識出づ備考にに「天文十一壬寅年如月、常州邊垂寓住、雪村誌之」とあり。雪村菴の退隱は、蓋しその後か。その餘遺作の年曆を徵すべきもの、八景中軸の奥書出づ備考にに「法常牧溪和尚、朝暮遠近、萬里江峯、山氣生動、八景中軸圖之、奉進上、永祿六年初秋、繼雪村鶴船老、玉澗大軸の奥書出づ備考にに「玉澗大軸、江南江北之佳興、圖筆作、奉進、永祿七年初秋、繼雪村鶴船押」とあり。又福岡孝弟子爵所藏の人物圖の款識に「雪村老鶴船翁八十一歲書之」。牡丹に鷺の圖の款識出づ備考ににも「行年八十一、繼雪村老筆」などあり。これに由りて、永祿の頃は既に老境に入りしこと、八十餘歳の長壽を保ちしこと、を知る。仍りて今假りに永祿七年を八十一歳とすれば、雪村は文明十六年に生れ、雪舟よりは六十四年の後輩にして、雪舟の寂年は雪村の廿三歳の時に當り、若し扶桑畫人傳の如く、雪村を元龜の頃まで世に在りとし、享壽を八十二三歳とすれば、延徳頃の生れと爲りて、雪舟の寂年には雪村僅に十六七歳なるべし。しかのみならず、雪村の事は曾て五山の詩文集等に所見なく、その京都又は周防に至りしことも絶えて聞えねば、本朝畫史に「慕雪舟筆法終約師弟之義、所學不失天真」と曰へるは信じ難く、同書に「或謂雪舟在西邊、雪村居東極、未曾面、只見畫蹟而爲師弟、故不相似」との説あるにも考ふれば、雪村の雪舟に於ける關係を以て、單に畫風の私淑と爲すの最も妥當なるべきを認む。畫史雪村を評して曰く「潑墨雅淡、務去華藻、大抵略出新意、所用筆、狂逸而有奇思、長於山水、人物、花鳥、次之、雪舟之徒弟居多也、繼在其右、聲聞獨高、中但不作倭畫、便覽に曰く「作畫常用鳥子紙、唐紙亦希在、粗以奈須紙、葦名守氏授畫軸、卷舒法有一軸、奧書曰「天文十五年五月、常陸久慈郡八溝山下黑澤郷町慈雲寺に雪村の畫ける屏風一雙ありし由、常陸紀行に見ゆ。備考には「周繼の白文及朱文方印、雪村の白文方印及鼎形、瓶形印并に花押等を載せたり。遺作存ずるもの多し。左にその佳品を掲ぐ。

第百六十九 雪村筆夏冬山水雙幅全圖二面及冬景の一部分

第百七十 同筆風浪帆船圖

第百七十一 同筆松鷹圖雙幅の一

第百七十二 同筆花鳥圖雙幅二

圖二

こゝに掲ぐる夏冬山水雙幅は、恐らくは雪村遺作山水中の最佳作ならむ。風浪帆船圖これに次ぐ。殊に冬景山水圖に至りては、雪舟と雖も多くこれに過ぎず。これ等を通觀するに、墨致は殆ど雪舟に同じと雖も、筆意は頗る雪舟よりも鋭き所あり。これを雪村の特徴とす。松鷹圖は筆致大いに如上の山水と異なりて、破筆較々牧溪及後の長谷川等伯に似たる趣あり。亦一家の特色とす。設色の花鳥に至りては、却りて雪舟の如き樹枝散漫の弊少く、黃氏體の勾筆老勁を極め、傳彩稍雪舟より重きものあり。こゝに掲ぐる雙幅の如きは、この種の遺作中の尤品なり。

以上の諸品は皆これ雪村遺作の最も眞摯莊重なるものにして、眞に雪舟に次いで斯派の大家たるに副へりと雖も、爾餘の遺品中には、奇癖に流れたるもの甚多し。由來藝術の天才には、往々狂に近き者あれど、我が國古今の畫人中、雪村と蕭白(後に出づ)との如く甚しきはあらず。誠に奇狂の雙絶と謂ひつべし。たゞ雪村の狂體には蕭白の如き鬼氣の厭ふべきものなく、飄逸寧ろ人をして失笑せしむる無邪氣の質あり。然れども、餘りに自然の物象を蔑如したる背理の甚しきに觀到れば、その精神の常軌を以て律すべからざる人なりしことを憶はざる能はず。呂洞賓圖等の仙人、猛虎嘯風圖等の如き即ちこれなり。その畸異なる形象を見て、誰か作者の神經の著實と健全とを缺きしものあることを認めざらむや。耳食の徒、雪村の作とし言へば、漫然雷同してこれを賞すと雖も、若し雪村の作をしてこの種のものゝみならしめば、吾人は全く一個の精神病的畫家として、古大家の歷名中より雪村を擯すべし。故に本書の撰集これを除けり。觀る者怪むこと勿れ。

雪村風の諸家

雪村風と目せらるゝ畫家亦少からず。左に略これを列舉す。その中東北の人多し。蓋し東北の繪畫は、雪村に依りて開拓せられきと謂ひつべく、雪村派一に東北派と呼ぶも可なり。

洞雪 拾彙等に依るに、奥州三春田村里の佛刹に住す。雪村同邑の故を以てこれに従ひて畫を學べり。雪村の畫能くこれに似たりと云ふ。されば雪村の先輩なれど、その名大家の數に入らざるを以て、便宜こゝに附載す。古畫備考雪洞と同人ならむと爲せり。未だ俄に信すべからず。

良海 畫史に曰く「蓋畫僧乎、畫柿本人丸像、筆法似雪村、有賛、前真如寺用林叟書之、彩墨尤麗、傳世者鮮」備考にその款印を載せたり。

祐周 畫史に曰く「畫墨山水、似雪村筆意」備考にその名の白文方印あり。

壽昌 拾彙に「能畫蘆雁、有似雪村筆意」とあり。備考に「壽昌」の朱文方印を載せ、記して曰く「榮川院鑒定云、其畫ハ雪村ナレト、其印雪村ニアラズ。明カニ

雪村トモ難極ト也。同時代ノ物トミユ」。

六左衛門 拾彙に曰く「傳謂、雪村之弟、住常州、其畫學家兄法、村歿後、以其印捺己畫、然工拙已懸、不可掩也。常州古老話」。

林月 備考に「林月」の朱文印を載せ、記して曰く「雪村茄子五ツ、横物(中略)伊川院折紙雪村也、成程其流儀ナレ共、別人ナリ」。

祖榮 拾彙に曰く「學雪村畫法、人物翎毛多墨畫、刊行畫家印譜、以祖榮印、雜入雪村印中者、蓋其畫以能似謬加也」備考に「祖榮」の朱文方印あり。

祖永 備考に「祖永」の壺形印あり。又蓮鷺眼ガキの縮圖を載せたり。されどその印文「賢江」とあるは、啓書記にもやと疑はる。

洞益 備考にその名の朱文長方印を載せ、紙本、小堅幅、墨畫蓮鷺、似「祖榮」と記せり。

春休 備考に「常州水戸人、小判形の白字印ハ雪村ノ印也、英畫本に「雪村弟子」どあり。
及雪 便覽曰く「雪村有一人男子、名繼村、拾彙に曰く、及雪號繼村齋、雪村弟子或作牛雪、誤矣、及雪從學雪村村令之擇紙、硬柔適用、亦使磨墨、濃淡愜宜、村爲則却不能如意、於是常喜之云、然於圖畫、不及師遠矣、備考には、常州太田人」と記し、その落款を載せたり。

俊慶 丹青若木集に曰く「雪村の弟子也、圖繪賤野、而无器動、此圖繪間自奥州出、拾彙に曰く「雖學雪村畫格、稍覺拙劣、奥州猶存遺墨、按後慶當作俊慶、往古以俊字爲後、故轉誤後字」。

雪林 畫史に曰く「學雪舟、能畫、雖危惡、清雅不凡、畫工譜略に曰く「雪村ト同所ノ人、雪舟弟子、繪ハ秋月ニ似タリ、便覽曰く「雪林春月、不知何人、學雪村風格、雖功少、頗有士氣、好山水、拾彙曰く「雪村弟子」。

自宅 便覽曰く「不知何人、學雪村筆風、圖畫甚功少、所畫山水、花鳥而已」。

雪澤 便覽曰く「奥州人、常讀仁王經、亦畫佛像、宗雪村之筆風、無功器趣不多、方印」。

雪山 便覽曰く「不知何人、師雪村、臻丹青妙、好墨梅竹、有功、無士氣、畫上題名、名公畫譜曰く「廣渡雪山、肥前人、師雪村」。

雪澗 備考その款印を舉げ「水墨山水、小幅紙、似雪村、稍不及」と記せり。

雪閑 便覽曰く「住岩城、學雪村、最似師、做山水、花鳥、人物、圖繪無活動、備考には山水小景の縮圖及款印を載せたり。

等本 便覽に所圖、佛像、草花、筆力而已、功少、雪村風格、而印内以名備考に等本の誤ならむと云へり。蓋し然らむ。

虛白 備考にその壺形印を載せて「有雪村風、紫白茄子、紙本橫披、筆力ノロシ」と記せり。

竹隱 備考に蓮鷺の縮圖、竹隱の白文方印を載せ「雪村風、紙直幅」と記せり。

秀盛 備考に「似雪村、畫山水、藻魚、花果」と曰ひ、造作敗荷、蓮房、青鷺圖、茄子瓜墨畫等を録し、文字不明の長方印を載せ、且曰く「按、畫史以此印入雪村印譜、然畫力不及雪村、爲別人明矣」。

太郎左衛門 丹青若木集に曰く「西海枝さいかいち俗名號太郎左衛門者、羽州仙道村小野領主也、好丹青、做雪村、活動不少、備考曰く「按、西海枝者家號、非其名也、奥州會津地名、而蘆名氏臣屬、稱西海枝者多矣」。

在顔 備考曰く「在顔和尚（顔或作閑）常州眞壁郡山尾村光明寺住持、眞壁城主右衛門佐宗幹子、姓平氏、直指宗外、通達兵略、又能圖畫、便覽曰く「曹洞宗僧、作畫、得雪村規模」。

等清 便覽曰く「奥州人、以繪爲家業、學雪舟筆格、多以清之筆爲雪村、印字等清、亦同名有畫師、不知住處」。

等慶 便覽曰く「奥州人、設色好花鳥、粗學宗湛風、亦師做雪村、士氣少」。

春信 名畫傳に曰く「雪村の門人といへり。天正頃の人なるべし」。

春休 辨玉集に「雪村弟子、萬寶全書に「雪林の法眷、名公畫譜に「爲墨戲」とあり。

Parvatha Sesha.

Answer - Mr G. Tarkenton
Sasha

Blank Page Digitally Inserted

第百五十五 雪景山水圖 雪舟筆

紙本淡彩

竪三尺九分橫一尺二寸

和泉國堺宅德平君藏

(第二百八十頁參看)



(第二頁八十頁卷終)

東京圖書印刷所

第三頁八分卷終

編本將錄

卷百五十五 雲景山水圖 雲景筆

雪擁故亭玉竹空
霜寒初見思角
霜寒山稍遠
漸為近
餅里
至
應
寒
秋

雪照庭初景

風雪山深送一冬
溪橋初見往來
蹤
玉
竹
空
霜
寒
初
見
思
角
霜
寒
山
稍
遠
漸
為
近
餅
里
至
應
寒
秋

雪照庭初景

雪照庭初景



Painter 5000.

Curator - Mr S. Sheldrake,
Buck.

Blank Page Digitally Inserted

第一百五十六 峯巒競秀圖 雪舟筆

紙本水墨

竪二尺九寸二分、横一尺二寸二分

(第二百八十頁參看)

大阪 志方勢七君藏



(卷二百八十頁終書)

大綱 卷一百八十

聖二只式廿二卷謝一只二七二卷

謝本卷

卷百五十六 卷一百五十六 卷一百五十六

青山疊疊水重重
萬里素同張几中
不用區區飛杖錫
卧遊奇勝飽無窮

淋漓元氣出自毫末
張鏡秀
浪漫波沙石頭而後木老而陰
蒼頭紫芝洞饒望林仁智之資
樂此如無衡茅區區東來海隅
油具微亦阮志清題黃醉
掘走黃龍



Painter - Sashu.

Driver - Luke M. Mori.

Takyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百五十七 山水畫長卷(其一部分) 雪舟筆

紙本淡彩

全長 竪五丈一尺七寸五分、竪一尺三寸二分

東京 公爵毛利元昭君藏

山水畫卷は雪舟の最大傑作にして、全長五丈餘の大卷に層巒疊嶂の景、平遠萬里の趣を縦横揮灑し去つて景象の變化盡くる所を知らず、然れども本書紙面限りありて茲には其一部分を登載するに過ぎず、其全部は別に原卷大に複製發行して全局の結構經營を見るに便せり

(第二百八十頁參看)

（一）

（二）

（三）

（四）

（五）

積算正十計 山本齋林堂著 二 清金 一 刊



Printer - Se. Am.

Reverend Manager in

Charge.

Blank Page Digitally Inserted

第百五十八 夏冬山水圖雙幅

紙本水墨

各鑒一尺五寸三分橫九寸七分

(第百八十一頁參看)

京都 曼殊院藏



(卷二百八十一頁卷終)

京師 卷八十一

各鄉一以正世三景圖八世十景

辦本水墨

卷百五十八 夏冬山水圖雙神



雪舟



Painter - 30 hrs. 3 in cut

Owner - Mangum H. Kuroda
Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百五十九 壽星及夏冬山水圖三幅對 雪舟筆

紙本水墨

竪三尺五寸四分、横一尺五寸七分

東京 侯爵黑田長成君藏

(第百八十一頁參看)





雪舟子



雪舟



Printer - Seshu

Printer - Mr. G. H. K. K. K.
Haji, Nagato.

Blank Page Digitally Inserted

第一百六十 破墨山水圖 雪舟筆

紙本水墨

竪三尺一寸三分橫一尺二寸二分

長門國萩 菊屋剛十郎君藏

(第二百八十一頁參看)



西園菊 葉脈細而直

三三八一三發附一三二二發

蓮本堂

卷百六十 鄒魯山水圖 雲世榮



Painter - Seaborn

Baron 5. Maconda

Susa,
Hagat

Blank Page Digitally Inserted

第百六十一 花鳥圖屏風一雙 雪舟筆

紙本著色

各竪五尺四寸二分横一丈二尺四寸

第三圖は筆致を細觀するに便せん爲め第二圖の一部分を大寫したるものなり

長門國須佐 男爵益田精祥君藏

(第百八十一頁參看)



(葉二百八十一頁參看)

註門圖作爲 長御金田請願書

一階衣室大書「云々」の字

第三圖は筆跡を照合するに明かしく竊に竊二圖の

香煙正只四十二卷附一丈二尺四寸

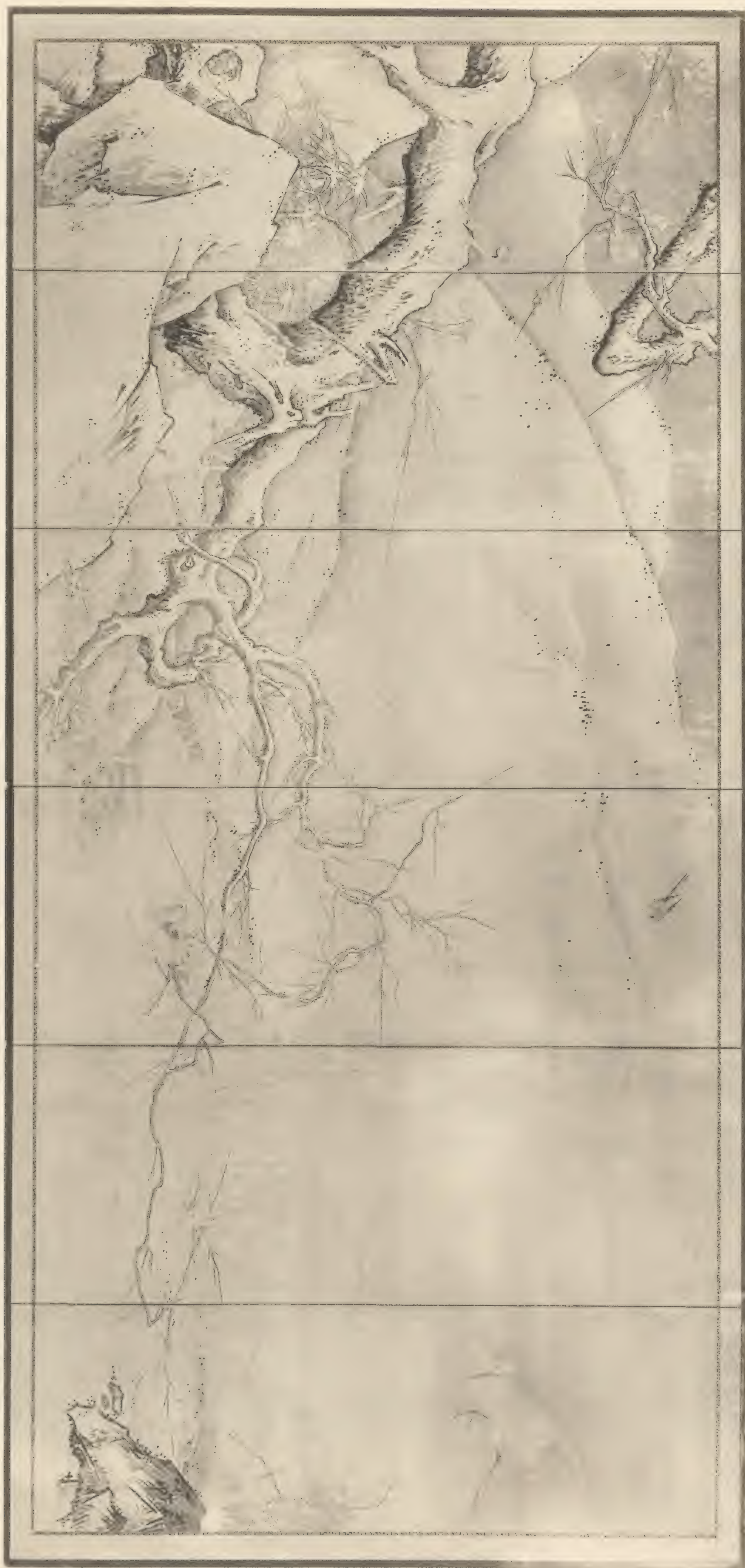
綿本善也

葉百六十一

蘇島岡楓風一雙

雲供筆







Painter - Seabro.

Baron H. Chamaux.
Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

雪舟筆
鳥窠和尚圖

第百六十二 鳥窠和尚圖 雪舟筆

紙本水墨

竪一尺七寸七分、横七寸

東京 男爵岩崎小彌太君藏

(第二百八十一頁參看)



（第二十八卷）

東京 復興館 小冊本

第一只小冊本

辦本

第六十二卷 皇座

洞天童第座

雪舟筆



Painter - 5434u.

Owner Baron S Masuda,
Susa,
Nagato

Blank Page Digitally Inserted

第百六十三 益田兼堯壽像 雪舟筆

紙本著色

竪二尺七寸横一尺三寸四分

長門國須佐 男爵益田精祥君藏

(第百八十一頁參看)



（第二十八十一頁）

具西國譯文 良書部田所轉寫

卷二十八 五十一 五十二 五十三

通本

卷百六十三 益田兼亮卿 雲長

益田越州太守兼竟公壽像

眉宇春融胸襟天朗談言有味甘露玉

漿可人之心要惠以仁薰風瑤琴解民

愠揮一口銀則合國英雄造步武揚

鞭則百萬貔貅受指呼子多孫多

宗聲慶世財足福足惠足喜色門

師無善三心宗洪興妙義之田業

謂之益福由於四海開壽域於八

千

公七姓藤氏法諱瑞無難全國受

胡氏漢字信為創一花前不二

尊深安置以奉書大蓋旌令

世事主上至誠也求賢老拙不

拒辭贅謝詞獻上且述小僞祝

朽之良策云

全國商家報主恩人臣忠義謝殊勛身

亦月後無窮業北在昆耶不二門

文明土歲龍集己亥中冬之望

妙喜峰下走牝馬鼎燒香謹書



Painter - Shingetsu.

Owner - Baron M. Date,
Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百六十四 山水圖雙幅 秋月筆

紙本水墨

各整五尺、橫一尺三寸

東京男爵伊達宗曜君藏

(第二百八十三頁參看)

二卷二百八十八頁

東洋書院藏

香鑒正只錄一冊二冊

謝永水墨

卷百六十四 山水圖卷 終日華





Painter - Shogoten

Owner - Mr. H. Kishimoto

Owaka

Blank Page Digitally Inserted

第百六十五 瀑布水禽圖 秋月筆

紙本着色

竪三尺一分横一尺三寸五分

大阪 岸本吉右衛門君藏

(第百八十三頁參看)

三才圖會卷之八

大宛國志卷之四

第三卷一

雜本卷

卷之六十五 雜本卷



Painter—Shin Tokei.

Owner—Mr T. Hara.
Yokohama.

Blank Page Digitally Inserted

第百六十六 布袋圖 周德筆

紙本水墨

豎三尺二寸二分 橫一尺二寸七分

橫濱 原富太郎躍藏

(第二百八十四頁參看)



二二八八

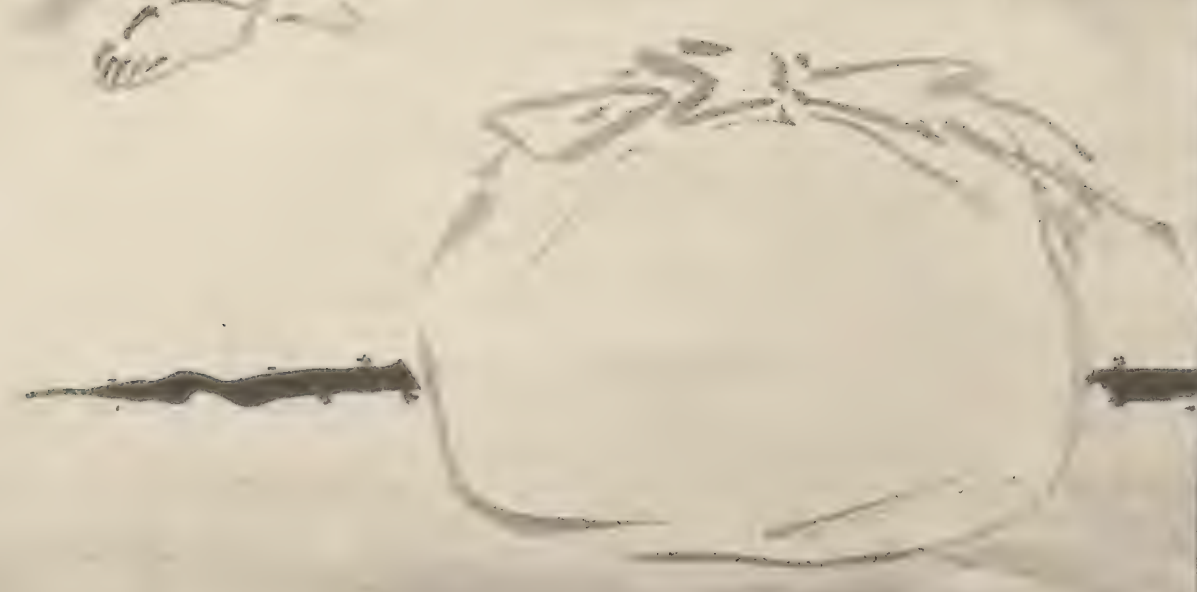
三

三三二二

四

百六十六
市發圖 四

分必那似一身亦幸二日烟
率陀上上教所布衣也言
三往之昌



Printer - Tago's

Owner - Mr. Y. Hara,
Yokohama

Blank Page Digitally Inserted

第百六十七 春夏山水圖 拙宗等揚筆

四季山水圖四幅中の二幅

絹本水墨

各竪四尺九寸五分、横二尺五寸

横濱 原富太郎君藏

(第二百八十五頁參看)

(卷二百八十正頁參看)

謝所 取 富太 淵 豫 鑑

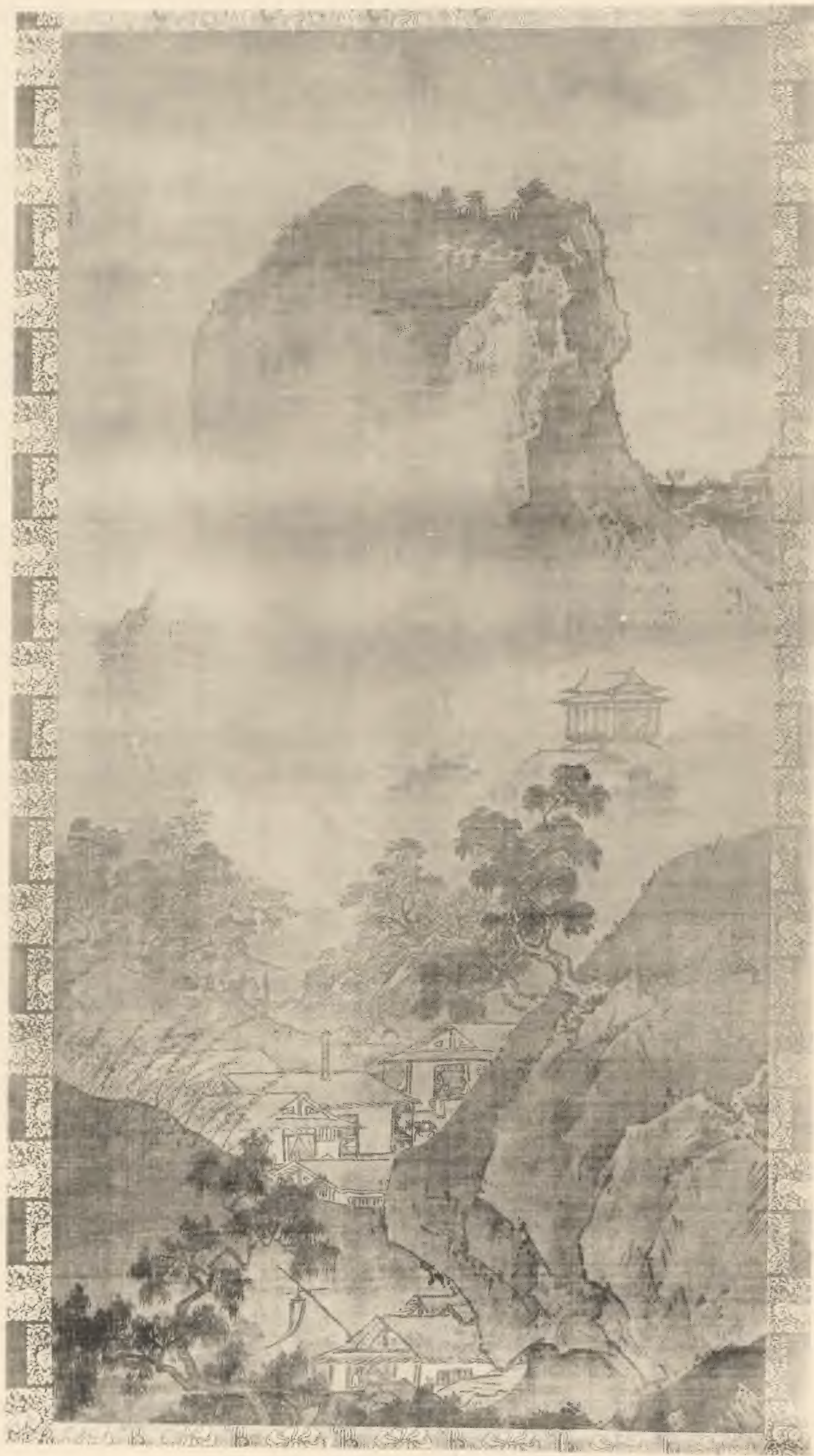
香 翠 四 只 武 七 正 長 辦 二 只 五 十

滿 本 水 墨

四 季 山 水 圖 四 冊 中 二 冊

卷百六十一 春夏秋冬山水圖 謝宗榮藏





Parmiter - Van Klee.

Amos Benson H. J. J. J. J.

Today.

Blank Page Digitally Inserted

第百六十八 山水圖 雲溪筆

紙本水墨

豎二尺八寸、橫一尺四寸

東京 男爵岩崎小彌太君藏

(第百八十六頁參看)



二二八十八頁

卷二 四四四四小圖上

二二八十八頁

謝本

卷百六十八 山水圖 雲點

雲隱山房



Printer - Se 5000

Owner - The Imperial Tokyo Museum

Blank Page Digitally Inserted

第百六十九 夏冬山水圖雙幅 雪村筆

紙本淡彩

各壁三尺四寸四分、横一尺三寸三分

甲乙二圖は各其全體にして、丙は乙圖の一部分を大
寫し、以て筆致傳彩を細觀するに便せり

東京帝室博物館藏

(第百九十三頁參看)

第二回大正三年五月

東京帝國新聞社

東京日本新聞社

東京日本新聞社

東京日本新聞社

東京日本新聞社

第六十六次 夏山本間堂 雲林堂







Painter - Saison

Cham - Marquis J. Satake.

Yokyo.

Blank Page Digitally Inserted



第一百七十 風浪帆船圖 雪村筆

紙本淡彩

竪七寸三分橫一尺四分

東京 侯爵佐竹義生君藏

(第二百九十三頁參看)



(第二冊 五十三頁 卷一)

東京 新書館 發行

昭和十三年三月一日

日本書院

第二十卷 風俗地圖 雲村



Parvula - 5050m

Crosses - Mangrove

Kyoto.

Blank Page Digitally Inserted

第一百七十一 松鷹圖 雪村筆

紙本水墨

竪四尺一寸九分 横一尺七寸六分

(第二百九十三頁參看)

京都 曼殊院藏

(第二頁至十三頁)

京師

卷四
卷五
卷六
卷七
卷八
卷九
卷十
卷十一
卷十二
卷十三
卷十四
卷十五
卷十六
卷十七
卷十八
卷十九
卷二十
卷二十一
卷二十二
卷二十三
卷二十四
卷二十五
卷二十六
卷二十七
卷二十八
卷二十九
卷三十
卷三十一
卷三十二
卷三十三
卷三十四
卷三十五
卷三十六
卷三十七
卷三十八
卷三十九
卷四十
卷四十一
卷四十二
卷四十三
卷四十四
卷四十五
卷四十六
卷四十七
卷四十八
卷四十九
卷五十
卷五十一
卷五十二
卷五十三
卷五十四
卷五十五
卷五十六
卷五十七
卷五十八
卷五十九
卷六十
卷六十一
卷六十二
卷六十三
卷六十四
卷六十五
卷六十六
卷六十七
卷六十八
卷六十九
卷七十
卷七十一
卷七十二
卷七十三
卷七十四
卷七十五
卷七十六
卷七十七
卷七十八
卷七十九
卷八十
卷八十一
卷八十二
卷八十三
卷八十四
卷八十五
卷八十六
卷八十七
卷八十八
卷八十九
卷九十
卷九十一
卷九十二
卷九十三
卷九十四
卷九十五
卷九十六
卷九十七
卷九十八
卷九十九
卷一百

卷百一十一
卷百一十二
卷百一十三
卷百一十四
卷百一十五
卷百一十六
卷百一十七
卷百一十八
卷百一十九
卷百二十
卷百二十一
卷百二十二
卷百二十三
卷百二十四
卷百二十五
卷百二十六
卷百二十七
卷百二十八
卷百二十九
卷百三十
卷百三十一
卷百三十二
卷百三十三
卷百三十四
卷百三十五
卷百三十六
卷百三十七
卷百三十八
卷百三十九
卷百四十
卷百四十一
卷百四十二
卷百四十三
卷百四十四
卷百四十五
卷百四十六
卷百四十七
卷百四十八
卷百四十九
卷百五十
卷百五十一
卷百五十二
卷百五十三
卷百五十四
卷百五十五
卷百五十六
卷百五十七
卷百五十八
卷百五十九
卷百六十
卷百六十一
卷百六十二
卷百六十三
卷百六十四
卷百六十五
卷百六十六
卷百六十七
卷百六十八
卷百六十九
卷百七十
卷百七十一
卷百七十二
卷百七十三
卷百七十四
卷百七十五
卷百七十六
卷百七十七
卷百七十八
卷百七十九
卷百八十
卷百八十一
卷百八十二
卷百八十三
卷百八十四
卷百八十五
卷百八十六
卷百八十七
卷百八十八
卷百八十九
卷百九十
卷百九十一
卷百九十二
卷百九十三
卷百九十四
卷百九十五
卷百九十六
卷百九十七
卷百九十八
卷百九十九
卷一百



Printer - 51 30x

~~Printer~~

The Fine art school of Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

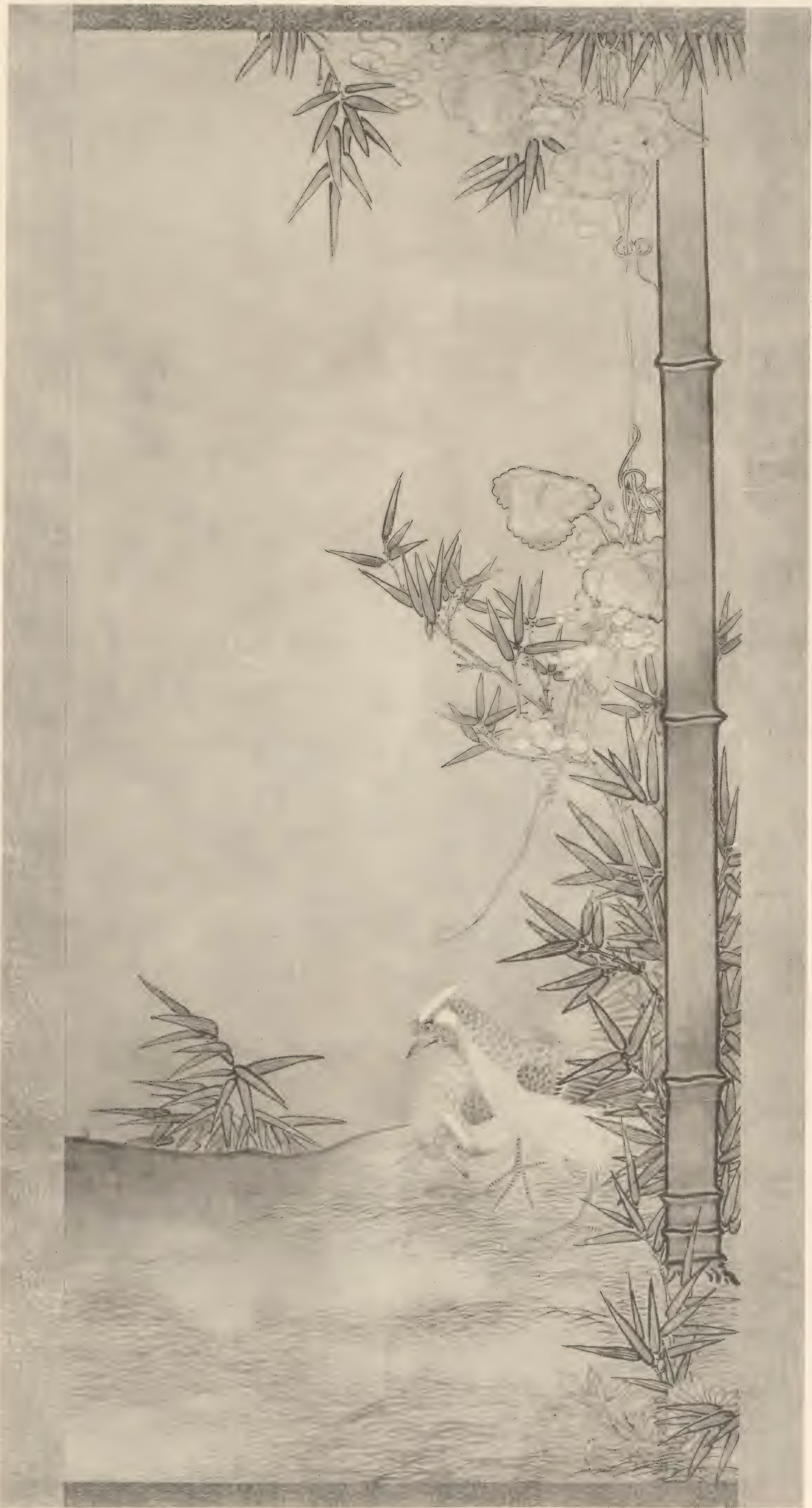
第一百七十二 花鳥圖雙幅 雪村筆

紙本著色

各豎三尺六寸、橫一尺六寸九分

（第二百九十四頁參看）

東京美術學校藏





第五章 狩野派

狩野派

如雪、周文の畫系を受け、宋元風より發展して、眞箇行家の建幢を遂げ、爾來時に應じて能く畫風を變化し、足利、豐臣、徳川の三氏に重用せられ、公家派の土佐家が帝室の繪所として、大いに振はざりしに對し、武家派繪畫の宗家と爲りて、近古に至るまで約四百年間、畫壇の覇權を握りたる最大の流派は實に狩野派なり。

景信

狩野派の始祖を正信とす、然れども、正信の出づるは、その父出羽次郎景信の早く既に畫を能くせしに基けり。景信は二階堂山城守行政八世の孫にして、その先藤原に出で、世々伊豆國加茂郡狩野村に住せるを以て氏と爲せりと云ふ。備考或は曰く、正信の父は名を祐景と云ひ、狩野七郎左衛門の甥、後小松天皇の時の人、遠江守實成院過去帳に駿河守とありにに任ぜられ、入道して祐仙と稱せりと。一系圖備考に曰く、傳云、永享四年九月、將軍義教公、於駿河國今川範政亭、望觀富士之時、有命、景信於御前、使寫於士峯、景信日來嗜畫、故有此命云。狩野氏の京都に移れるは、かの事のその縁を爲し、ものか。蔭涼軒日錄寛正四年七月八日の條に、雲頂院昭堂後門壁畫、觀音并十六羅漢畫出了也、同月十日の條に、雲頂院昭堂後門壁畫觀音并羅漢、今晨安置之。畫師鹿野性玄、愚老施入之志、爲後證加名判又書年號月日也。御新造、爲御繪本、以大智院三幅、可被渡于宗湛坊之由、能阿以折紙巾之、とあるは、景信の畫事ならむ。されば景信は、この頃既に京都に在り、入道して性玄と稱し、畫を以て義政に事へしなるべし。

正信

正信は景信の長子なり。その生年詳ならず。邦信書上系圖には享徳二年とし、名人忌長、錄天文十八年九十七歳卒と云ふに合へど、邦信書上系圖等の延徳二年卅七歳病死の説、及上佐狩野兩家系圖等の天文十九年九十七歳卒の説に従へば、享徳三年ならざるを得ず。畫事備考には永享元年とし、同書又元信は文明九年正信四十九歳の子と爲せり。畫工譜略は永享六年とす。然れども、享徳三年とするの最も當れるを覺ゆ。或は伊豆に生ると云ひ、邦信書上系圖、應仁元年の事と爲せれど、十四歳にては如何にや。邦信書上系圖に曰く、正信天性畫圖を好み、畫く處、入皆稱譽之、依而將軍家金殿之畫、蒙命を賜はりてその近侍たり。邦信書上系圖、應仁元年の事と爲せれど、十四歳にては如何にや。邦信書上系圖に曰く、正信天性畫圖を好み、畫く處、入皆稱譽之、依而將軍家金殿之畫、蒙命畫之、於是將軍義政公正信之能畫を知り給ふ。本朝畫史に曰く、始公方家造金殿、令宗丹畫之、未竟而死矣、當斯時、雪舟入明、未歸朝、故無能繼其功者、舟之歸自明也、宿泉州堺津、其家有花鳥屏風、舟視之曰、美哉、似吾友小栗宗丹、又有自然而至者、是爲誰、主人曰、先有公方臣狩野大炊助者、自謂學畫於宗丹、是其人之所畫也、舟歸京、公方家命曰、宗丹畫殿之功未終而死矣、子須成之、雪對曰、幸有狩野氏之子、在近臣中、善畫、況金殿之畫、不宜於僧、公曰、未知也、乃使之繼畫、然後知正信之能畫。謂はゆる宗湛の未了の畫を作れりこの事、及雪舟歸朝の時、正信に推讓せりこの事は、宗湛の歿年及雪舟の歸朝と、東山殿舎の落成との年曆の關係上、信じ難しと雖も、正信が文明十五年に東山の殿舎に畫きしは事實なり。されば京華集三卷十に曰く、文明十五年癸卯六月廿七日、准三宮大相公、初移東山新府、貴權戚門、冠蓋如識、蓋賀落成也、天子降勅、賜名爲東山殿、中於其殿中也、命狩野大炊助畫瀟湘八景於障子、特選吾徒能詩者各賦一詩、張於其上、而拙僧最拙于詩、隨諸老之後、賦八景之詩、孰弗泚其頰哉、而公

命不可遣書以獻上、七月十七日也、予備第五番編次、得洞庭秋月之題云。景三、翰林五鳳集に煙寺晚鐘、蘭坡、瀟湘、夜雨、天隱とあり。爾來正信が將軍家の畫事を勤めしさまは、蔭涼軒日録に依りて、頗るこれを詳にすることを得べし、左にその抄録を列記す。

文明十六年十一月十四日 「自西府、東福寺檀越光明峰寺殿尊像、遣狩野助、可被寫之、然者、常樂庵江自予ガ方相副一僧於狩野助、可遣之、命有之、以二階堂、被仰出。」

同年同月十五日 「來十八日、於東府、御祈禱事、昨日被仰出、中畧齋罷、相副柏藏主於狩野助、遣常樂庵、彼尊像二幅、柏藏主持之來、奉獻西府、御一覽後、被返之、狩野助借之以寫之。」

同十七年十月廿九日 「次即于彌陀、十之故事、可相擇旨、以前有台命、橫川引之、書以獻之、中畧相公御一覽、協台襟、仍有台命、召鹿野助於私第、先令圖一人、可供台覽、夏珪樣歟、又馬遠筆樣歟、其外何筆樣、思案而可圖之、命有之、畫紙寸方之紙一枚被出之、中畧召鹿埜助、以台命談繪事、鹿埜助曰、馬遠樣可歟、雖然、西指菴御書院之畫樣馬遠也、然者、李龍眠樣可然歟、先一幅筆而可供台覽云々、九品之鬘陀羅一覽之、以畫之可也云々。」

同年十一月二日 「晚來謁東府、鹿野助所筆之畫之草案二幅供台覽、鹿野曰、馬遠樣然乎、雖然、西指庵御書院畫像馬遠樣也、然者、李龍眠樣然乎、可爲上意、御畫樣相定、御物畫中、有李龍眠、馬遠所筆之御畫、可多、一覽以可致調法云々、又九品鬘陀羅見之爲本者可也、自淨土宗方被召寄、可賜由白之、中畧鬘陀羅事、可命調阿之命在之。」

同年同月廿八日 「御物三幅一對、今朝以昌子、贈于狩野助宅。」

同年十二月六日 「御持佛堂壁十僧圖之事、書草案、可供台覽之由白之。」

同年同月十八日 「不參、招相阿、鹿埜助、齋之、齋罷、小補來、相共評議十僧之畫樣、有宴。」

同年同月廿四日 「十僧畫樣、去十八日、橫川、相阿、鹿野助、終日於愚所評議之、先一枚書以可供台覽之由、助白之、助近來困窮非恒、即書御畫非白之、如今者、不可堪忍、被加御扶助者然乎、自寺家、御判御扎千疋近口可進上之事有之、雖些少、先可被遣歟之由白之、有御領掌、乃傳台命於鹿野宅。」

同年同月廿五日 「晚來鹿野助携樽來。」

同十八年正月十三日 「十僧圖草案、何頃可出來哉之由、有御尋、定近日可出來歟之由白之、李龍眠筆之老子青牛之圖、相阿方申、可遣獵野方之由、有命、中畧遣丹公相阿宅、老子圖之事、傳台命、又遣昌子、獵野宅、督十僧圖之事、此日八鼓刻、東相公御成于小川御所。」

同年同月十七日 「十僧圖十枚見出之、又持歸、御持佛堂雖半作、先可令見于獵野介之由、被仰出、乃傳台命。」

同年同月廿八日 「十僧圖獵野助重而調之、以前所圖十幅、皆被留御前、時有御宴、以故閑可有御覽之由、被仰出。」

同年同月廿九日 「十僧圖前後所圖二十幅、以昌子、獵野方宅返之。」

同年三月廿四日 「十僧圖十枚、獵野助持參、愚供台覽、有御感也。」

同年四月廿九日 「舊冬十僧圖、命獵野介時、御繪三幅一對、爲畫本被出、在獵野介家、昨日返之、此方今日於殿中、渡之調阿、本尊文殊、維摩、李龍眠筆、脇左右牛、李廸筆也。」

同年五月廿九日「自東府、東福寺涅槃像其外處々涅槃像、可被供、台覽之由被仰出、乃遣一行、建仁、東福、傳命、當寺無之、毎年借崇禪院涅槃像、以掛之、又狩野大炊助所筆佛像有之者、可献之由有命、愚所持五大尊一幅、以悰子先献之。」

同年同月晦日「此日於意足室、狩野大炊助正信調齋、供闔寮衆、凡著座衆十。」

同年十一月六日「狩野大炊助來、齋之、仍寫愚陋質、先也所寫太不相似、故又寫之者十五六枚、遂不相似、及晡后歸矣。」

長享二年五月七日「來八日、心月、相阿、狩野助可齋之命、以使者傳之、皆諾之、(中畧)晚來狩野大炊助來云、此五六十日在大津、與京兆同所、件々彼三昧話之、實異人也。」

同三年二月十日「狩野越前來云、江之御所可被畫彌勒像、畫本無之、他借以賜之爲幸、愚云、於禪家無之、眞言家可在之乎、相尋可白云々。」

同年同月十五日「借久昌十三佛像、命昌子、贈狩野越前宅、乃返之。」

同年四月朔日「於功叔寮、狩野大炊助來、御影(義尙公)草案示之、功叔見加意見、有増減之所、代物千疋、明日於當院可渡之山、功叔見諭狩野也、(書史)これを引けり。

同年同月十二日「晚來狩野大炊助、持御影來、愚云、明日入興、可度等持云々。」

同年五月四日「狩野大炊助持常徳院殿御出陣之像下繪來、一見之、乃勸盃、約政則公之所請畫像之事、今月中可出來云々。」

同年同月廿八日「依崇壽桃源不例、可寫紙形之由、自景徐翁有命、乃遣昌子於狩野助宅、必可參云々、薄晚助來云、寫桃源紙形。」

延徳三年四月朔日「狩野大炊助指相公(義尙公)法體之紙形也、八枚來、與堀川殿見之、擇其似者一番、置之堀川殿、持以見諸局。」

同年六月九日「往游初軒、(中畧)游初軒座敷畫、狩野法橋所筆、一見之。」

同四年二月三日「晚來狩野法橋來、不面之、北房所筆障畫見之、非之者件々、行盃、淺斟低唱一興也。」

明應二年九月十五日「晚來狩野法橋携松菴一盆、柳樽一隻來、寫予陋質、秉燭勸盃、三献過歸宅。」

同年同月十六日「遣昌公狩野法橋宅、仲昨日來臨、兩種持來謝、(中畧)又畫絹代物百疋遣之、禮謝丁寧。」

同年九月廿三日「齋罷、遣丹首座於狩野法橋宅云、雲澤季瓊和尚肖像并予陋質督之、不可有如在云々。」

これ等の史料に依り、正信が足利家に仕へてその畫事を勤めしこと、將軍家藏幅の馬遠、夏珪、李龍眠等の畫を以て製作の藍本と爲せしこと、文明頃頗る貧なりしこと(實成院過去帳に「父駿河守景信、家亡落、而正信之代、畫工成」とあるは事實か)、及季瓊和尚等との交際のみならず、その越前守に任ぜられしは長享の頃なるべく、法橋に敘せられしは延徳の頃なるべきこと、及延徳二年病死と云へる邦信書上系圖の説の誤りなること等を決するに足れり。實成院過去帳に「任美濃守、名畫傳に、式部大輔に任ず、畫事備考に「前民部卿」など見えたりしこと、この外、強ち信じ難し。邦信書上系圖に「將軍義政公依命剃髮仕、祐清與改名仕、被敘法眼」とあるは、蓋し前記延徳中法橋たりし事にて、法眼に敘せられきことは、爾餘の系圖及畫傳の諸書にも見えたりと、果して事實なりや否やを知らず。祐清一に勢、盛、又と稱せしは延徳入道以後の事ならむ。實隆公記明友清に作る

應五年五月廿六日の條に曰く、彼（御筆御肖像）御影事、猶以自万松軒、重々有示承之旨、繪師狩野入道來、則相謁、愚存分大概、雖中舍、猶不明其意之間、所詮伏見御安置之女院御影拜見、尤可然之由、命之、然者、明日邊可參城南之由、中之間、則書折紙、可遣般舟院之由、命之了、又同月廿八日の條に曰く、及晩狩野入道來、昨日參伏見、彼御影拜見、寫取之御裝束色目等事、几帳帷等之事、巨細示仰之、勸一盡了、何様彼肖像令出現者、先可持來之由、談之、件色目等委可注之、古畫備考に常徳院義尙御集を引いて、文明十六年正月廿八日、臨時會、藤爲松花の歌の條に、右歌者舊冬對後京極殿談和歌、中奇特夢想也、然仰中納言入道、彼御像令書寫、狩野大炊入道とあれど、文明の頃は未だ入道せざりきとおぼし、入道の後、法名を行蓮と云ひ、家頗る富みしことは、本化別頭佛祖統記に依りて知らる。同書に曰く、本化諸師傳曰、狩野修理亮號叡昌、其子伯耆守某入道呼朗舜、其子伯耆友清入道行蓮、其子大炊亮元信、又朗舜妻呼祐幸、棄一子爲僧、比企第八代日調上人是也、叡昌之女、嫁于長尾小五郎某、生第七代日壽上人、行蓮者、貨財豪富、閭里推重、舍弟日調火災之時、比企伽藍、不借他力、奮躬一新、又造總之大野光福寺、先に見えたる文明十七年頃の貧困とは餘りの徑庭あれば、果して信すべきや否やを知らず、畫史に「晩年因一藝、敍法眼佳」と曰ひ、實成院過去帳にも「法眼」とあれど、そは誤傳にて、蔭涼軒日録に見えたる法橋に止まりしには非じか。かくて正信の歿年亦異說一ならず、邦信書上系圖には「延徳二庚戌年七月九日、三十七歲而病死仕候、京都妙覺寺に葬中候、法名巧往院、畫工譜略は享祿三年九十七歲、名人忌辰錄には天文十八年四月廿一日卒、歲九十七」とし、妙覺寺中實成院過去帳には「巧往院殿前越前守法眼祐清正信日如大居士、天文十九年庚戌七月九日壽九十七歲」とあり。過去帳の記錄最も信ずべきが如し。畫事備考には塔銘「山高院殿從五位上越州之大吏前民部卿法眼祐清正信之塔」を出し、土佐狩野兩家系圖には「法名慈昭院日如」とあり。亦過去帳の記錄の最も信ずべきを認む。たゞひ前に性玄の在るありと雖も、正信實に狩野家の畫祖なり。されば邦信書上系圖にも、正信以來、畫業を以て家職罷在候」と曰へり。その畫風の系統を尋ぬるに、如雪、周文より出で、畫史にも「畫法師周文」と曰へれど、正信が實に師事せしは、蓋し小栗宗湛なるべし。さるは、正信の出生を延徳二年とするに、當時周文は既に世を去りし人なるべければなり。畫史に「又師小栗宗丹而得其趣」と曰へるは事實ならむ。然れども、同書に「人物倣宋梁楷」と曰ひ、又前記馬夏龍眠等を畫本と爲せしこと等を合せ考ふれば、たゞひ宗湛に學べりとするも、文明の中頃宗湛の世を去りし後は、宋元の古畫に就いて工夫する所あり、以て自家一流の風格を創せしならむ。畫史曰く、「最長人物、喜用減筆、曾不見倭畫、畫工便覽に、一日畫花鳥、胡蝶飛來而宿彼樹枝、又畫雪木、雀來而休于枝、垂於羽、是等類幾度、不可勝計」とあるが如きは、固より信ずるに足らず。正信の畫印には「正信」及「伯信」の壺形并に「正信」の方形朱文印あり。左に遺作の尤品數點を掲ぐ。

第一百七十三 狩野正信筆周茂叔愛蓮圖

第百七十四 同筆虎溪三笑圖雙幅

第百七十五 傳同筆竹鶴圖屏風

正信は元信よりも遺作少きに由るとは言へ、元信の如き一定の典型を認むること難し。されば書史にも「其筆法適意而無定法、獨超格式、至得元信、狩野氏終爲天下畫工之長也」と曰へり。蓋し宋元諸家の遺作に倣ひ、時に變化を試みしが爲にして、家風尙草創の運に屬せりと謂ふべし。然れども、その定型の顯著ならざると、練熟に頼りて筆を走らせしか如き觀なく、頗る功力を費したるが爲に、調趣極めて莊重なるとは、觀者を歎服せしむる力、却りて元信よりも勝れる所以なるを覺ゆ。愛蓮圖の筆墨の如き、殊に然り。三笑圖は以てその人物畫に於ける技巧を觀るべし。竹鶴圖屏風は款識なしと雖も、眞珠庵の傳稱疑を容れず。以てその花鳥の造詣を察するに堪へたり。

正信の作と稱し來れる畫に「長吉の鼎形印あるものあり。名畫拾彙に曰く、長吉學元信、有風致、往々傳于世矣」。正信の畫にこの印を捺せしか、長吉果して元信の弟子か、明ならず。今姑くこゝに附載す。

第百七十六 長吉筆觀瀑圖

この畫を觀るに、正信と元信との間位に在りとも謂ひつべき畫風にして、而も頗る佳なり。亦傳へざるべからず。

元信

元信は正信の長子なり。文明八年八月九日山城に生る。幼名を四郎次郎と云ふ。天性畫を巧みにし、四五歳の頃より遊戲筆を執り、人物、鳥獸、草木、器物、目に觸るゝ物、皆能くこれを書き、人皆その奇材を稱せり。文明十七年十歳にして足利義政の近侍と爲り、畫を以てこれに事ふ。

書上系圖は延徳二年父病死せしを以て遺跡を相繼すと爲せり。義政薨去の後義澄將軍に仕へて、又その近侍たり。以上邦信書上。土佐光信の女。京都狩野野厨子の家に在り、小島嘉右衛門あづかる」と曰へり。

千代前を娶る。永正の頃數幅の山水、花鳥を作り、支那の商舶に附して明に遣す。

古畫備考には洞簫老の言として、策彦遺明の時（天文十九年）元信の畫扇を携へしを鄭澤に見て、鄭澤は「此品、若遭夏士良之時、必在圖繪寶鑑之列也」と曰ひ、若木集には策彦遺明の時（天文十九年）元信の山水一軸を携へしに、明の畫人こ

生畫彩、恰若趙昌、又如馬遠、筆跡甚可觀也。若進貢船來時、得遊吾國者、必作先生門下弟子焉。伏希傳達爲幸。起居拜知、鄴城鄭澤印、狩野四郎二郎

先生座下、延徳五年（永正七年）仲春奉書。

此の書後中橋家出づに在りしが、明曆三年正月十八日、江戸の火災に焼亡し、後摸寫を以てこれを傳へ、毎年正月二日かき初めの時、床に掛くるを例とせり。

書事義澄薨去永正の後、修業の爲に諸國を歴遊し、到る處、山川の勝景を寫し、數年にして京

に歸り、名を大炊助と改め、繪所預に補し、越前守に任ぜらる。

上邦信書。上系圖。畫事備考に曰く、元信畫工の長とならぬはじめ、亂世の時ゆゑ、大德寺の門内に居す。其後土佐の跡をつぎて、上京狩野野厨子（上京小川東新町、德大寺町西）の屋敷の地を賜り居す。其節より山城國小原の内、二百石の地を拜領す。尤山川是に付たり。子孫代々今に領す。

永正十年六月鞍馬寺緣起三卷を畫き、奥書曰、「嗣青蓮院准后（前天台座主尊應、八十三歳）、繪狩野大炊助藤原元信、右鞍馬寺緣起者、依有子細、任尊天御國、新開畫圖奉寄附當寺。永正十年癸酉六月日、右京大夫源朝臣高國（花押）今現在存」

同十二年春嚴島奉納の三十六歌仙嚴島畫馬鑑に出づを畫く。殿中次記正月九日の條に「永正一、御扇一本、爲御嘉例進上、仍狩野大炊助」があれば、當時又義

植將軍に仕へしなり。既にして將軍義晴元信の畫技を賞し、命じて剃髮せしめ、法眼に任ぜらる。邦信書上系圖永仙又玉川とも號せりと云ふと稱せしはこれよりな

るべし。二水記大永五年十一月十二日の條に曰く、午時向帥卿亭、狩野畫屏風、松竹梅即時周備、事早速、筆勢絕妙也、見物衆悅目了。實隆公記同日

の條に曰く、帥二枚屏風、招鹿野令書之、即出現、珍重、範久朝臣媒介也、羞晚喰、其外爲見畫來臨人々、勸一盞。同月十八日の條にも「甘露寺來、被見屏風繪」とあり同記享祿五年三

月廿四日の條に曰く、狩野扇二本出來、後奈良院宸記天文四年十一月七日の條に曰く、可野唐繪屏風、今日書進、近頃見事也。嚴助往年記天

文七年五月卅日の條に曰く、屏風新調、狩野繪出來也。又萬松院穴太記天文十九年五月七日の條に「金屏清光院被進之、狩野ごあり。この事續應仁後記法眼書之、扇畫なり」

にも細川澄元曾て元信をしてその戎衣の像今傳へて前田家に在り云ふを寫さしめ、宜竹これに賛せしことは人物志に見ゆ。畫史に依るに、元信の足利家に

仕ふるや、毎歲正月二日畫扇を獻じて年を賀す。將軍乃ち杯を賜ふに、第一典藥頭某、第二元信、以下諸士に及ぶを例とす。後將軍の天子に朝

するや、その扇を柳筥に入れ、隨身をして車前に捧持せしめ、禁闕に至り、車を下りてみづからこれを執りき。子孫以て榮と爲す。將軍曾て夢

に鞍馬の僧正坊を見る。僧正坊曰く、願はくは元信をして我が像を畫かしめて寺中に安置せよと。將軍乃ちこれを元信に命ず。畫史には蜘蛛の絲を引いて紙面

を行くを見て圖を成せりと云へり仍りて僧正坊及左に役行者、右に牛若丸を畫く。その畫方六尺、屋を破りて出すことを得たりと云ふ。彫金の名工後藤祐乘、その

居相近くして元信と善し。故を以て常に畫を元信に乞ひて、善く獅龍等を彫る。祐乘の盛名を博したる所以、一はこれに由るのみならず、後

世後藤の家風永く狩野の畫格に倣へり。この三事並に當時元信の世に推重せられしこと、想ひ見つべし。永祿二年十月六日病みて卒す。歲八

十四。或曰八十三、八十又八十六歲妙覺寺に葬り、法名を善巧院通性日到と云ふ。畫史及系圖等世に古法眼と呼ばる。その爲人については畫史に一則の逸話あり。曰

く、或適意、則憑机而畫扇十數片、當時畫扇の流行せしこと、第三章に見えたり一日武士十餘輩卒爾來、見其所畫、妄評之、織田信長公時爲上總介、爲見其畫、而共衆人竊來

也。信長の上京は元信の卒後と見ゆれば信じ難し元信知之、然默而不顧、出脚於机間、作畫不已、客去後、隣人來曰、太守之來、何無禮乎、答曰、彼潛來、故我又不敢之、且我無求于

彼、故然也。元信貧而不諂也。その畫技に至りては、父に學びけむこと言ふを須たず。古畫備考に、元信上京して宗湛に就くに先だち、下野足

利飯塚山の城主長尾但馬守景長に學べりと曰へるは、信じ難し。而して元信が繪所預と爲れるについては、邦信書上系圖に「土佐家宗族無

之に付、元信儀、土佐光信聲にて御座候間、元信繪所を預り申候とありて、永正の中頃とおぼしけれど、さては光信の尙世に在るありて信じ

難く、たとひ大永五年光信卒去後の事とするも、その孫光元が永祿十二年に戰死するまでには、光信の子光茂ありて、元信の光茂に寄せし尺牘前に出づ享祿元

年從五位上、天文元年正五位下、刑部大輔に敘任せられ、天文十七年には足利將軍義晴の壽像を畫きしのみならず、光元も天文十年從五位

下、左近將監に敘任せられしほどなれば、元信の卒したる永祿二年までは、土佐の宗族絶えしことなし。されば元信の繪所預と爲れること

は頗る疑なき能はず。たゞ憶ふに、或は姻戚の故と、畫名の盛なる故とを以て、繪所の職を元信に譲りしか。さらずば、光元戰死の後、土佐の宗

族絶えたるに當り、松榮にても繪所預と爲りしことありて、それを元信と誤り傳へしにもやあらむか。今にしてこれを詳にすること難し。後世狩野の家廟、光信の本主を賓位に祀りしは、その元信の岳父たるが爲のみならず、元信の畫ける繪卷物等を見ても顯著なるが如く、その畫法殊に設色の大いに土佐家に得る所ありしが爲なるべし。元信の畫印には壺形朱文の名印あり。本朝畫史の著者永納は狩野家の人なるを以て、元信の畫を品すること稍過褒に屬せりと雖も、その言尙頗る聽くに足れり。曰く、其爲畫也、溫良而細密、滋潤而清秀、山水、人物、鳥獸、花木、俱窮乎妙處、殆入於神品矣。夫近世土佐氏倭畫、雪舟子墨畫、各臻其極處、若元信、彩墨盡其美、和漢得其宜、中是以得冠於古今、而甲於倭漢也。又曰く、凡元信所學之山水、則馬遠、夏珪、牧溪、玉澗及舜舉、子昭之濃色、人物則馬遠、夏珪、梁楷、顏輝、花鳥則趙昌、馬遠、舜舉、倭畫則因信實、光信之法、其短者除之、其長者取之、使人入正門、行直路、其有功於畫也大哉。左にその遺作を掲げて畫風の變化を觀む。

第百七十七 元信筆琴棋書畫山水圖八幅の一

第百七十八 同筆月夜山水圖八幅の一

第百七十九 同筆瀟湘八景圖四幅中の二圖

第百八十 同筆豐干、寒拾圖雙幅二圖

第百八十一 同筆群雁圖屏風一雙二圖

正信は實に狩野家の始祖なりと雖も、その畫風尙一定の典型を成さざりしが、元信その箕裘を紹ぎ、天稟の才と修養の力を以て、前人の所長を集めてこれを渾融大成し、人物、山水、花鳥皆善くせざるものなく、柔剛粗密の筆致、絢爛淡泊の彩墨、南北の二宗を兼ねて、その變化を自在にし、加ふるに、和繪の法を土佐の家門に取りて、繪卷物の作にも長じ、狩野派の行家縱横の法格は、こゝに於いて始めて備はれり。故を以て、畫史にも「學畫遠過於父、遂成一家」と曰へり。されば元信の畫は、その風趣一にして足らず。たとへば元信寺の稱ある妙心寺靈雲院の障壁畫（今掛幅四十九幅と爲せり）を觀るも、琴棋書畫山水（八幅）は馬遠、月夜山水（八幅）は玉澗、花鳥圖（十二幅）は牧溪、溪山問奇圖（八幅、この餘山水落雁圖三幅、雪景山水故事圖八幅、宿鴨宿鶉圖二幅あり）は夏珪の風に倣ひて書きしと傳ふるが如く、その中、馬夏の二風は後者の用筆稍細銳なるのみにて大體頗る相似たりと雖も、これと玉澗風の濃墨、牧溪風の破筆とを較ぶれば、殆ど別手と見ゆる變化あり。而も規模雄大なる布局の巧妙に至りては、雪舟と雖もこれに及ばずと謂ふべし。靈雲院の琴棋書畫山水圖（こゝにその一幅を掲ぐ）山水落雁圖、溪山問奇圖と共に世に著れたる遺作の中、金地院の山水樓閣圖、秋元興朝子爵の瀑布圖（二幅）伊達宗基伯爵の山水橫披及伯牙鍾子期圖、毛利元昭公爵の山水圖屏風（一雙）等は、皆馬夏風に屬し、南宋院體の正脈を傳へて、皴法は並に斧劈を用ゐたり。これを雪舟に比するに、老蒼の雅趣は缺けて、品格稍下れりと雖も、精巧は則ち勝れり。これを元信山水の勁體とす。雪景山水故事圖及妙心

寺東海庵の瀟湘八景圖(元靈雲院藏、こゝにその二圖を掲ぐ)等は則ちその輦體に屬するものにして、靈雲院の花鳥圖と共に、雪舟の輦體の古南畫に屬すると異りて、主として牧溪の畫風より出で、これに變化を加へしものなり。然れども瀟湘八景圖には、往々米法を用ゐたる所、亦南畫の法を交へたり。月夜山水圖(こゝにその一幅を掲ぐ)に至りては、即ち玉湖風の潑墨にして、更に又一體を成せり。以上の諸體墨畫最も多きに居ると雖も、勁體のものには間々淡彩あり。琴棋書畫山水の如きは即ちこれなり。人物畫にも亦勁輦の二體を認む。帝室御物四皓七賢圖屏風(一雙)、伊達家の伯牙鍾子期圖等は勁疎の筆致、院體馬氏等の格より出で、その描法前出正信の三笑圖に似たり。大德寺聚光院の釋迦、達磨、臨濟圖、帝室博物館の花鳥と三幅對を爲せる釋迦圖等は、その描法謂はゆる柳葉と蘭葉とを兼ねて、頗る輦和なるものとす。又輦和の體に近くして而も別調を具へ、殆ど元信の創格とも視らるべきものには、こゝに掲ぐる赤星氏の豐干及寒山、拾得圖雙幅、龍安寺(京都花園)の靈祐倒瓶圖等あり。就中豐干、寒拾圖に至りては、殆ど元信人物畫中の白眉とも謂ふべきものにして、石皴は輦體の而も索落の趣最も賞すべきものに係り、人物の描法は肥瘦活脫の妙を極めたり。これ等諸體の外、元信の人物畫には別に繪卷物あり。清涼寺の梅檀瑞像緣起(五卷)、池田仲博侯爵の酒顛童子繪卷(三卷)等をその尤品とす。土佐風を折衷して、巧緻精麗の設色を施せり。これ實に和漢渾和の新典型にして、繪卷物史上の顯著なる一沿革たり。花鳥も亦元信の能くせし所、その體又兩種の變化あり。一は靈雲院の十二幅、宿鴨宿鴉圖、帝室博物館の釋迦を中幅とせる左右の二幅及こゝに掲ぐる秋元家の群雁圖屏風(一雙)の如き類にして、主として牧溪風に屬し、間々淡彩を加へたり。一は設色較々濃麗なるものにして、勾勒填彩の黃氏體こゝに至りて始めて全きを憶ふ(以上の諸品中こゝに掲げざるものは、皆元信畫集に出でたり)

之信

元信の妹は後藤光乗に嫁す。その弟に之信あり。正信の次子通稱を雅樂助と云ふ。印文に輞隱長方文とあり。蓋しその號ならむ。畫事備考に「禁裏畫用を勤む、天正三年乙亥の年、行年六十三にて卒す、京都妙覺寺に塔あり、中塔銘、信光院之信英心日山居士とあり。畫工譜略には法名性通、中文龜年中三十九而卒」と曰ひ、丹青若木集には「早年死」と曰へれど、歿年月は畫事備考を信ずべしとす。文龜より廿九歳とすれば之信の名を一に季信、諸信正、便吉信名公書譜等と爲せるは非なり。蓋し印文の誤讀より出でしならむ。前記「輞隱」の外、之信の壺形印あり。

第百八十二 之信筆耕作圖

八幅の三

第百八十三 同筆布袋圖

畫史に曰く、善山水人物花鳥、極似元信、其無印者、乃元信之畫也、大抵能守家法、而風格高舉、氣韻蕭爽、而聊乏老成者、雖然其妙處亦至矣。蕭爽の評は中れりと雖も、その遺作中の最傑作とも謂ふべき大德寺大仙院の耕作圖(元障子なりしが近ごろ掛幅と爲せり、こゝにその三幅を掲ぐ)を觀るに、筆致は元信よりも較々瘦銳なるを認む。人物畫の遺作にては、こゝに掲ぐる伊達宗基伯爵所藏の布袋圖等をその尤とす。耕作圖中の人物の極めて勁銳なる描法と異なりて、圓滑肥膩の筆致、一種の別調を成せり。間々元信を撫倣せしが如くにして、而も及ばざるものあり。帝室博物館の三聖圖の如きは即ちこれなり。

第百八十四 狩野松榮筆竹林七賢圖

畫史には松榮の畫を評して、圖畫能守家法、然不及父、其中至於秀逸、則大似而小粗耳と曰へり。こゝに掲ぐる七賢圖はその一佳作なりと雖も、前出正信の三笑圖に見るが如き描法の、一層瘦銳細刻を加へたるものなり。

宗陳

元信の姪〔畫史曰、不知其實〕も云ひ、又その門人とも云ふに、狩野宗陳〔陳一作珍〕あり。北條氏政〔或曰、氏直〕の畫工〔古畫考〕たりきと傳ふ。畫史に曰く、畫山水、人物、花鳥、

德菴

元信數令助其工、所至可知矣。宗陳の子に、狩野德菴〔德一作得、能一作能、能一作能〕あり。名を正信と云ふ。拾葉に、住京都と曰ひ、丹青若木集に、洛下死と曰ひ、古

養拙

畫備考には、宗因と名印あり、元信門人と記せり。〔德菴の子、定信は後に出づ〕元信の養子に、狩野養拙〔養一作養、養一作養〕あり。古畫備考に、某書を引いて、元信姪、

爲養子、或曰、名宗補とあり。一本系圖には、狩野宗補〔養一作養、養一作養〕と記して、元信弟子中の初位、宗陳の前に出せり。宗補、宗陳の二人、蓋し同族なるべし。畫

史、養拙を評して曰く、善畫山水、人物、花鳥、筆力稍弱、然不凡乎。古畫備考には、其畫屏有厩馬圖、散馬圖、共似永德稍拙也、又見靈照女圖、著色精

殊牧

細など曰ひ、種々の遺作を記し、その款印〔養拙の朱文方印、養雪の横長橢圓を載せたり。殊牧名公畫譜に、自朴、玉樂子とあるも、同人か、同書及古畫備考一に、壽トに作れり、古畫殊牧、或は宗陳と、同人かは、元信の門人にして、小田原に住し、北條氏政の畫工たりきと云ふ。丹青若木集、便覽、快元僧都記、天文九年七月廿六日の條に曰く、繪書珠牧上倉、本生伊勢山田住人也、諸國廻、令小田原參、以不計御緣、御內陣〔鶴岡八幡宮〕御障子等繪可被書之、由下知、〔中〕珠牧障子之板、彫物彩色有之。同年八月廿日の條に曰く、御殿之蒲萄板、繪桐竹鳳凰、極彩色也。又九月一日の記に曰く、繪書殊牧、御座御障子、最中繪被書畢、以夜續、日被持、而して殊牧の弟、〔若木集、便覽、名公畫譜〕と云へる、狩野玉樂は、畫史に相傳、狩野元信之族姪也と曰ひ、古畫備考には、某書を引いて、或云宗陳弟と曰へ

玉樂

れど明ならず。畫事備考に曰く、玉樂齋、玉信、小田原北條氏康の畫師、本姓は不知。元信晩年の弟子なり。畫風古法眼に似たり。繪古法眼よりか

たく、少しうすし、知行千石ほどを領す。丹青若木集に、相州氏政畫工、〔中〕常往于梅閑〔後に出づ〕之許、尋窺繪事とあるに依れば、或は初め梅閑に學び

しにや。畫史には、筆法能學得元信、其秀逸而無印者、世人多誤爲元信之筆、其所至可知矣と評せり。而して古畫備考には、玉樂の條に、前島〔長方白文〕

宗祐

及宗祐〔圖扇形、朱文〕の二印を舉げ、扶桑名畫傳には、印文宗祐とあるは、もし字かと曰ひ、古來玉樂の畫と傳稱するもの、多く「宗祐」の團扇形印あり。

されど宗祐は、畫史別にこれを舉げて、能畫山水、有馬遠、夏珪之風、筆出自祐勢乎、似元信稍不優、徒有規矩耳、當時觀探幽所、極之外題、玉樂筆也、

其所畫山水、花鳥、多眞細著色耳と曰ひ、古畫備考には、元信門人とあり。惟ふに、探幽以來誤りて宗祐の作を玉樂の筆と混稱せしものか。玉樂

を或は宗陳の弟と爲せるは、更にこの混同より出でし誤傳なるべし。蓋し宗祐は玉樂とは別人にて、小田原に住し、北條家に仕へしものか。

又狩野系圖、宗補を舉げて宗祐を載せざるあり、本朝畫史は宗祐を舉げて宗補の名を養拙の下に錄せざるに由りてこれを憶ふに、或は宗

補は宗祐の印文の宗補とも讀まれ易きより誤り出でしにて、宗祐は却りて養雪と同人なりやも測られず。

第百八十五 宗祐筆李白觀瀑圖

本圖も亦玉樂の筆と傳稱し來りしものなれど、印識の文は正に「宗祐」なり。その畫風の正信と元信との間に在ること、善く畫史の評言に合ひ、而も技巧頗る精妙なるを認む。

狩野派諸家

以上列敍する所の外、狩野家の門下又は畫風のこれに類する畫人にして、本時代に屬する者、略左に擧ぐるが如し。

心海 古畫備考に曰く「祐勢門人、敍法橋」。

竹木 畫史に「畫雜圖、學祐勢」と曰ひ、竹木の白文方印を錄せり。古畫備考に曰く「祐清門人、此未在紀州」。

清信 畫史に「畫人九像、全倣信實之圖、筆法學周文、兼狩野家風」と曰ひ、清信の壺形印を錄せり。古畫備考には「祐勢門人」とあり。

家續秀松 畫史に曰く「畫花鳥、菓子、其彩墨甚清潤、筆法出祐勢、元信」古畫備考「祐勢門人」と記して、家續の朱文重廓方印及「秀松」の壺形印を載せたり。

清泉 古畫備考に「柿本神像、文明永正比、土佐ヨリ狩野ニ近シ」と記し、清泉の朱文方印を載せたり。

狩野隆也 名畫傳に曰く「東求堂の西の間に山川の圖を畫ける事、古き書に見えつと或人語りき。文明頃の人なるべし」。

狩野光正 畫史に曰く「畫墨布袋、筆法學元信、或以爲狩野氏族乎」古畫備考に曰く「祐勢門人」。

金玉僊 宦南と稱す。元信の族姪、或は元信晩年の弟子、又玉樂の子とも云ひ、北條氏政の畫工なりきと云ふ（便覽、辨玉集、畫事備考、古畫備考等）古畫備考に「宦南」の朱文方形及壺形印、常陽の長方内瓢形朱文印を載せ、畫事備考には「畫風玉樂に似て位下、墨濃し」と評せり。

玄也 畫史に曰く「不知世姓、古老曰、元信晩年弟子也、能大畫、其筆法似永德、然有甲乙而已」或は松榮の門人とも云ふ（辨玉集、拾彙、畫事備考等）古畫備考にその款印を載せたれど、印文讀み難し。

梅閑 丹青若木集に曰く「御厨屋梅閑、俗名伯耆、相州久野領主元菴之侍士也、學元信、善丹青矣、相州氏政畫工」。

刑部大夫 便覽に曰く「不知其名、勢州二見人、太神宮之御師、常好師倣古法、眼元信、善圖繪」。

木村永光 畫史に曰く「剃髮號善了、江州蒲生人、仕淺井長政爲近侍、曾師狩野元信學畫、善花鳥、又長於寫眞、平素適意則作之、故世所傳者少矣」。

右近 拾彙に曰く「峠右近、峠氏不詳、狩野元信弟子、曾畫柳鶯節分寶船圖、澤巽阿彌覺書に曰く「貞孝之御調進、節分御舟、繪所は、一兩年上京小川扇屋にて被畫之訖、又其後狩野法眼弟子に峠右近と申仁、御被官人御扶持人候、其峠にかゝせられ候」。

狩野重信 畫史に曰く「畫雜圖、學元信、畫事備考に曰く「武門の由、京都に住す」古畫備考には「狩野重信」と記し、その「藤原狩野筆」の款記、文字分明の長方朱文印及「重信」の壺形印を載せたり。後出の一翁とは別人か。

意精 畫史に曰く「筆法學元信、有眞山水畫、守規矩、古畫備考には「西國に下りて肥後に住す」と記し、意精の瓢形朱文印を載せたり。

金龍 畫史に曰く「爲雜畫、筆力學元信」古畫備考には「關東に至る、出家」と記し、金龍の壺形印を載せ、且曰く「後陽成天皇ノ御印此レト同シ、可考」。

正祐 畫史に曰く「筆法學元信、爲雜畫」古畫備考に鶉の縮圖「正祐」の壺形印を載せたり。

江北元忠 書史に曰く「江北元忠、筆法學元信、畫上印文有源之字。書事備考に曰く「古法眼門弟、狩野元忠、本氏海北（江北の誤か）。

愚俊 書史に曰く「畫人物、學元信。古畫備考にはその名の朱文方印を載せたり。

雪信 便覽に曰く「不知何人、所畫啓書記風氣、始學雪舟、元信風、畫風不一而兼合。

狩野信春 諱は敏昌、便覽に曰く「師倣古法眼、在功活動、而畫人物、花鳥、甚似元信。書事備考に曰く「古法眼弟子なり。京都に居す。

興朴 名畫傳に曰く「狩野元信の門人と傳ふ。永祿頃の人なるべし。

賢初 辨玉集に曰く「賢初古法眼弟子。便覽に曰く「堅初不知何人、曾師倣元信筆力、設色宛如元信、有士氣。古畫備考には「景俊の方印を載せたり。

泊子 便覽に曰く「不知何許人、好畫人物、花鳥、頗似元信。名公畫譜曰く「師元信。

要清 便覽に曰く「元信門弟要清、在功、士氣不多、壺印。

孤月 書史に曰く「印文有周林之字、畫東帶天神像、學雪舟筆意。古畫備考には「薩州人、又「古法眼弟子、畫龐夫婦、靈照女圖、花葵ノ畫、元信風（中畧）印文薩人

周林（方形朱文）也、など言ひ、陸呂如月（佛像、觀音、墨繪、號如月）を同人なりと爲せり。

中興 若木集に曰く「學元信、甚有功、士氣不多、佳作也、似元信。

周榮 若木集に曰く「不知何人、學元信、有功。

前田榮範 若木集に曰く「不知何人、兼合小栗宗湛、狩野民部卿法眼兩風、有功、印字爲前田榮範。

景三 古畫備考に「青綠交墨畫（中畧）全ク元信風也」と記し、「景三」の朱文方印を載せたり。

友信 古畫備考に「墨畫爪、茄子、楊梅、橫紙、古法眼風アリ、玉樂ト申傳」と記し「友信」の壺形印を載せたり。

僧正尊俊 書史に曰く「住于和州菩提山報恩院、能佛像及雜畫、蓋其畫學、狩野元信之筆法也、俗呼菩提山古僧正、俗姓出於官家柳原、爲仁和寺院家、住菩提

提院、其畫後印文有文筌之字、蓋別號也、余偶遊于菩提山寺中、處見之龍虎、墨梅竹及半身達磨等、皆有雅趣、尊俊初作倭歌、兼倭字之畫、後注意於圖畫、其

德行有餘、技藝隨之者乎。古畫備考にその款印「文筌」の朱文方印あり。

珍牧 古畫備考増補に釣魚の縮圖「珍牧」と假讀せらるゝ印（白文長方）を掲げ、傳云、啓書記筆、頗元信ノ風趣アリ」と曰へり。

壽堂 古畫備考に曰く「似雅樂助極佳、有布袋圖、有祐勢風、又養朴縮圖中、有列子圖、玄宗貴妃圖、畫法精妙、不下雅樂助。同書「壽堂」の朱文長方印及文字不

明の壺形印を載せたり。

狩野貞延 古畫備考に曰く「畫今大路道三像、文龜四載甲子彌生吉日トアリ、養川院云、雅樂助ニ似タル畫也。

藤原新三郎 梅溪文集戲墨齋の説に曰く「戲墨齋、屬者京師間、有以繪事鳴者、藤氏子新三郎是也、嘗學狩野醉墨叟（前出の醉墨齋桃林か、或は狩野家に

醉墨叟と號せし人あるか明ならず、而不師其跡、山水、野竹、屋宇、人馬尤精微也、扁所居之齋曰「戲墨。古畫備考に山水（眞笑風）及牧牛（狩野家之風、墨繪）の

縮圖及「戲墨」の鼎形印を載せ、古狩野家風にもあらずなど記せり。

宗檀 古畫備考に曰く「畫觀音、墨繪、古法眼風、宗檀廿一歲寫。

Parrot - Kano Mesembria

Owner Count M. Date

Blank Page Digitally Inserted

第百七十三 周茂叔愛蓮圖 狩野正信筆

紙本淡彩

豎二尺八寸、横一尺一寸

(第百頁參看)

東京伯爵伊達宗基君藏

（一）本報自創刊以來，對於社會公益，素極注意。茲為便利讀者起見，特在報館內，增設「社會服務部」，凡有關於社會公益之事項，均可向該部接洽。該部之職責，在於調查社會狀況，提供諮詢，並協助解決困難。此項服務，完全免費，歡迎各界人士之利用。

（二）本報為擴大宣傳，特在各地設立分銷處。凡欲訂閱本報者，請逕向最近之分銷處接洽。分銷處之地址，將於本報廣告欄內，隨時刊載。此舉旨在方便讀者訂閱，並擴大本報之發行範圍。

（三）本報為提高新聞品質，特聘請資深記者，負責採訪與報導。凡有關於社會重大事件之報導，請逕向該部提供線索。本報將竭誠為您服務，確保報導之準確與公正。

（四）本報為便利讀者，特在報館內，增設「讀者信箱」。凡有關於本報之建議、批評或查詢，均可向該信箱投書。本報將對所有來信，予以認真處理，並及時回覆。

（五）本報為擴大宣傳，特在各地設立分銷處。凡欲訂閱本報者，請逕向最近之分銷處接洽。分銷處之地址，將於本報廣告欄內，隨時刊載。此舉旨在方便讀者訂閱，並擴大本報之發行範圍。

（六）本報為提高新聞品質，特聘請資深記者，負責採訪與報導。凡有關於社會重大事件之報導，請逕向該部提供線索。本報將竭誠為您服務，確保報導之準確與公正。

（七）本報為便利讀者，特在報館內，增設「讀者信箱」。凡有關於本報之建議、批評或查詢，均可向該信箱投書。本報將對所有來信，予以認真處理，並及時回覆。

（八）本報為擴大宣傳，特在各地設立分銷處。凡欲訂閱本報者，請逕向最近之分銷處接洽。分銷處之地址，將於本報廣告欄內，隨時刊載。此舉旨在方便讀者訂閱，並擴大本報之發行範圍。

（九）本報為提高新聞品質，特聘請資深記者，負責採訪與報導。凡有關於社會重大事件之報導，請逕向該部提供線索。本報將竭誠為您服務，確保報導之準確與公正。

（十）本報為便利讀者，特在報館內，增設「讀者信箱」。凡有關於本報之建議、批評或查詢，均可向該信箱投書。本報將對所有來信，予以認真處理，並及時回覆。

（十一）本報為擴大宣傳，特在各地設立分銷處。凡欲訂閱本報者，請逕向最近之分銷處接洽。分銷處之地址，將於本報廣告欄內，隨時刊載。此舉旨在方便讀者訂閱，並擴大本報之發行範圍。

（十二）本報為提高新聞品質，特聘請資深記者，負責採訪與報導。凡有關於社會重大事件之報導，請逕向該部提供線索。本報將竭誠為您服務，確保報導之準確與公正。

（十三）本報為便利讀者，特在報館內，增設「讀者信箱」。凡有關於本報之建議、批評或查詢，均可向該信箱投書。本報將對所有來信，予以認真處理，並及時回覆。

（十四）本報為擴大宣傳，特在各地設立分銷處。凡欲訂閱本報者，請逕向最近之分銷處接洽。分銷處之地址，將於本報廣告欄內，隨時刊載。此舉旨在方便讀者訂閱，並擴大本報之發行範圍。

（十五）本報為提高新聞品質，特聘請資深記者，負責採訪與報導。凡有關於社會重大事件之報導，請逕向該部提供線索。本報將竭誠為您服務，確保報導之準確與公正。

（十六）本報為便利讀者，特在報館內，增設「讀者信箱」。凡有關於本報之建議、批評或查詢，均可向該信箱投書。本報將對所有來信，予以認真處理，並及時回覆。

（十七）本報為擴大宣傳，特在各地設立分銷處。凡欲訂閱本報者，請逕向最近之分銷處接洽。分銷處之地址，將於本報廣告欄內，隨時刊載。此舉旨在方便讀者訂閱，並擴大本報之發行範圍。

（十八）本報為提高新聞品質，特聘請資深記者，負責採訪與報導。凡有關於社會重大事件之報導，請逕向該部提供線索。本報將竭誠為您服務，確保報導之準確與公正。

（十九）本報為便利讀者，特在報館內，增設「讀者信箱」。凡有關於本報之建議、批評或查詢，均可向該信箱投書。本報將對所有來信，予以認真處理，並及時回覆。

（二十）本報為擴大宣傳，特在各地設立分銷處。凡欲訂閱本報者，請逕向最近之分銷處接洽。分銷處之地址，將於本報廣告欄內，隨時刊載。此舉旨在方便讀者訂閱，並擴大本報之發行範圍。



Painter - Kano Macanoke.

Owner - Vincent Williams.

Ft. Lyo.

Blank Page Digitally Inserted

第七十四 虎溪三笑圖雙幅 狩野正信筆

紙本著色

各竪三尺九寸、横一尺八寸

東京 子爵秋元興朝君藏

(第三百一頁參看)



（一）

東京十種學元覽

卷二 八十八

海峽

續百廿十四 出語三笑圖變編 終裡五言



Parmer Kamp, Massachusetta.

Dinner - Shingon-ura,
Kyoto.

Blank Page Digitally Inserted

第七十五 竹鶴圖屏風 傳狩野正信筆

紙本水墨

竪五尺一寸五分 横一丈一尺七寸五分

(第三百一頁參看)

京都 眞珠庵藏



三十一

卷一

正只一七正發一五一只正發

正發

卷一 正發 一五一 只正發



Parrotta Nagayoshi.

Answer - Count Date,

Today.

Blank Page Digitally Inserted

第百七十六 觀瀑圖 長吉筆

紙本水墨

竪四尺一寸一分、横一尺八寸一分

東京 伯爵伊達宗基君藏

(第三百一頁參看)



(卷三十一頁終)

東亞圖書公司發行

總圖式一十一卷附一八八十一卷

總本水圖

卷百二十六 購藝圖 貝吉彙



Parvula - Motonobu

Chrysomelid - Reissneria

Kyoto

Blank Page Digitally Inserted

第百七十七 琴棋書畫山水圖 狩野元信筆

八幅對中の一 幅

紙本淡彩

竪五尺八寸七分横三尺

(第百三十三頁參看)

京都 靈雲院藏

（第三頁）

草部 第三列

正八十八

本新

八部中の一

百十

部書山水圖

後世言



Painter Motomasa

Owner—Raimon iie.
Kyoto

Blank Page Digitally Inserted

第百七十八 月夜山水圖 狩野元信筆

八幅對中の一軸

紙本水墨

竪五尺八寸七分横三尺

(第三百三頁參看)

京都 靈雲院藏

一、

經註凡八十八卷

附本

八

百十八

日

經



Parviter-Motomaru

Answer - To Haru An
Kyoto.

Blank Page Digitally Inserted

第百七十九 瀟湘八景圖 狩野元信筆

四幅對中の二幅

紙本水墨

各竪四尺三寸、横一尺七寸三分

(第百三十三頁參看)

京都 東海庵藏

（三）三三三三三三

京師軍械局

谷田四八三三三三三三三三

辦本水渠

國辦性中二二

穀百廿十次

蘇州八景圖

蘇州元會集





Painter - Motomura

Owner - T. A. Kishimoto.
Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

第一百八十 豐干寒山拾得圖雙幅 狩野元信筆

紙本墨畫

各堅二尺六寸六分橫二尺三寸二分

(第三百三頁參)

東京 赤星鐵馬君藏



（第三卷之三）

東京 東京圖書院

卷二 八十六 八十七 八十八 八十九

日本圖書

卷百八十 豐干寒山詩發圖雙面 發理元言





Painter - Motomaru.

Amour Viscount Amimoto.

To Kyo

Blank Page Digitally Inserted

第百八十一 群雁圖屏風一雙 狩野元信筆

紙本墨畫

各竪五尺六寸、横一丈一尺七寸六分

東京 子爵秋元興朝君藏

(第三百三頁參看)



卷一百八十一

蘇軾于曹州定陶縣作廟

蘇軾于曹州定陶縣作廟

蘇軾于曹州定陶縣作廟

蘇軾于曹州定陶縣作廟





Painter - Kano Kōnōnatsu.

Printer - Tawara in
Kyoto.

Blank Page Digitally Inserted

第百八十二 耕作圖 狩野之信筆

八幅對中の三幅

紙本淡彩

竪五尺八寸六分横三枚續一丈五寸

本書は元々大仙院客殿の襖なれども今は保存の爲め
掛幅に改裝せり

(第三百四頁參看)

京都 大仙院藏

(卷三百四頁參考)

京師大曲調集

樂曲の起源等

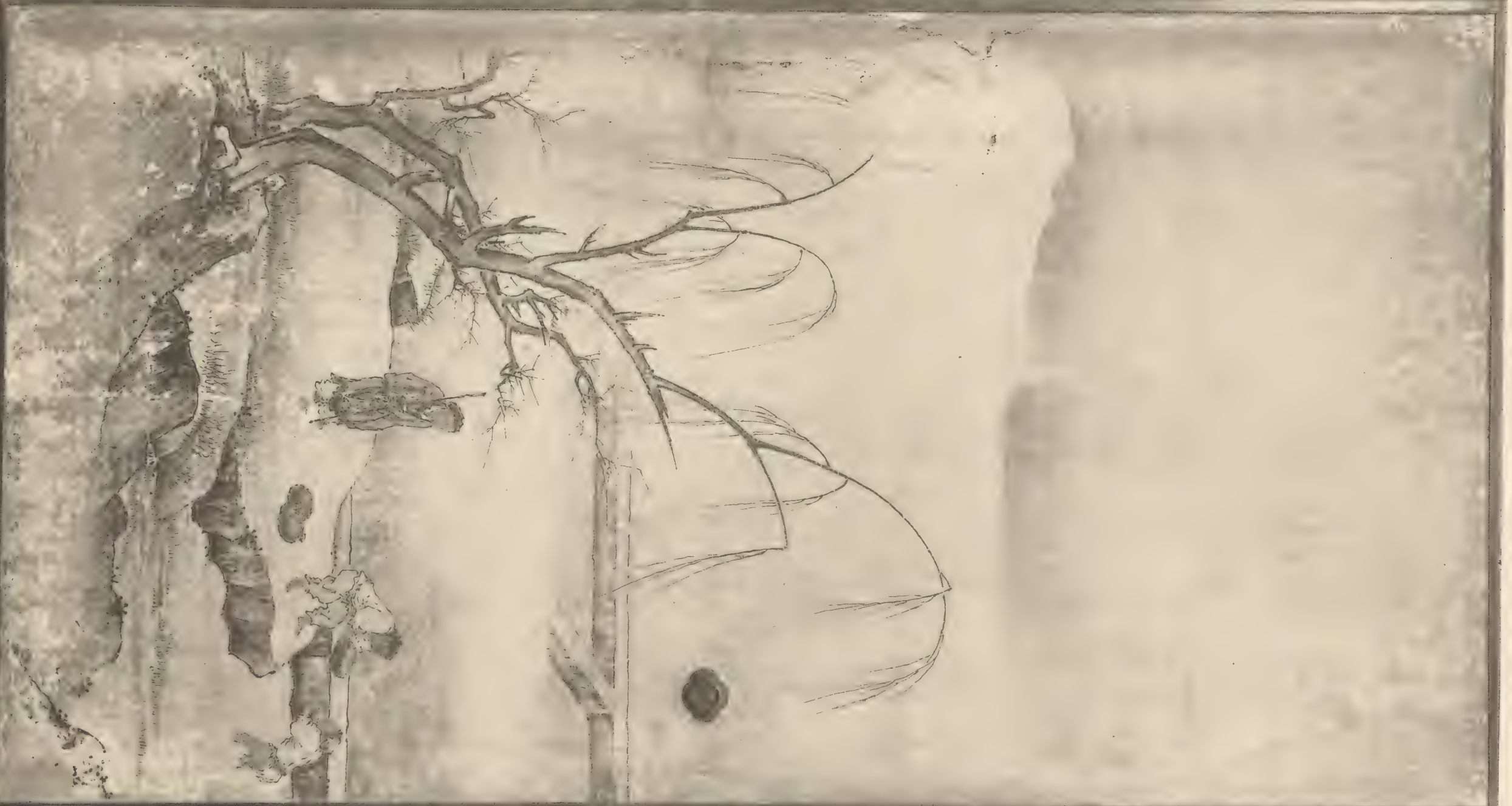
本書は元々大曲調集の應に作られたもので、今大曲調集の編

纂は凡八十六卷、三冊、一冊正

本、三冊

八冊、中三冊

卷百八十二 樂曲圖 卷裡の言



Painter - Kame Kamekake

Owner - Count M. Satō

Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百八十三 布袋圖 狩野之信筆

紙本淡彩

竪四尺一寸六分、横二尺三分

東京 伯爵伊達宗基君藏

(第百四頁參看)

三 新 正 月 月 曆 圖 冊

廣東 附 錄 電 報 局 函 件

第四 及 一 部 式 樣 圖 冊

附 本 冊 後

第 百 八 十 三 亦 錄 圖 樣 之 附 本



Paniter - Kano Soko,

James - Cement & Gasworks,
Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百八十四 竹林七賢圖 狩野松榮筆

紙本淡彩

竪二尺一寸四分、横三尺五分

東京 伯爵小笠原長幹君藏

(第百六十六頁參看)





Painter - More subtle,
or so you.

Owner - Baron K. Inasaka.

Blank Page Digitally Inserted

第百八十五 李白觀瀑圖 宗祐筆

紙本淡彩

豎三尺二分、橫一尺四寸四分

(第三百七頁參看)

東京 男爵岩崎小彌太君藏



(全三冊分五卷)

東京 復興書局 小淵太吾藏

第三卷 附一 附二 附三

附本

卷百八十五 李白詩集圖 宗海藏



第六編 豊臣時代 天正元年より
慶長七年まで

時代の區畫
英雄の氣風

豊臣秀吉天正十三年關白となり、慶長三年薨す不世出の英資を以て織田信長の後を受け、應仁以來の戰亂を掃撥して、豪華を一代に極むるや、聚樂、天正十一年成大阪、天正十三年成桃山文祿三年成の城、第、書院、造、建築の形制を一變して、飾るに金壁、金障を以てし、北野の大茶の湯、天正十年聚樂行幸の扈從、天正十年醍醐の花見、慶長三年壯奢一世の耳目を聳動し、加ふるに、朝鮮の征伐、南蠻の交通等、元氣雄圖の端睨すべからざるものありしかば、天正元年足利氏の滅亡より慶長八年江戸幕府の創立に至るまで、太閤が天下の政權を掌握せし間を中心として、前後僅に三十年を出でず、雖も、藝術は爲に大いに變化して、永徳、山樂、友松等の大手筆を出し、以てこの大英雄の氣風を具象體現せり。

繪畫の鑒賞
贈答

繪畫の鑒賞及贈答は前代と大差あらず。左に掲ぐる記事、以てその一斑を察すべし。

天正四年七月「朔日より重て安土御普請被仰付。何れも粉骨の働に依て、或は御服、或は金銀、唐物拜領、不知其數。今慶名物吊繪、惟任五郎左衛門、上意を以てめし置申され、大軸の繪、羽柴筑前被取求、而人名物所持被仕候事、御威光難有次第也」信長公記。

天正十三年十月朔日 「一、鐘の繪、二番、千宗易利休居士、三千石被下。二、雁の繪、四番、泉州堺津なやの宗久、三千石被下。三、月の繪（太閤記、北野大茶湯、秀吉公御道具之目錄）。

天正十八年正月十一日の條に曰く、自幽齋書狀到來、云、明日十二日詩歌會興行也、三幅繪直夫借用之、即使者勘三郎渡遣之、客來之間、不及返事（兼見卿記）。天正十六年「殿下も何かの事取ませ沙汰し給ふとて、申尅ばかりにまうのぼり給ぬ。献々の内に、御進物、一、御手本、一、御繪、三ぶく一つい。此外攝家をはじめ、諸門跡、清花、雲客にいたるまで、悉く御引物有。伏見殿、一條殿、二條殿、近衛殿、右府、菊亭、内府、尾州、前内府、徳太寺、此御衆へ、御繪二ふく、虎革一枚（天正十六年聚樂第行幸記）。

「御普請（宇治川）御見廻に太閤様御舟にて御出被遊、中畧大納言父子（家利、肥前守）を被召、中畧利家に雁の繪の名物有之候を可有御覽由にて、御取よせ、御覽の後、此繪は中直りに肥前へ遣し候へど上意にて、御自身に肥前殿へ御渡し被遊候（利家夜話）。

「一、松江錢永寫、舜舉が自筆にあり。深山じと頭毛が黄な物が櫻にどまりたる繪なり。堺の衆所持なり（等伯畫說）。

「一、八幡の玉瀾事、東山慈院殿取より給也。初は巻物にしてありたるを、是を御切被成て、軸物にあるなり（中畧）初は百貫の畫なれども、茶の湯盛になるに隨て千貫。後三千貫云々（同書）。

「二、馬麟がすゝめ子の繪とて堺にあり。元御物なり（同書）。

「二、趙昌が芙蓉水月（註畧）の繪の事、中畧（堺口）の松の良心と云者持たりより筑紫へ五千貫にて買て行と云々。今も筑紫にあるか（同書）。

この餘當時に於ける古畫評賞のさまは、等伯畫說に依りて頗るこれを詳にすることを得べし、蓋し我が論畫書の嚆矢ならむ。

屏風

屏風は前代既に金屏風ありきと雖も、その製作は本時代に至りて殊に多かりきと覺ゆ。太閤が桃山に百雙の屏風を造りしことは、著明の

傳説にしてその今に存するもの少からず。何れも金碧燦爛として規模雄大なる裝飾畫なり。徳川時代元祿頃の華麗なる裝飾様式は、早く本時代にその端を啓けるを認む。屏風に關する事の古記に見えたる數例を舉ぐれば左の如し。

天正十二年十一月二日 「自幽齋書狀到來、云、今度禁裏江御屏風進上之出來也、可一覽、歟之山云、即可罷出之山返事了」後刻出京幽齋旅宿へ罷向、紹巴所へ行也、即紹巴所へ罷向、進上之御屏風立置之、一雙、片方富士山、雲、アイ、片方橋立也、此繪之事、内々伺申之調之云々、無比類事也、今日以藤中納言進上之云々〔兼見卿記〕。

同年同月四日 「今度御屏風之義付、御製二首富士橋立、御短冊被下之云々、忝次第也〔同書〕。

同年同月六日 「有和歌御會、玄旨法印進富士橋立等繪屏風、故云組題三十首〔續史愚抄、雅庸卿記、玄旨集を引く〕。

同十四年十二月廿九日 「色紙ノ屏風一雙賣了、代四石、金藏院ヨリ請取了〔多聞院日記〕。

同十五年二月廿四日 「屏風扇流一、唐子一、一雙ヲ四貫七百文ニウル、米古十合四石八斗ニ當ル〔同書〕。

同十八年五月七日 「今日下地之繪師所へ持遣之、使者六、徳大寺殿御後室へ繪之フスマ障子二枚上張出來」。

畫扇繪卷物

畫扇は盛に弄ばれき、その狀況は後出狩野宗政の傳等に見るべし。繪卷物の製作は行はれざりしと見え、多聞院日記に左の記事等を見るのみ。

繪馬

文祿二年二月廿九日 「木津ノ橋寺ノ繪三卷、中御門ノ家ニ在之、發心院預置也、借寄、一返見之、首尾モナク、ムサ／＼トシタル事也。寺社に繪馬を奉納することは前代の末より行はれけむ。春日神社の一占繪馬の裏書に、「寄進筆者介、天文廿二年六月日」とある由は名畫傳に見えたり。尙後の長谷川派の章參看すべし多聞院日記に左の記事あり。

天正二十年正月三日 「伊勢ノ繪馬ニハタカ馬ニ如意寶珠、稻ヲ茹干ニヒロケテアリ、滿作ニ弓矢無之、萬如意ノ瑞也、珍重々々」。

宗教畫

宗教畫は、應仁以後固より言ふに足らずと雖も、本時代にも、その事の古記に見えたるもの少からず。雞肋亦以て繪畫史の一端を補ふに足れり。仍りて左にこれを掲ぐ。

天正三年十一月 「以宸筆、被加新圖太元本尊銘上書等、是權僧正堯助申請故云〔讀史愚抄、實枝卿消息及理性院記を引く〕。

同四年三月廿一日 「爲十三佛圖繪表補供養於持寶院〔多聞院日記〕。

同九年五月一日 「表補代一石、先日ノ夕ヒユカケノ繪代三斗、赤童子ノハコヌリチン一斗、合一石四斗請取〔同書〕。

同年十二月五日 「發心院ノ毗沙門、七斗ニテ表補誂了〔同書〕。

同十三年七月廿八日 「繪一斗二升代二百文遣、御身金也〔同書〕。

同年十二月廿二日 「爲追善、十三佛圖繪表補調、一石入日ヒタ三貫文表具テマ〔同書〕。

同十九年五月廿五日 「早曉於床上掛菅相畫像、各々敬拜〔鹿苑日錄〕。

文祿四年三月二日「百座十万返天女勲行、結願了、從仙學房、伽利帝ノ繪代口上候、惡間返了」(多聞院日記)。

慶長十年正月五日「秀賴公爲祈禱大般若經轉讀(中畧)本尊般若并十六善神、四天像圖一鋪奉懸之(義演准后日記)。

肖像

肖像畫も前代の餘風を傳へて製作又は鑒賞せられき。左に掲ぐる二三の記事、以てその狀況を察するに足る。

「天正十八年春ノ頃、北條氏政子息氏直謀叛ノ由聞エシカハ、秀吉公征伐ノ爲、御勢引率シテ御下向ノ事アリケリ。氏卿此度東國ヘ下テ一廉勳カスンハアルヘカラス、然レハ討死センコト治定ナリ、ソノ忘形見ニモ成ヘシトテ、畫師ヲ召寄、我姿ヲ繪ニ寫セト申サレケレハ、畫師承テ、則其座ニ居給フ姿ヲ生ウツシニコソ書タリケレ。白綾ノ小袖ニ、左ノ手ニハ扇、右ノ手ニハ楊枝ヲ被持タル體ナリケリ〔氏卿記〕。

〔關渡にせきのこ着て、阿彌陀寺に參り侍るに、其かたはらに寺有、中畧〕寺僧に案内して、安徳天皇御影、其外平家一門之像共見侍ける〔太閤記幽齋道之記〕。

文祿三年八月廿六日 〔於龍吟、自然居士像影一覽〕鹿苑日錄。

文祿三年八月廿六日「於龍吟、自然居士像影一覽〔鹿苑日錄〕」。

繪畫の装演

繪畫の裝潢は、前代に於いて、支那より輸入し、又は能阿彌、相阿彌等の意匠に成りし挂幅おのづからその本を爲り、本時代に至り、茶道の大流行に従ひて、漸く一定の形式し、裱補〔又表補〕文字を兩脇へ細く廻し云々〔和漢裝潢志〕、幪補〔又幪背〕文字をまはさすして、如常中を廻し云々〔同書〕、輪補〔兩脇のせまきをいふ〕茶道筆跡等の差別及一文字、中、天地等の名も出て來、法式の傳授等も起りしならむ。次の時代に記されたる茶道表具書、和漢裝潢志等に見ゆるもの即ちこれなり。神谷宗湛筆記に出でたる左の二三の記事、以て本時代に於ける裝潢の事を考ふるに足る。

天正十四年十一月廿四日「表補繪上下茶ス、ケ色ホツケン、中淺ギホツケン、一文字、風帶、金地金襴蒔黃地寶盡牡丹唐草、いち軸くわりん、同紙内堅一尺程、横二尺三寸程有」。

同年十二月六日「秋月一軸(中畧)一文、風帶、丹色金襴也、紋は角龍マス掛ともて、露丹色、丹き内黄有切、軸象牙、堅一尺一寸五分、横二尺九寸、又上の高さ一尺四寸五分程、下七寸五分、中之上六寸程、中の下二寸程、中の脇二寸程、一文じ上一寸五分、下八分程、風帶一寸程、軸先八分程、是凡見合なり。折釘三ツ、たくぼく二ツに掛」。

同年同月廿六日「花畫は上下淺黃の金襴、紋鐵心口也、中白地金襴太紅牡丹唐草、一文字、風袋、紺の金襴小紋也、露赤し、紙内竪一尺七寸五分、幅一尺三寸、肩面の内絹也、象牙切軸六七分、紙内々ミユ、上一尺七寸、下八寸、中上七寸五分、下三寸五分、左右二寸七分ヅ、一文字上一寸六分、下九分」。

茶道と墨畫

茶道は前代に始まり、雖も、その式法の大成せしは千宗易利休天正十九年歿の頃にして、盛に士庶の間に行はるゝに至りしは、實に本時代の事に係れり。されば本時代繪畫の特色は、金碧の濃彩燦爛たるものに在るに拘らず、前代以來流行し來りて、その趣味能く茶道と合ふ所の墨畫も、亦依然として他の一面に存じき。左に章を分ちて諸派の畫傳を別敘すべし。

諸派の分敍

第一章 狩野派

本時代の狩野家にはまづ永徳あり。永徳初名源四郎。古書備考に「狩野源四郎十六歳書之印は「元信壺形」の落款あり或は右京と稱すと云へど、信じ難きもの如し」諱を重信或は州信と作ると云ふ。天文十二年正月十三日

山城に生る。松榮直信の長子なり。幼にして書を祖父元信に學び、その技父に超えたり。天正四年織田信長の命を奉じて、安土城の障壁に畫く。總見記及信長公記等に左の記事あり。

「天正四年七月朔日より、重て安土御普請の義被仰付、御天守七重、御座敷種々の繪、狩野永徳畫之（總見記）。

同年同月「御座敷之内、悉市を著、黒漆也、西十二疊敷、墨繪に梅の御繪を狩野永徳に被仰付、かゝせられ候、何れも下より上迄、御座敷之内、御繪所悉金也、同間之内、御書院有、是には遠寺晚鐘之景氣かゝせられ候、其前にぼんさんをかゝせられ、次四でう敷御棚に鳩の御繪をかゝせられ候、又十二疊敷、鷺をかゝせられ、則鷺之間と申也、又其次八疊敷、奥四でう敷に雉之子を愛する所あり、南又十二疊布、唐之儒者達をかゝせられ、又八疊敷有、東十二疊敷、次三でう布、其次八でう敷、御膳拵申所也、又其次八疊敷、是又御膳拵申所也、六でう敷御南戸、又六疊敷、何れも御繪所金也、中畧三重め十三疊敷、花鳥の御繪有、則花鳥の間と申也、別に一段四でう敷御座の間有、同花鳥の御繪有、次南八疊敷賢人の間に、ひようたんより駒の出たる所有、東麝香の間、八疊敷、十二でう敷、御門之上、次八でう敷、呂洞賓と申仙人并ふるつの圖有、北廿疊敷、駒の牧の御繪有、次十二でう敷、西王母の御繪有、中畧四重め西十二間に、岩に色々木を被遊、則岩の間と申也、次西八疊敷に龍虎之戰有、南十二間、竹色々かゝせられ、竹の間と申、次十二間に松計を色々被遊、則松の間と申、東八疊敷、桐に鳳凰かゝせらる、次八疊敷、きよう耳をあらへば、そうほ牛を牽而歸所、兩人の出たる故郷體、中畧五重め御繪はなし、六重め、中畧釋門十大御弟子等、尺尊成道御說法之次第、御縁輪には、餓鬼共、鬼共かゝせられ、御縁輪のはた板には、しやちほこ、ひれうをかゝせられ、高欄ぎほうし、ほり物有、上七重め、中畧四方の内柱には、上龍、下龍、天井には天人御影向之所、御座敷の内には、三皇、五帝、孔門十哲、南山四皓、七賢等をかゝせられ、ひうちやく敷十二つかせられ、狹間戸鐵也云々（信長公記、安土山御天主之次第）。

同六年正月朔日「於安土、諸侯の面々、三献御土器被下、其後御殿之内、御座所、各見物被仰付、其座席、三國の名所の景、狩野永徳法印濃繪也、色々天下無雙の壯觀也（總見記）。

「隣國之大名、小名、御連枝之御衆、各在安土候て、御出仕有、百々之橋より惣見寺へ被成、中畧御座敷總金、間毎に狩野永徳被仰付、色々様々あらゆる所之寫繪、筆に盡させられ、其上、四方之景氣、山海、田園、郷里、言語道斷、面白地景中に計なし（信長公記）。

「信長公築安土塞城、令狩野一家圖繪之、其至于書院、中鑑監三上山故事、令造此畫圖者、命州信、一之間者、摸寫彼山、畫終日詠覽眞山、夜者戸障子畫圖有之、半開詠、則眞山尼崎、障子之繪書繼之、公深感之、擢法印、號永徳（古畫備考、若木集を引く）。

「天正四年正月、安土城を築給ふ時、畫之間、依命畫之、御感悅不斜、直に敘法印、知行三百石賜之（古畫備考系圖）。

永徳が安土の畫功に由りて法印に敘せられきこは、右の抄録にも見えたと、畫史には、嘗賜法眼位、然辭之とあり。これより信長に仕ふ。信長公記天正九年九月八日の條に、御小袖皆々に被下、人數之事、狩野永徳、息右京助など見えたり。後豐臣秀吉に仕ふ。系圖に曰く、信長薨後仕秀吉公、時陪侍于軍陣、賜陣刀具足、子孫寶之。畫史に曰く、秀吉公築聚樂、大阪二城、建大殿、使永徳畫其金壁、古畫備考の系圖に曰く、太閤より知行三百石、山城國大原郡之内にて拜領。町間「上記信長が永徳を法印に敘し、知行を賜ひしこの事は、太閤の誤傳には非じか。古畫備考昌

運筆記に、「永徳系圖に賜日本繪所職、贈位法印、署中永徳者太閤家之畫師、天下之賞美者也、秀吉公感其妙手、補繪所、然憐其早世、奏贈法印」こあり。繪所に補せられしこの事も果して如何にや。當時永徳が繪事の盛にして、金殿の壁障に多く大畫を作りしさまは、これを察するに難からず。兼見卿記天正十四年二月二日の條に曰く、「民部法印見舞罷向、院御所へ被罷出、署中御殿之内、繪狩野入道永徳書之。畫史に曰く、「當時諸侯大夫第、亦營大厦、設金壁、則必求其畫、然永徳細筆無暇、故專爲大畫、或松梅長一二十丈、或人物高三四尺、其筆法皆粗而草、然與元信永徳無論其優劣者、墨畫用藁筆、大抵有祖風、頗出新意、恠々奇々、自得前輩不傳之妙、獨步一時、骨氣正而奇、凡得手於大畫者、五百年來未曾有者也。古畫備考に見えたる永徳の壁障畫左の如し。

「醍醐寺三寶院殿中之彩色書、狩野永徳之所書也。」

「大光山本國寺、中畧此所瑞龍院殿建立にして、障子等の畫圖、永徳の筆也、此亭始江州安土城にあるを大和中納言秀俊卿の館に移せり、然して秀俊卿の歿後、當寺に移す。山州名跡志廿二。」

「御室御所大御間附。中畧水鳥之間、永徳筆、琵琶行之間、同筆、唐松之間、同筆、花鳥之間、永徳筆。」

「泉涌寺。中畧一、諸司代之間、紅葉、菊、永徳。」

「南禪寺。一、方丈口之間、牡丹、麝香、岩に鶴、永徳。一、佛壇之間、廿四孝、永徳。一、上之間、蘆鷺、松梅、永徳。」

「永觀堂。一、方丈口之間、松、櫻花鳥、永徳。」

「鹿ヶ谷。一、客殿上段、桐、牡丹、竹、永徳。」

「大徳寺塔頭天瑞寺、一、間之繪一式、永徳。東之間墨畫三笑圖、北之間同富士山、中之間彩色竹、室中同松、西之間同櫻、同菊。」

かくて永徳は天正十八年九月十四日、父に先だちて四十八歳にして歿す。妙覺寺に葬り、法名を實相院日竟法印永徳重信大居士と云ふ。畫史

及古畫備考系圖に依る

第百八十六 狩野永徳筆琴棋書畫圖障子畫其一、其二、

第百八十七 同筆梅花禽鳥圖障子圖

本朝畫史永徳の畫を評して曰く「山水、人物、花鳥、皆爲細畫、間有大畫、望之則似舞鶴奔蛇之勢、其人物、岩木、花草有過祖先也」謂はゆる細畫の存するもの稀にして、多く大畫を傳ふ。蓋しその製作、殿舎の壁障を主とせしが爲なるべし。畫風の特色は、その筆致剛勁にして、斧劈の皴法壯烈を極めたるに在り。大徳寺聚光院の障子畫の如きは、遺作中の最も著れたるものにして、琴棋書畫圖（八幀、淡彩、こゝにその四を掲ぐ）、松鶴圖及梅花禽鳥圖各六幀、水墨、こゝに梅禽圖の三幀を掲ぐ）あり。以てその稍粗獷なる勁拔の技風を觀るべし。この種の淡泊なる製作の外、永徳が當時城第の壁障、屏風等に畫きし

ものは、金碧燦爛たる大著色のもの多かりしならむ。これ蓋し織田、豊臣等の如き戦國の英雄が豪華を好みし氣象の影響にして、永徳まづ能くこれを發揮せしなり。故を以て、圓渾和熟の妙味はその作に求むべからずと雖も、壯拔の趣致は、狩野家歴代の中、恐らくは永徳に及ぶものなからむ。數丈の障屏に一樹の松梅を畫き、雄大絢爛にして而も裝飾的の美を肆にせしは、實に本時代繪畫の特長にして、永徳をその代表者と視るに堪へたり。ただその筆墨に殺伐の氣を帯びたるは、おのづからこれ戦國世運の致す所、復止むことを得ずと謂ふべし。

宗秀

永徳の弟に宗秀季信、

松榮の次子、秀一に周季一に秀一作る

源七郎、

或は源三郎に作る松榮三男

休伯長信、

松榮四男、伯一に白に作る

あり。

又宗巴種信なれど醫を業とせりと云ふ、古畫備考系圖に「屋代説祖西秀家」とあり、又松榮の一女あり

宗秀は畫史に「松榮仲子

也、筆法專學家兄永徳能守規矩、然不及父兄、敍法眼位、古畫備考に曰く、「一本甚六入道法眼、中橋記、五十一歳ニテ病死、辨玉集ニ六十一而卒、同書宗秀の遺言狀及光信の副書あり、左にこれを掲ぐ、その歿年は蓋し慶長六年ならむ。

一筆申置候事

一。今度我等煩、ほんぶく成がたく存候ゆへ、あとくの儀、能様奉願候事。

一。永徳法印あづちへ御越候時、宗徳を以、我等に家屋敷御あづけ候。左様に候へば、甚吉儀は、年もまいらぬものゝ事に御座候へば、萬事能様に御引まわし候て可被下候。若甚吉ふりよの儀も御座候はゞ、あとしきの儀は、貴殿よきやうに被仰付可被下候。女之子供には御かまはせ被成間敷候。かまはせられ候へば、他門に成申候間、左様に御心得候て可被下候。古法眼御あこたへ申候へばいかゞと存候ゆへ、一筆如此候。

一。我等女房の儀は、むすめどもに申置候。彌甚吉儀被懸御目可被下候。委義は、口上に宗徳内儀に申遣候。永々能様に被成可被下候。以上。

慶長六年十一月吉日

狩野宗秀(印、壺形、文「眞説」)

法眼(花押)

狩野右京様

まいる

去年宗秀法眼より我等方へ書物御越候。古法眼の御跡と候へば、代々其方之さばきに候故、則此書物貴殿へ參候。甚吉殿一段と才堪に御座候。貴殿肝煎可被遣候。我等事は、伏見、大坂に而之御用相調候へば、京都に居申候事も稀に候間、可然様に、貴殿被入情甚吉殿江萬事町儀茂相談にて、

能様に可被仕候。爲後々之一筆如此候。以上。

四月十六日

狩右京(花押)

狩野小左衛門殿

まいる

源七郎

書中用ゐる所の印文に「眞説」とあれば、宗秀眞説と號せしにて、その子甚吉の眞説は父の號を襲ひしものか。甚吉の事は同書増補に「黒田家所藏扇面畫帖、壺印ニテ印文元久トアルモノ、其箱書ニ宗周法眼トアリ、可考」と曰へり。源七郎は畫史に「松榮之三男也、能畫學永徳得其畫法、而有新奇、先松榮、永徳夭卒」と曰ひ、古畫備考には「於南都而卒、一本於山城卒、中木挽町源三郎ト宗也ヲ一人トス」と記し、文字不明の長方印文朱及

「壽信」を讀まるゝ壺形印を載せたり。休伯長信は次編に出づ
玉樂の末流を見るべき者、左の數人あり。

都部樂某、書工便覽に曰く、都部樂氏不知其名、野州宇都宮住、玉樂學、臻丹青、有士氣、無活動。

三休、同書に曰く、岩木常隆、岩城左京大夫、畫師、學玉樂風格、畫花鳥、山水、人物、佳作也、畫樣甚似古法、眼元信。

間宮宗三、同書に曰く、宗三、馬見谷氏、本氏、佐々木氏、輩名、盛氏、畫師、玉樂風格、而畫花鳥、山水、拾彙間宮に作れり。

政勝、古畫備考に「畫山茶小禽圖、著色有玉樂畫風」と記し、政勝の壺形印を載せたり。

幸祐、同書に「著色花鳥雙幅、紙本、堅物、永真、極爲玉樂所畫（中畧）不及玉樂」と記し、團扇形朱文の「幸祐」の印を載せたり。先に正信の條に引ける本化別頭

佛祖統記の幸祐即ちこれか。

松榮の門人には、長谷川等伯の外、著れたる者なし、等伯は長谷川派の祖として後に別敘す。その餘、略左に列記するが如し。

狩野宗泉、古畫備考に「松榮門人、奈須氏、昌運、筆記、松白子也、或作宗仙、異政信、叙法橋」と記し、文字不明の瓢形及「政信」の方形朱文印を載せたり。

狩野松伯、同書に曰く、或松白、若木集ニ「宗泉父トス、名直義、始稱與市、行年六十八歲死、松榮歿後、休伯ヲ慕、江戸へ來ル、故弟子中一所也、卒於越前」と曰く、「永德養子」。

く「永德養子」。

狩野宗心、同書に曰く、一本、永德、重信門人、内匠助種永、一作宗進、始甚十郎、由緒書、元祖龜屋忍弟、狩野内匠助、權現樣江御目見任、御畫御用相勸申候、慶

長十五戌年十月六日、頂戴之口宣、藤原種永任内匠助ト御座候、駿府御城江御供仕、御畫御用相勸申候、一本、慶長十三年申正月御目見、同十五戌年十

月六日改内匠助、元和六年正月廿一日死、年五十三。

狩野祖酉、同書に曰く、松榮養子、又門人、又永德門人、狩野祖曾秀家、改秀信、或作祖酉、一書云、始新右衛門、卒年六十一、實大坂城士工藤伊賀守次男、元和

三丁巳年十二月十日卒、年六十二。

狩野榮順、同書に曰く、松榮門人、狩野榮順親信、始主水、牧野氏藏書云、祖酉門人、沼津乘昌子、主水親信トアリ。

狩野一翁、同書、狩野一菴（北條氏政の畫師、知行千石を賜はり、天正十八年六月廿三日、武州八王子にて戰死せし事、畫事備考に出づ、狩野勝英祐信家

系には、北條氏照の臣と言へり、太閤記、北條五代記にも見えたり、名畫傳これを松榮の門人と爲せり）の子、松榮門人とし、記して曰く、狩野一翁、重信、

始内膳、或重郷、始久藏、天正中流、落子大阪、以畫謁豐太閤、相傳、以能畫、依台命、授狩野氏、其畫在天王寺、東福寺、禪院等、その子内膳重良の記せる文、備考、

若木集にありと言へり）に曰く、吾家爲畫工、非素志也、昔日攝州大守荒木村重祖考、世々爲武門棟梁矣、予先祖曾進仕彼家累代也、然村重爲信長公所

亡、而後予祖父重光如游魚離水、飛鳥无翅、流浪已年久矣、使予父少字久藏、九歲比於根來密嚴院、習字畫、久藏只管爲圖畫、不書文字、祖父甚制之、竟不止、

而摸寫日隆也、一日以覺鑲像摸之、其形似筆力超過於粉本甚矣、祖父不得已而令狩野嫡流民部卿法眼號松榮、成師弟之約、而畫焉、法眼甚奇之、卒許狩

野氏爲一家氏族、于時十有八歲、號内膳重郷、其比小出氏從五位下播磨守源吉次營新舍、令圖畫重郷、于時作嬰兒遊戲圖、席畫成後、渡關白秀吉公彼亭、

監臨畫圖、御感不淺、被召出而任畫工、尊惠異他、號當時大名高家、賞彼圖書甚深矣、嗚呼哀哉乎、元和二年夏四月三日、四旬有七、於洛下死、法名號「翁齋」。

宗治 名公畫譜に曰く「松榮弟子」。

了知 同書に曰く「松榮之弟子」。

善了 同書に曰く「松榮弟子」。

良益 書畫便覽に曰く「松榮門人、實名を以て畫名とす」。

隆泉 土佐狩野兩家系圖に曰く「松榮直信門人、宗泉政信弟隆泉。奈須氏、始理兵衛」。

山樂

永德の門下にては狩野山樂、海北友松の二人最も秀でたり。友松は海北派の祖として後に別敍す。本朝畫史の著者永納は山樂の孫なるを以て、同書山樂を敍すること頗る詳なり。曰く「狩野山樂、近江國蒲生郡人也、本氏木村、名光賴、小名平三、木村永光（前に出づ）の子也、永光初事淺井氏、既而謁豐臣秀吉、公于時稱羽柴筑州大守、事之爲近侍、公營城廓、屢監臨焉、光賴幼年、持公之杖、從其後、而以其杖、沙上畫馬、不顧傍觀、公見奇之、曰、汝好丹青乎、乃附當時畫工長狩野永德學習、而後因台命、約父子之義、授狩野氏、稱修理亮、用筆法專得其正傳、然猶接士林之列、而勤其役者居多、公修營東福寺法堂、天井有僧明兆畫龍、嘗逢雷火而損、公使永德補之、畫雲未畫龍、而永德罹病危急、乃授其草本於光賴、以補成之、明兆所畫、其紙壞矣、光賴欲畫之、去其紙、施粉於板上、龍頭二丈餘、身長十八丈、數日而終其功、時光賴三十餘歲、自是禪林法堂天井板、必畫蟠龍焉、公嘗興復天王寺、令光賴初畫聖德太子緣起於堂壁、及秀吉公薨、猶在浪速、浪速陷後、寄身於男山瀧本坊、由是蒙恩赦、拜東照大神君於駿府、而歸休洛陽、剃髮改號山樂、元和年中天王寺罹災、及其重興、山樂復蒙鈞命圖之、其餘洛中畿内金殿玉樓、多遺墨痕、其所畫之龍虎鷹馬、頗有青藍之作、人物花禽、崑木、亦追永德大畫之風、晚年深慕宋元、平生好畫鍾馗、病者求之、果有靈驗、又聞古老所語、（佐々木初圖、大追物式、又見張氏帝鑑圖說、始摸寫之、或畫騎法七段、皆流播於世、寬永乙亥秋八月丁酉、以病終、歲七十七）山樂の子に光教（古畫備考に「修理」の朱文方印あり）あれど早世せり。古畫備考にその遺作墨馬（ツナヤ、慶長十三年六月）、三十六歌仙（撒津志）、同所秋野坊書院襖繪、邯鄲盧生、誓願寺中福正院東福門院御寄附三十六歌仙屏風、一雙（展圖及その落款、修理、長方「光賴」形、朱文）の二印を載せ、更に左の壁障畫を錄せり。

大坂御城（中畧）元和六年二之丸、寬永元子年御本丸一、御玄關より遠侍之間、總體槇木雪獅子、一、殿上之間、小鳥紅梅柳、御上段御床總體、櫻之繪。一、鷺之間、次之

間、上之間、何れも松鷺之繪。

御室御所大御殿（中畧）藤之間。

二條御殿（中畧）一、海棠之間。一、雁之間。

東本願寺、一、新殿麝香之間。一、上段松花鳥。一、白書院、曲水、花軍、彩色、此中人形ノ手ニツ、不知所有之名畫也。一、牡丹之間。一、松之間、松原ノ畫。

鹿ヶ谷（中畧）一、次之間、クワイラウノ圖。

これ等の外、今に存する西本願寺書院の胡騎狩獵圖、妙心寺天球院障子の牽牛花圖、醍醐三寶院表書院の松竹圖等も、山樂の筆と傳稱す。左に掲ぐるはその遺作中印識ある尤品なり。

第百八十八 鷺鷹圖屏風一雙二圖及その一部分

第百八十九 鷹鶴及蒼鷹圖二幅二圖

山樂の壁障畫は、永徳と同じく、亦金碧陸離たる彩畫なりけむ。然れども現存遺品中最も優秀なる佳品は、却りてここに掲ぐる水墨乃至淡彩の作に在り。鷹鷺はその最も得意の畫題なりきとおぼしく、又その搏獸攫禽の圖少からざるは、世風の殺伐なるものありし影響とも視るべからむ。筆墨の粗獷壯拔なる風趣は、能く師家永徳に似たるものあること、猶鷺鷹圖に見るが如し。雖も、鷹鶴圖、蒼鷹圖等に至りては、永徳よりも較々溫籍の致を具へたり。山樂又好みて時様の風俗を畫き、その遺作も往々存す。蓋し浮世繪の濫觴なり。

爾餘の永徳門人

永徳の門下には尙左の諸家あり。

狩野一雲 丹青若木集に曰く「永徳門人、侍士、豐後人、初彌三郎。使覽に曰く「住肥前長崎中畧」甚書和繪、常繪草紙、有功」古畫備考に曰く「狩野一雲、系圖云、帝鑑圖說、伊勢物語、廿四孝圖、此人下繪云々」同書に鍾馗の縮圖「一雲」の朱文印を載せたり。

狩野休徳 狩野系圖に曰く「永徳弟子休徳、源助、古畫備考に曰く「狩野休徳、又庄兵衛」或は古右京の門人なりとも云ふ。

この餘にも、或は永徳の門人とも云ひ、或は光信の門人と稱せらるる者あれど、今姑く光信の下に掲ぐることにす。

爾餘の狩野家の畫

本時代の狩野家の人にして系譜及畫傳の諸書に逸したる者あり。左にこれを録す。

狩野宗玖 卿記に左の記事あり。

天正八年正月三日 「狩野宗玖方へ遣田口左介、扇十本片、金裏泥繪、誂之、來十日安土へ爲御禮下向之儀也」。

同年三月十八日 「狩野宗玖誂之扇出來、多武峯へ之用意也、宗玖爲錢十本持參」。

同十年三月一日 「狩野宗玖罷歸、每度繪之義申付也、予今著用道服遣之」。

同十二年正月十六日 「鈴鹿修理之御次、御板五明狩野宗玖申付之、二本之扇也」。

同十三年九月廿八日 「相州へ例年之御板五明五本、狩野宗玖」。

同十八年八月二日 「狩野宗玖方へ遣傳左衛門、短冊箱下繪之事申遣了、未出來候由罷歸云」。

同十九年正月四日 「狩野入道宗玖方へ扇之代悉相渡之、例年二十疋、同前遣之、田口左介持遣之訖」。

同年正月十五日 「前田筑前へ御板扇十本、ダイ繪、御影折、宗玖調之」。

同年同月廿四日 「扇屋宗玖方へ扇之代五十疋、以左介持遣之、悉相濟之、一粒も無懸錢」。

狩野友閑 兼見卿に左の記事あり。

天正八年正月三日 「來十日安土へ爲御禮下向之儀也、友閑へ十本同誂之。」

同年同月廿六日 「友閑登城、右府へ五明一本、片金、狩野友閑へアサキシ、ラ一面。」

宗玖、友閑の二人は、蓋し書扇を專業とせし者ならむ。兼見卿記の左の記事中に見えたるも、亦多くはこの二人の書扇なるべし。當時狩野の書扇流行のさまを考ふるにも宜きが故にこれを列記す。

天正三年三月四日 「信長へ罷出也、扇十本、狩野、金。」

同年同月七日 「塙九郎左衛門五明十本、狩野、墨繪、持參面會。」

同年同月廿九日 「佐久間左衛門尉爲禮罷向、松原十帖、扇五本、狩野、墨繪、於門外面會。」

同十年四月一日 「如々院へ御移入箱五明二本、狩野。」

同十二年正月廿三日 「江州日野中村與三郎(中畧)方へ五明二本、狩野、墨繪、遣之。」

同十三年正月廿五日 「中村方へ返事、五明二、狩野、墨繪、態誂、遣之。」

同年三月四日 「如々院使僧對面(中畧)進盃、次御板五明五本、狩野。」

同十五年正月十日 「明日之御禮、馬太刀持參之由、其沙汰也、俄ニ用意之、舊冬ヨリ令覺悟、狩野、扇十本、金、用意之。」

同年同月十一日 「明日大阪兩政所へ御板小扇二本、金、狩野。」

同年二月七日 「相國へ諸家御禮之由、自德大寺殿被知之間、早々罷出(中畧)御太刀、扇十本、金、狩野。」

同十九年正月九日 「北政所御板神供小扇二本、兩金、狩野、(中畧)ひかし殿御板、小扇一本、兩金、狩野、(中畧)カウ藏主御板御板小扇、一本、兩金、狩野、大阪殿御板小扇、二本、兩金、狩野、若公様御板小扇、一本、兩金、狩野、大政所御板御神供小扇、二本、兩金、狩野、各文にて申訖。」

狩野橘右衛門 兼見卿記に左の記事あり。

天正九年一月廿一日 「狩野橘右衛門、五明一、各遣之。」

同十年正月廿三日 「狩野橘右衛門筆二管遣之。」

第二章 海北派

友松

本時代の狩野家より出で、別に一派を爲し、者を海北友松とす。友松諱は紹益。紹一に照、初め松徳、本朝畫纂後友松と號す。如切齋、友景齋等名公の畫譜別號あり。近江蒲生郡の人なり。父を善右衛門綱親と云ふ。天正元年近江の小谷城に戰死す。友松はその第三子。古畫備考系圖なり。畫を永徳に學びて

成天皇太子たりし頃、屢々友松を召して畫法を學びたまふ。故を以て、友松の畫往々宸筆の賛あるものありと云ひ、系圖には「後陽成院様御

繪御用相勤と云へり。又系圖に「大猷院様御繪御用相勤」あり。永徳毎に友松をして己の製作を助けしむ。晩年に至りて頗る世に重ぜらる。玄菟仙巢稿（古畫備考に引けり）の題「李白觀瀑詩」の序に曰く、今茲辛亥（慶長十六年）之春、予過柳川前豐州刺史智永公華第、伸「新歲之賀」、公出迎一笑、予臨席四顧、則圍以屏障、指點其畫問公、是何人妙筆乎、公曰、今時以繪事鳴都下之友松老人所筆也。友松の畫く所の墨龍屏風、曾て朝鮮王に贈らる。（慶長二十二年朝鮮王の時から）王その畫の絶妙を賞し、再たびこれを求めしむ。その文に曰く。

昔承佳惠水墨屏以來、圍之坐隅、日夜撫翫、宛若相對、以爲平生不忘之資、尋常感々、至於見者拭目、聞者側耳、眞所謂東海眞龍出來伴我比歟、所寫友松何如人、今無恙否、欲得如此妙筆、未可圖送耶、人皆謂天下第一、故茲敢再求、伏惟希亮不宣、萬曆戊申（卅六年、慶長十三年）仲春下澣、朝鮮國僉知中樞府事朴大根拜（朱印）。

因みに言ふこの文書史の欄外に出づ。永伯附記して曰く「予近就友竹齋、現得韓客寄友松之文、喜寫斯編之上、正徳六丙申年五月五日藤原永伯」。

友松茶事を好み、古田織部に學びて、その門下四哲の一人に數へらる。元和元年六月二日、八十三歳にて歿し、京都岡崎眞如堂に葬らる。その子友雪、孫友竹等（後）に相嗣いで家風を守れり。これを海北派とす。（以上多く書畫便覽に依る）書畫便覽に友松の曾て朝鮮に渡りしこと見え、扶桑畫人傳もこれを取れりと雖も、想ふに、前記朝鮮書の事より出でし誤傳には非じか。又古畫備考に「近江國堅田ニ隱ル」とあれど、眞如堂に葬られしに考ふれば信じ難し。蓋し堅田郡の人なりと云ふ（說書畫便覽）同原の誤傳ならむ。友松の畫印には「海北」の長方白文、友松の方形朱文あり。左に遺作の尤品を掲ぐ。

第百九十 海北友松筆文王呂尙及商山四皓圖屏風 一雙其二

第百九十一 同筆牡丹圖屏風

畫史に曰く「師狩野永徳爲畫工、所畫人物、禽獸、艸花能似之矣、然輕而逸耳」されどここに掲ぐる諸作を観るに、常に筆墨賦彩の永徳よりは遙に精巧なるのみならずして、その曲調頗る異なり。山樂が略師風を紹述せしに似ずして、永徳門中、個人性の發揮最も顯著なるを認む。これ實に友松獨創の風格に係り、永徳の瑰偉を正にし、その生硬を熟せしめしものにして、海北一派の旗幟分明に別立する質ありと謂ふべし。絢爛なる金碧設色の技巧、流麗鮮美を極め、肥瘦曲折、圓轉自在の描法は、永徳の粗獷と同日の談に非ず。石皴に至りては、一種斬新明淨なる混筆の塗染を交へたる手法を用ゐたり。たゞその氣品の甚高からざるを惜む。妙心寺にはこの餘尙梅花圖屏風、寒拾三聖圖屏風一雙ありて、殆ど友松がこの種の畫風の面目を盡すに足り、建仁寺の龍圖及松下高士圖障子は、以てその墨畫の妙を観るに堪へたり。晩年の減筆は、畫史にこれを評して「其墨戲清潤、而不蹈古人軌轍」と曰へれど、友松の眞價値は、寧ろその壯齡の大作に在り。

第三章 雲谷及長谷川派

雲谷等顔

雪舟の末流は、本時代に至りて雲谷と長谷川との二派に分れたり。その祖を雲谷等顔と長谷川等伯とす。雲谷等顔は初め狩野松榮に學び、狩野系圖、辨玉集等後雪舟を慕ひて一家を成せり。法橋に敍せらる。雲谷家系圖古畫備考に曰く、等顔初永徳之弟子也。後立一家、號雪舟五代。在維不發名。是以

下中國終ニ防州太守之扶持人ト成。周防山口雲谷軒、有雪舟卷物繪本、其輿書ニ、欲學予筆墨者、以此卷爲正本云々。顏庶幾拜請之、遂達太守之處、在許諾、賜此卷、其後終上維、訟所司代、與等伯評論、伯以無證據之故負、被削代書、爾來顏號雪舟家、伯成長谷川家。謂はゆる雪舟卷物繪本の輿書は信じ難けれど、今毛利公爵家に傳はれる雪舟の山水長卷前出は、即ち等顔の撫倣せし臨本にして、その附卷に等顔の記文及北海筠溪の跋あり。曰く。

「此一軸、多年在予將藝州太守黃門輝元卿之寶庫、辱賜之、華衰之榮亦何如之。雪舟老人之畫系、雖的々相承、中路懈廢、而不絶如縷、今至末裔等顔某、再接其武、黃門感其來由、賜防之雪舟老人之舊居雲谷軒、拜以爲眠食之地、老人遺愛勝境、今猶存、老松怪石、奇花異草、綠水青山、不改舊容、園日涉而樂亦在其中、軸云、地云、重賞不可勝計、古人云、務本、々立而道生、先言以徵矣、時文祿二載初冬五日、現住雲谷等顔誌焉。」

「大凡以畫名世者、備之中州、雪舟老禪也、本周文而不爲者也、南遊日、掛錫於天童、首衆于第一座、參畫如參禪、工夫綿密、遂得夏珪筆法歸、自成一家、最長於水墨、々痕彌珍、天下得之者如至寶、其未得之者、如渴驢奔泉、昔大内氏遣眞使於大明、以求名畫、塞其請、以雪舟老禪之筆蹟、茲知異朝亦無出之上者、此一幅者、老禪敲出筆端骨髓、而天下無雙之畫筴也、夏珪墨妙、輞川玄微、集而大成、對之則玩味、雖終日不能飽、人等顔翁傳其畫系、華冑口々不泯、自一得此本以來、得之心、應之手、鸞膠再續斷絃、老禪在西周日、築一小軒、扁雲谷、舊基今猶存、太守大江宗瑞公、賜之以雲谷名、乃一世之光、非閭里之榮而已也、可貴、不可口、以跋、北海筠溪野釋謹書、(印三あり)。」

知るべし、等顔のこの卷に依りて雪舟の眞髓を習得せしことを、蓋し、周徳、等薩の後、雲谷庵主の畫を善くする者なく、等顔に至りて謂はゆる再び斷絃を續ぎしなり。等伯と雪舟五代の名を爭ひしは、果して事實なりや否やを明にせず。その山口に住せしが爲にや、古來畫名却りて等伯に及ばず。本朝畫史すらこれを逸して、傳記甚詳明を缺けりと雖も、等顔が技術の眞價に至りては、啻に雪舟を一變して別調を出し、以て雲谷の派祖たるに耻ぢざるのみならず、本時代の畫人中、山水は實に第一位を占め、狩野派の諸家固より及ばず。雪舟と雖も多くこれに過ぎずと謂ふべし。等顔の畫印には、雲谷の圓形及瓢形白文、等顔の方形白文及朱文あり。

第百九十二 雲谷等顔筆四季山水圖屏風一雙二圖及そ
の一部分

第百九十三 同筆同圖屏風一雙二圖及そ
の一部分

第百九十四 同筆春夏吉野圖屏風一雙二圖

第百九十五 同筆竹林七賢圖屏風一雙二圖

第百九十六 同筆同圖屏風の一雙

第百九十七 同筆群馬圖屏風の一雙

等顔の遺作は屏風最も多く、比々皆佳ならざるはなし。就中山水は最もその長所なり。こゝに掲ぐる數品を観るも、圖様の規模雄大にして、山川の布置、變化巧妙を窮め、その石皴は、眞に雪舟を精巧化したるを観るべし。殊に濃淡遠近の法に至りては、古今の畫家殆ど終に等顔に及ぶ者なしと言ふも過褒に非じ。吉野圖の如きは、その畫風の必しも一律に局せずして、時に和繪を折衷せしに似たる變化の自在を考ふるに足り、七賢圖、群馬圖は以てその人物、走獸等にも兼ね長じたるを観るべし。吾人は世の等顔を視ることの未だその眞價に伴はざるを慨し、こゝに多くその傑作を示して、改めて具眼の品第を求むと云爾。

長谷川等伯

長谷川等伯伯一に白諱は信吉。印文方形内初め久六或曰久と稱し、後平藏印文長谷川平藏、方形朱字と改む。能登國七尾若木集には越前の人なり。家世々染工を業とす。等

伯これを捨て、京に上り、太秦廣隆寺に寓し、畫を狩野松榮に學ぶ。或は曰く、初め曾我紹祥を師とす若木集。既にして雪舟を慕ひ、みづから畫

風を改めて雪舟の後と稱す。狩野系圖には「師家義絶之後、自稱雪舟五代孫」と曰へれば、蓋し故ありて破門せられしならむ。畫史にも「自稱雪

舟五代」廟社之掛畫皆自書如此とあれど、京都本法寺の僧日通が等伯の談話を筆記せし「等伯畫說」には、雪舟の弟子等春奈良番匠童子也、清僧也、非俗人也、阿波の讃州に付居申也の門に出づ

と爲す。その畫印に「雲谷」長方朱文、又一印に「雲谷」の下に「亞拉伯數字の三に似たるもの三を列へたるものありの文あり。等顔との訴訟に負けて雪舟五代の名を削られ、爾後長谷川を稱せりとの傳

説あることは、上に見えたり。古田織部に愛せられ、法眼に敍せらる。古畫備考に、山城紀伊郡墨染寺に等伯の畫豐公壽像ある由見えたり、豐臣氏の畫事をも勤めしか。等伯狩野氏の畫家の長たるを嫉み、

茶人利休の素より狩野氏と善からざるを以て、これと交を結び、心を合せて共に狩野氏を譏りきと云ふ。畫史後江戸に下り、右臂不隨を患へ、

又傷寒に罹り、備考天正記を引いて曰く、「寒熱甚咳痰、言冲和小柴胡湯、大便三日不通、中壘用二十餘帖而悉退平復」とあれど、この時七十餘と曰へれば、この病にて死せしならん。慶長十五年二月廿四日歿す。歳七十二。法諡を嚴淨院日妙と云ふ。そ

の畫印には上記の外尙「等伯」の朱文及白文方印あり。等伯畫説は、前代以來に於ける支那畫の鑒賞及畫苑の逸事の叢話にして、繪畫史の一資料たり。

第百九十八 長谷川等伯筆松林圖屏風の一雙

第百九十九 同筆枯木猿猴圖の二幅

畫史に曰く、等伯略有才、凡至諸畫大幅、莫不作、本法寺涅槃圖、橫丈餘、縱三丈餘、今所藏、及老年筆力不衰、雖有兇惡之瑕疵、又有豪氣之風體、時輩無及之者焉。中畧雪舟摸夏珪山水二軸、淡彩、謂之大軸、小軸、等伯得之、謂はる兇惡、豪氣の評最も當れるを覺ゆ。その遺作草筆の墨畫多く、畫風牧溪に類し、破筆頗る勁跋にして粗獷なり。固より等顔に及ばず。されどこゝに掲ぐる松林圖の如きは、蕭爽の風趣多く、類品を見ず。枯木猿猴圖は元屏風の二扇を一幅と爲せる二幅の一なり。傳へ云ふ、前田利家夢に猿猴を斬りしに、覺めて後、座右の屏風畫中の猿に刀痕あり。故に腕斬の猿と云ふ。本品即ちこれなりと。その

長谷川信春

餘等伯遺作の著れたるもの、大徳寺眞珠菴東之間障子畫四皓圖等あり。古畫備考には更に總見院の客殿、蘆雁、鶴竹、墨畫、龍安寺の襖、墨畫、龍等を錄せり。
等伯の子畫史には第二子、辨玉集には一男とあり久藏、信春家聲を墜さず。畫史に曰く、「爲畫清雅、過於父、家流無能及者、大抵守父法、而精密、又倣狩野元信、長於人物、禽鳥、花草、清水寺酒宴之掛畫、稱板畫之絕妙。古畫備考に「しころ引掛額、天正廿壬辰卯月廿七日、長谷川久藏十七歳云々」とあり。されば信春は天正四年の生れなり。又古畫備考増補錄する所の古文書に曰く、「文祿元年壬辰四月、於肥前名護屋、秀吉公旅館之山里座席之間、彩色兒童之畫被仰付候。名公畫譜に「十八歳而死」と曰へれど、大徳寺山門の虹梁に、その天井畫龍の款記として慶長の年號あり、又一畫款に廿六歳と記したるものあれば、名畫傳の或人の説に元和二年四月三日歿すと言へるかた信ずべからむ。但し「年四十七」と云ふは四十一の誤なるべし。信春の畫印には「長谷川」の長方朱文、信春の壺形印あり。因みに言ふ、長谷川派が等伯を初めとして掛額を畫きしは、後に浮世繪の一派たる雪旦、雪堤等を生ずる原因たりしなり。

第四章 雜派

前三章敍する所の外、本時代に於ける小流派及流派を爲さざる畫人尙少からず。左これを列記すべし。

曾我直庵

曾我家は前編に出でたる紹祥の子に直庵あり。丹青若木集に曰く、「直庵者卜居泉州堺、專設色鷹鵠、在功、爽明也、及作水鳥、花草、亦濃也。慶長年中死。その畫印に「平直庵」方形内圓、麻朱文の文あり。

第二百 曾我直庵筆花鳥圖屏風一雙 圖二

直庵の遺作存するもの少からず。鷹及花鳥を專にし、その祖蛇足とは畫風同じからず。濃彩の花鳥、本品の如きをその一好作例とす。雅趣乏しと雖も、精妍亦賞する堪へたり。

土岐洞文

鷹は前代の遺風を紹ぎて、本時代に於いても特に流行せる畫題なりき。直庵の外、洞文亦鷹に名あり。その傳區々にして俄に決し難し。雖も、土岐賴藝即ち洞文なるが如し。賴藝は、土岐系圖に依るに、美濃守政房の子なり。美濃國方縣郡鷺山の城に居る。土岐累代記、美濃名細記等に、賴藝がその臣齋藤秀龍に攻められて尾張に遁れ、織田信秀の好意に依りて大桑城に入りしが、再たび秀龍に攻められて越前、上總等に流落し、明を失ひて入道し、名を宗藝と改め、舊臣稻葉一鐵に助けられて、美濃大野郡岐禮郷に居り、天正十年淺羽本土岐系圖は十一年とす十二月四日年八十二名細記及土岐系圖に依る、累にして卒し、法名を東春院文關宗藝居士、名細記に依る、淺羽本土岐系圖は龍岳宗藝とせり。畫工便覧には「號洞文」と曰ひ、同書及名公畫譜、名畫拾彙等、皆賴藝が畫鷹に長ぜしことを記せり。而して本朝畫史、萬寶全書、名公畫譜には賴藝なくして土岐富景あり。たゞ畫工譜略兩名を擧げたり 美濃の太守にして畫鷹に長ぜしことを錄し、且萬寶全書には「印文洞文」壺形の印を富景の條に載せたり。

書史に「富景の蓋し富景は頼藝の誤傳ならむか。而して又本朝書史、辨玉集及名公畫譜には更に洞玄と云へりの族を錄せり。たゞ書鷹の事は見えず。書史

朱文方印あり。蓋し富景は頼藝の誤傳ならむか。而して又本朝書史、辨玉集及名公畫譜には更に洞玄と云へりの族を錄せり。たゞ書鷹の事は見えず。書史

故に今姑く一人の洞文として、尙後考を期す。古畫備考土岐洞文の下に、江月洞文、畫墨布袋、又畫觀音似啓書記、其畫有清韓題賛者など言ひ、江月の印長方朱文をも載せたり。

第二百一 土岐洞文筆子母鷹圖

洞文の印識ある墨鷹圖稀に世に存す。書史富景の條に曰く、書鷹、銳氣威質、嚴然有所可畏、赫然不可近、絶倫之技、更無可比、然不視其他、所長只是一乎、本圖の如き、以て洞文の長所を觀るに堪へたり。

南都には本時代にも尙前代の遺風を紹介る繪佛師ありき。英俊日記永正四年十二月十八日の條に、繪師芝慶順等が爭論の事見ゆ。侍從の事は多聞院日記に出てたり。左にこれを抄録す。

天正四年七月十四日 「大乘院本願隆禪法印權大僧都、康和二年七月十四日卒、六十三歳、少將源正兼ノ息、御忌日尺迦、多寶、繪所侍從ニ毎年圖繪一鋪ニ千佛書之、奉掛之」。

同八年正月廿三日 「地藏一鋪、侍從ニ申付之、圖繪供養、擬影像令表補、不斷可拜之念願也」。

同年八月十一日 「文卷ノ繪、侍從ニ誂、二斗ニテ書之」。

同年十一月三日 「十一面觀音、侍從ニ誂處、出來、一段殊勝無限出來」。

同十四年十月十五日 「繪所侍從高野山ヨリ歸トテ來語」。

畫工便覽に「侍從、不知其名、京城人、出家、繪旦暮作之爲樂、畫功不少」もあるも同人か。想ふに侍從は或は慶順の子弟ならむ。侍從の子に芝琳賢あり。多聞院日記に左の記事見ゆ。

天正十四年三月十三日 「繪所侍從子十二才、得度事申聞云々」。

天正十六年十一月十六日 「侍從子琳賢、長谷等ニテ本尊書候、見セニ來、抑見事無比類事也、當年十三歳歟、四歳、凡奇特事也ト、各高野衆稱美シテ、權者也ト申云々」。

文祿三年三月廿九日 「南井坊御影、從琳賢出來、地組遣テ繪計ヲ合升三斗ニテ申調了」。

前編掲ぐる所の東大寺緣起は傳へて芝法眼琳賢の筆と云へれど、天文五年に成りしものなれば、天正十六年に十四歳なる琳賢の畫かむやうなし。或は侍從の父に同名の人ありしにもや。古畫備考は丹青若木集及便覽を引いて「琳賢者、南都宅間氏之末葉也、傳家學、精佛像、圖長谷觀音堂扉於四天王像、并在東大寺古緣起廿卷、然作三卷、琳圖之云々、畫圖未鑒視之、後敍法眼、在二子、第二子者、號玄海上人、初瀬本願云々、琳

南部の繪佛師、芝慶順、芝侍從

芝琳賢

玄慶長年中死」と曰ひ、更に侍従をその嫡子と爲せり。蓋し父子を轉倒せるならむ。さるは、慶長中歿すと云へば、天文五年に東大寺縁起を畫きし人として長壽に過ぎ、天正十六年に十四歳なりし人の歿年にふさはしきのみならず、長谷寺の扉畫を圖せしと云ふことも、多聞院日記の同寺の本尊を畫きし誤傳にもやと想はるればなり。

宮内卿大藏卿

侍従、琳質等と同時に宮内卿及其の子大藏卿あり。共に多聞院日記に見ゆ。

天正十二年六月五日 「去廿八日於長谷寺喧嘩有之、繪所宮内卿生害了、相手藤切并智惠光院ヲ、秋山ヨリ人數出、檢斷、逐電了ト、隨分ノ繪書、長宮ト申

セシ仁也、一段惜事也」。

同八年二月廿日 「於摩尼珠院、繪所宮内卿子得度了、十二歳、大藏卿ト云」。

信春

信春も亦南都の繪佛師なり。畫史に曰く、住南都、世爲春日繪所、蓋佛像家也、善雜畫、而長於花鳥、墨戲也、出於牧溪畫意、似能相、尤柔潤耳、藻魚圖亦可。名公畫譜春信に作れるは誤ならむ。古畫備考には、三拾六歌仙畫鑑中、養川院有極、亦有粟穗雀圖署と曰ひ、信春養形及方の印を載せたり。

土佐派光吉

土佐派は本時代を以て衰微の極と爲す。前出光茂の次子と云ふに光吉あれど、若木集及畫工譜畧には光元の弟子と爲し、土佐家は光元に至りて絶えきと諸書にも見えたれば、土佐家血脈の人にはあらぬを、その孫光起後につが土佐家を再興せしより、かくは言ひ倣せしならむ。

さるは、永祿九年記二月廿二日の條に、繪書源左衛門罷下也、南方合戰色々也云々、三月十一日の條に「從京萬里御方入寺、源左衛門一人被召具」など見え、源左衛門は即ち光吉の通稱、入道の名を久翬或は休翬、休欲に作ると云ひ、泉州堺に住し、古畫備考に曰く、「土佐家淨土宗也、久翬、光則二代法華宗也、堺妙國寺ニ葬アリ、光起ヨリ又淨土宗也」本朝畫史の

註にも、又慶長年中有土佐久欲者、住居和泉堺津、業畫也、蓋土佐家族乎、中方今在京都稱土佐氏者、謂是傳耳署と曰へるなどに考ふべし。しかのみならず、地下傳には、敘從五位下、倭錦には、左近將監とあれど、土佐住吉繪所系譜には、無官と記し、堺鑑にも單に「土佐久翬、天正年中ノ比、最繪を書」同書には久翬の子を源左衛門と爲せりと曰へり。蓋し土佐家は光元にて斷絶せるにて、光吉はその門人なるべし。地下傳に、「宮中之畫調進之、領地悉亡、有領之

領御年扇、御月扇調進之事及中絶數年獻上、甘露寺中納言傳奏、女房奉書在家、于時住和泉境とあれど、光吉實に光茂の子にしてその後を嗣ぎしな

らば、領地を失ひ、扇子調進の絶えし事なども、強ち信じ難し。光吉の畫については、畫史に「筆法專守規矩、尤優柔也」と曰ひ、畫工便覽には「克畫源氏物語卷、小畫而已、無活動、要美細」と曰へり。想ふに、光吉は當時頗る繁昌を極めし堺に在りて、仕入物めきたる畫品の卑しき製作を出ししならむ。倭錦にはその遺作翁三番二幅、天神、秋野日月屏風、利休肖像贊春屋等を錄せり。慶長十八年五月五日、歳七十五にして歿す。法名を圓

土佐家門人

照院一光久翬居士と云ふ。

土佐家の門人と傳ふるものにして、本時代に編すべきを左の諸家とす。

戸田光純 辨玉集に「相保孫、修理男、名畫拾葉に「道頓、始名光長、土佐光茂弟子、按道頓爲土佐家門人、與土佐祖先赫名之人同名、可怪也、或光永而誤傳作

光長耶、又按辨玉集、土佐光純子有道純、光起父也、純頓相類、亦可疑矣、住泉州堺津、天正、慶長間人、など見え、戸田の氏と源兵衛の通稱とは名畫傳に出でたり。土佐系譜に光元の弟子とし、永祿十四年四月日叙法眼とある由は、先に光元の條に記せり。

花野光明、名畫傳に曰く、光吉の門人のよし、住吉繪所の説にて聞けり。文祿頃の人なるべし。

中村光葛、同書に曰く、また光勝、土佐光吉の門人のよし、住吉繪所の説にて聞けり。文祿頃の人なるべし。

土佐光益、書史に曰く、世其家、亦光信之裔也。名畫傳亦文祿頃の人と爲せり。

光繼、名畫傳に曰く、光吉の弟子なるよし、住吉繪所の説なり。文祿頃の人なるべし。

土佐一得、書家人名畧に「土佐一得、朱衣達磨ノ圖ニ押所ノ印文、土佐トアリ、名畫傳に「或は一徳と號す。住吉繪所の説に一徳、光吉門人、慶長年中の人と云々」など見えたり。

以上列舉する所の外、別に流派系統を爲ざる者あり。左にこれを掲げて以て本編の終りとす。

後陽成天皇、天正十四年十一月廿五日御即位、慶長十六年三月廿七日御讓位、元和三年八月廿六日崩御。便覽に曰く、常好畫圖、甚在器趣矣、令圖一片

板上六馬、令施納洛之清水觀音、其形像筋骨甚有生意、人皆信敬之、亦東福寺之什物、兆殿司筆羅漢二幅散失、然帝自畫加之、是天資穎悟、至藝神、奇妙如此哉、本朝畫纂に曰く、後陽成院御筆繪、照高院御門主道見親王外照、紙本、筆、菅谷團之助清章、寄附于平林禪寺、畫工譜略に曰く、御陽成院御筆ハ小栗宗

丹ニ似タリ、彩色花鳥ノ繪、永徳ノ筆精あり、新篇鎌倉志に曰く、光明寺々寶阿彌陀畫像四幅、一幅は後陽成帝ノ宸筆、古畫備考には「雅輔、周仁の宸署

並に「金龍」の壺形、雅輔及「周仁」の方形朱文御印を載せたり。

豐臣秀吉、關白、太政大臣、從一位に至り、慶長三年八月十六日薨す。歲六十三。名畫拾彙に曰く、「豐臣太閤一時乘輿之墨戲、雖草々不經意、然規模寬大、足

見雄拔之氣象、備考には富士、達磨の繪等ある由見えたり。

近衛前久、關白、太政大臣、從一位。東求院殿と稱す。天正十年六月二日落傍、法名龍山。慶長十七年五月八日薨す。歲七十七。便覽に曰く、「好丹青、常圖人丸

像、詠和歌、亦馬形畫甚有意氣、拾彙に曰く、「翰墨之妙、繼芳躅於大乘王、尊圓親王、傍有丹青之興、昔畫宗祇像、上加贊語、賜之紹巴矣、翰林五鳳集に曰く、「此

乃陽明殿下之官畫、而廣橋亞相公手裡者也、一日高明滿坐、囑以贊詞、下畧策彥備考に曰く、「又畫天神像」。

近衛信尹、關白、左大臣、從一位。三藐院殿と稱す。慶長十九年十一月廿五日薨す。歲五十。便覽に曰く、「達書畫、人丸及花鳥、人物圖繪、甚有清爽活動、展圖日

錄に誓願寺に渡唐天神、高野行人方寺院に喜撰法師の像あるよし見え、備考には畧畫天神(百幅の一と云ふ)の縮圖及その款印を載せたり。

豐臣秀次、關白、左大臣、正二位。文祿四年七月八日高野に薨す。歲廿八。高巖院と諡せらる。便覽に曰く、「常戲翫丹青、畫人物、鳥獸」。

武田信廉、信玄の弟、幼名孫六、刑部丞、上野介、刑部少輔に任せられ、後薙髮して逍遙軒海天入道と稱す。又主宰、信綱と號せり。天正十年三月卒す。書史

に曰く、「性好繪、善寫、信玄之畫像、又畫十王及十二天之像、在于紀州高野山、備考に曰く、「逍遙軒筆地藏尊一幅、十王像十幅、在高野行人方寺院、甲斐府中

大泉寺所藏、信虎肖像、長禪寺所藏、夫人大井氏肖像、共逍遙軒畫也、大泉寺殿泰雲存康庵主像贊(備考に出づ)の末に曰く、「今茲春之末、計音忽至、中畧、粵

逍遙主宰、手寫庵主眞容、而被露、孝意厚矣、中畧、天正二甲戌端午春國書讀、長禪寺殿肖像贊(同前)に曰く、「子茲有孝子、新羅後裔信廉公、自描慈母之容顏、

需於贊〔申畧〕天文二十二年五月二日、前永平安元叟贊。

蜷川親長 本姓は宮道、通稱新右衛門。後入道して道標（或は道馮に作る）と號す。慶長十年五月八日歿す。歳七十八。拾彙に曰く「嘗聞、有其所書寶船圖、今傳嫡家」云、備考に寶船古繪本の事見えたり。

長尾政長 或は康長、又當長に作る。古河藤氏、通稱新五郎。元服して但馬守に任せられ、山内職を司る。法名禪空。拾彙に曰く「累世爲書、又繪肖像、藏下野足利長林寺」。

水谷正村 或は結城氏と云ふ。兵部大輔に任せられ、後入道して蟠龍齋全珍と號す。武勇の名世に高し。慶長元年六月廿日久下田城に卒す。歳七十六。拾彙に曰く「曾自幕府賜白斑鷹、甚愛之、及歳七十一、對鏡寫自像、傍書鷹、謂、己亦可共成佛矣」この事水谷蟠龍記にも見えたり。

織田信包 信長の弟なり。從三位、左近衛中將、上野介、民部大輔に敍任せられ、慶長十九年六月十七日（或は曰く、十七年七月）卒す。道號眞珠院心巖安公と稱す。名公書譜に曰く「善圖書」。

加藤清正 從四位下、主計頭、肥後守に敍任せらる。英名世に高し。慶長十六年六月廿四日卒す。歳五十。集古十種にその畫豐太閤像を載せ、備考にはその自畫像江戸樹木谷最正山覺林寺に在りと曰へり。

大谷吉隆 從四位下、刑部少輔に敍任せられ、慶長五年十月關原に戰死す。備考に曰く「嘗寫豐臣公像、妙心寺南化和尙贊〔中畧〕慶長己亥三月十日〔中畧〕此幅藏于京師數内氏、其箱表署云、豐公御影、畫大谷吉隆筆〔下畧〕」。

北條氏政 從四位下、左京大夫に敍任せらる。號を截流齋と云ふ。天正十八年七月十一日卒す。歳五十三。法名松岩傑公慈雲院と稱す。名公書譜に曰く「善畫狩野系圖は元信の門人と爲せり」。

吉永彦宥 直實敦盛圖額、天正五年十一月吉日、備前國住人、吉永彦宥丹寬畫、嚴島繪馬鑑、古狩野家ノ風アリ〔備考〕。

月輪一宗軒 〔甲斐國志神社部ニ云フ、巨摩郡小笠原村五社權現本地佛彌陀、藥師、千手、十一面、文殊ノ五像アリ、裏書云、筆者月輪一宗軒、神主口口、天正八年庚辰十二月吉日トアリ〕〔備考〕。

津川四郎右衛門 尾州武衛ノ末葉ニ三松ト云人アリ。其弟津川四郎右衛門ト云。久ク牢浪シテ民間ニ落、兄ハ醫師トナリ、弟ハ繪師トナル。堺ニ徘徊シテ淺マシキ體ナリ。畠山高政聞テ哀レニ思ヒ、兄弟ナガラ令扶持。其後信長ニ對面ノ序ニ、是ハ貴邊ノ主筋ナレバ、此人ヲ其ヘ可遣由宣ヒケレバ、信長モ昔ノ好ミヲ被思出、後二人ヲ迎ヘトリ、一處懸命ノ地ヲ被安堵。誠ニ奇特ノコ共ナリ。細川略記追加〔備考〕津川右衛門尉〔其名不詳、武衛義銀入道三

松軒弟、因國亂共沈淪他邦、韜晦其名、或爲醫業、或爲畫工、〔拾彙〕。

田中治兵衛 〔甲斐國志曰、文祿四年八月十五日、甲斐國山梨郡府内八幡宮、淺野忠吉奉納繪馬二枚、筆者田中治兵衛〕〔備考〕。

達長老 〔不知住居能作墨畫、清逸同書〕。

榮圖 備考に「前東福虛白叟眞畫」と記し、靈莫の圓形、榮圖の方形朱文印を載せたり。

遮莫 畫史に曰く「僧遮莫號月船、畫學周文、而畧相似、筆力蒼老、善畫人物、山水、花鳥、蓋墨色又類于眞相」印文曰文外、備考に曰く「余嘗見其畫馬上鍾馗圖、稍

似真相、書品天正、文祿頃之物歟。

顯如「攝津河邊郡小坂田村正智寺有書佛、背面記曰、中畧」天正二年三月顯如「攝津志」。

圓譽「石雲庵在梅畑北一瀬村、本尊彌陀也、開基號圓譽上人、中畧」天正十二年十一月六日八十一歳、於正行寺而遷化、中畧曾圓譽嗜畫、所自畫善導、法然之像并自畫影在此寺、山城名勝志。

尊海「書史に曰く、僧尊海、文祿年中人也、有畫涅槃像、與芝法眼同名、然筆力異、其畫後記、山法眼尊海筆、在于二條殿文庫、余昔觀之、備考に李白の圖に在りとして、等海の壺形印を載せたり。

華藏院「常州礪湊眞言宗寺僧、畫佛像、便覽」。

玄空「豐前州人、保平山所住禪僧、善墨戲、便覽」。

櫟屋「辨玉集奈良法眼ノ次ニ出ス、印アリ、入春日屋、畫佛像、妙也、備考、按、天文頃有櫟屋榮順、衆徒、又見紹巴手簡、出於櫟屋之事、然則非一人之名必矣、拾彙」。

訓谷澤水「薩州人、長于文字、幼而甚好繪、多集古畫師之、終日作繪、能圖水草、秀潤不少、便覽」。

東澤居士「九州筑後人、常好繪、畫佛像、嬰兒姿、所圖入懷中、隨乞施與之、便覽」。

監短「不知何人、善圖竹、有宋人之風、然其畫罕見、同書」。

方願「不知何人、學真相之風、功少有器趣、善手跡、便覽」。

滿昌「不知世姓、畫墨花鳥、書篆、滿昌の朱文奇形印あり。

宗東「畫猫、似等春拙矣、備考、その名の朱文方印あり。

莫秀「墨葡萄、有松岩賛、同書、その名の朱文方印あり。

秀九「畫雪中枯木寒鴉、同書、その名の壺形印あり。

元久「畫鯉魚圖、同書、扇面墨畫人物、元信ニ似タリ、同書増補、その名の壺形印あり。

松巖「竹ニ岩、雙、同書」。

重政「同書、畫蜆子」と記し、その縮圖及「重政の菱形朱文印を載せたり。

奉松「不知何人、善丹青、畫佛像、活動而有士氣、便覽」。

福賢「師倣奉松、常畫佛像及人物、花鳥、有士氣、印内以名、同書」。

忠親「備考にその名の朱文方印を載せたり。

新屋「畫禪祖、人物、東州適有其畫、拾彙、その名の長方朱文印あり。

景光「備考に瓢形朱文及其名の朱文方印を掲げ、唐畫ノ如クニミユル、絹、横、猫繪、倣徽廟筆、一溪ノ風アリ」と記せり。

快心 「不知何人、好書、岩松宿鷹、岩木學、元信、鷹宗、土岐風格、印形團扇（便覽）。

休心 「不知何人、學、曾我風格、功少而無清活（同書）。

神山天岩 備考に「神山」の朱文、天岩の白文、方印を掲げ「墨蘭、玉腕子風」と記せり。

等圖 「布袋、鷹、少シ彩入、紙テリ有、雪舟派ニハ無シ、拙畫也（備考）。

友利 「靈照女半身、紙本直幅、著色、古書ヲ寫シタルモノ（同書）その名の壺形印あり。

神毫 備考に「蘆雁、絹本可翁ニ似テ劣レリ」薄墨總グマ、雪ノ景色也」と記し、その縮圖及其その名の白文、方印を載せたり。

家津 同書「古木ニムク鳥」と記し、その落款、朱文、方形の名印を載せたり。

周連 同書「曾見山水圖、又初祖像、永祿、天正頃」天神、著色」と記し「環齋」の白文、長方、周連の朱文、方形の二印を載せ、増補にその記名を収めたり。

直木眞吉 同書「睡布袋、紙本墨畫、江首座ト申來ル、不存候、雪村風繪也」雙幅梅竹墨畫、紙、大、立、雪村風アリ」など記し「眞吉」長方「直木」方形と假讀せらるゝ、

二朱文印を載せたり。

月舟 「住、但州美含郡圓通寺、書畫并妙、常將江州琵琶湖水、作草隸、因能辨知湖中水（便覽）。

定應 備考に「鷹、十二枚、彩色」と記して、その名の壺形印を載せたり。

成村 同書「古拙、玄照居士ニ似タリ、觀瀑圖、豎幅、童子アリ」と記し、その名の壺形印を載せたり。

藤原政方 同書「龍虎雙幅、紙本、祥啓風ニテ、畫樣アシアヒハ、隨分面白キ畫ニ相見エ候」と記し「藤原」の橢圓「政方」の方形朱文印を載せたり。

碧峯 同書「藻魚」の畫に押せし「碧峯」の方形朱文印を載せたり。

廻雪 同書にその名の長方朱文印を載せたり。

溪鷗子 同書「啓書記山水、新シク見ユ、光ル紙、其時代」雪山水、周文風、増補に「雪村風山水、佳也」など記し「眞字」の壺形及「溪鷗子」の方形印を載せたり。

松本山雪 拾彙に曰く「畫山水、人物兼學」周文、雪舟筆意、有寒拾圖、龜陰策彥和尚題贊者、備考に「松本」の長方朱文「山雪」の方廓内壺形印等を載せたり。

Painter - Hans Gert-Haus

Dresser - Shu He - in
Kyoto.

Blank Page Digitally Inserted

第百八十六 琴棋書畫圖障子畫 狩野永徳筆

紙本水墨

各堅五尺九寸横二枚續九尺四寸四分

(第百十三頁參看)

京都聚光院藏



今、この書に、大正十一年、三月、東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

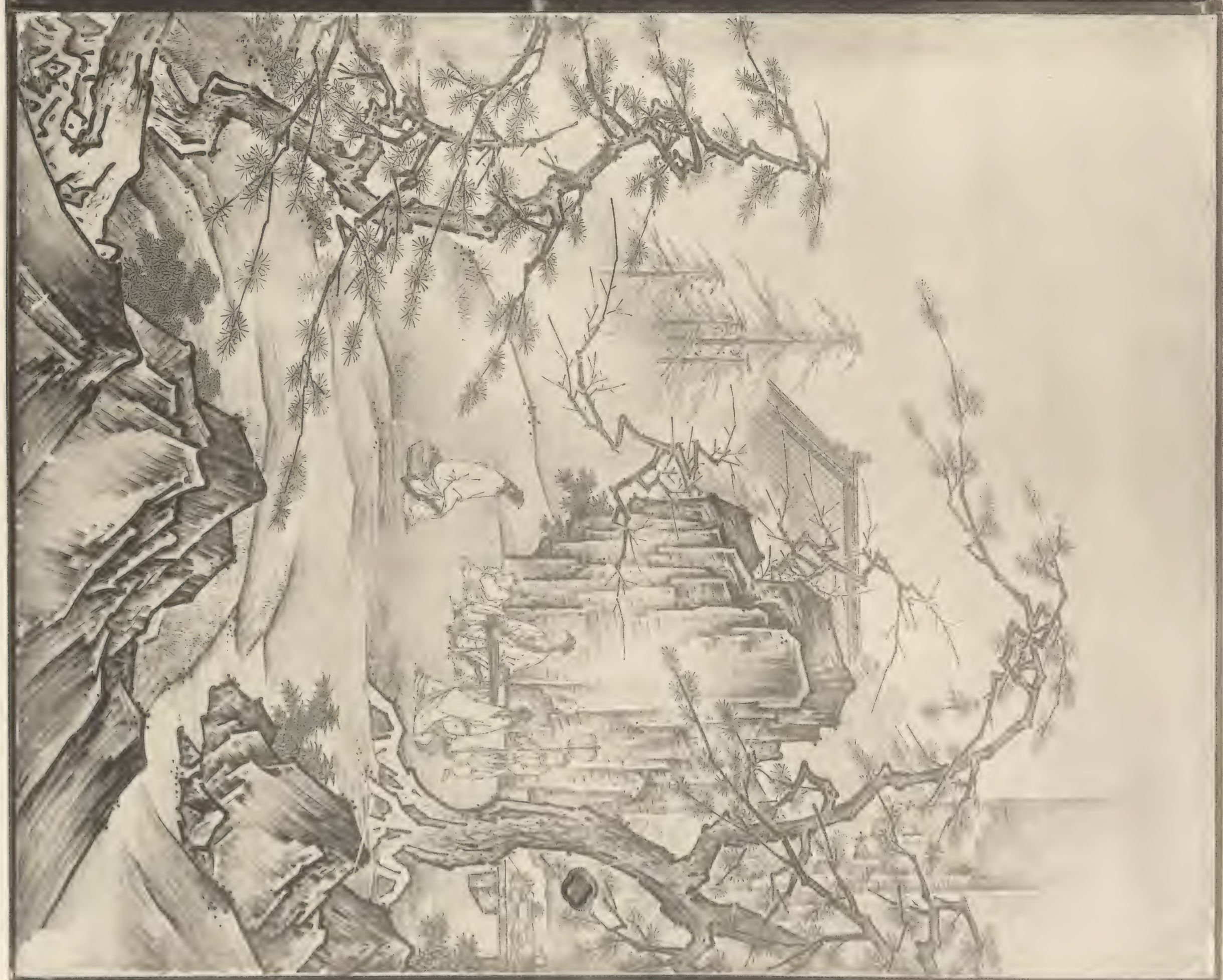
東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

東京、明治書院、出版、

百八十六 琴瑟書畫圖千畫 終理永謝筆





Painter - Yesterday

Upper Shukun
14 days

Blank Page Digitally Inserted

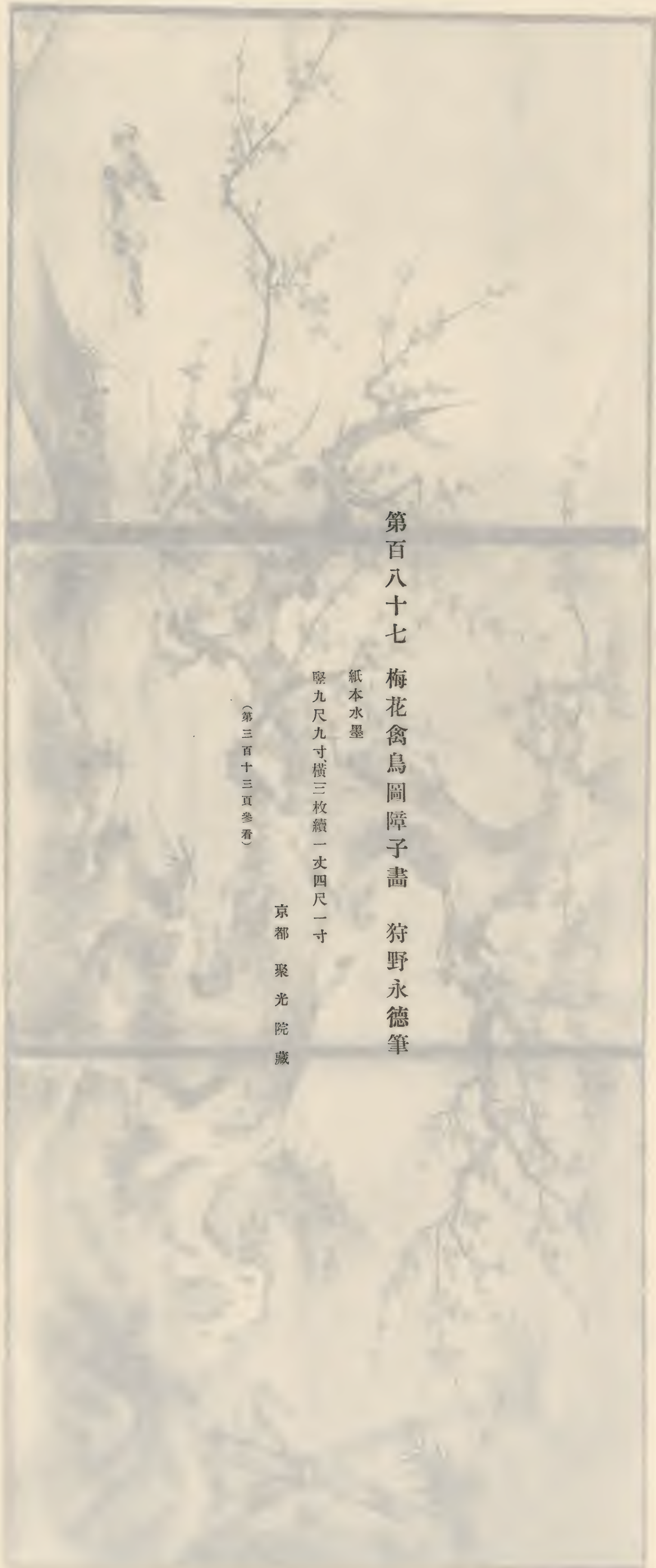
第百八十七 梅花禽鳥圖障子畫 狩野永徳筆

紙本水墨

竪九尺九寸横三枚續一丈四尺一寸

(第百十三頁參看)

京都 聚光院藏



(第三百十三頁書)

京勝樂光訓

經式只式七冊三對錄一丈四只一十

冊本水畢

叢百八十寸 琳非禽鳥圖刻午書 蔡裡永齋筆



Parviter - Samraha

Chowra Koshi Hangmanza
Kiyato.

Blank Page Digitally Inserted

第百八十八 鷲猿圖屏風一雙 狩野山樂筆

紙本水墨

各竪五尺五分横一丈二尺八分

第三圖は第二圖の一部分を大寫し、以て筆致を細觀するに便したり

京都 西本願寺藏

(第百十七頁參看)

（第三十卷）

京都 西本願寺藏

三冊

第一冊 二冊 三冊 一冊 二冊 三冊 一冊 二冊 三冊

各冊正頁正卷一丈二尺八寸

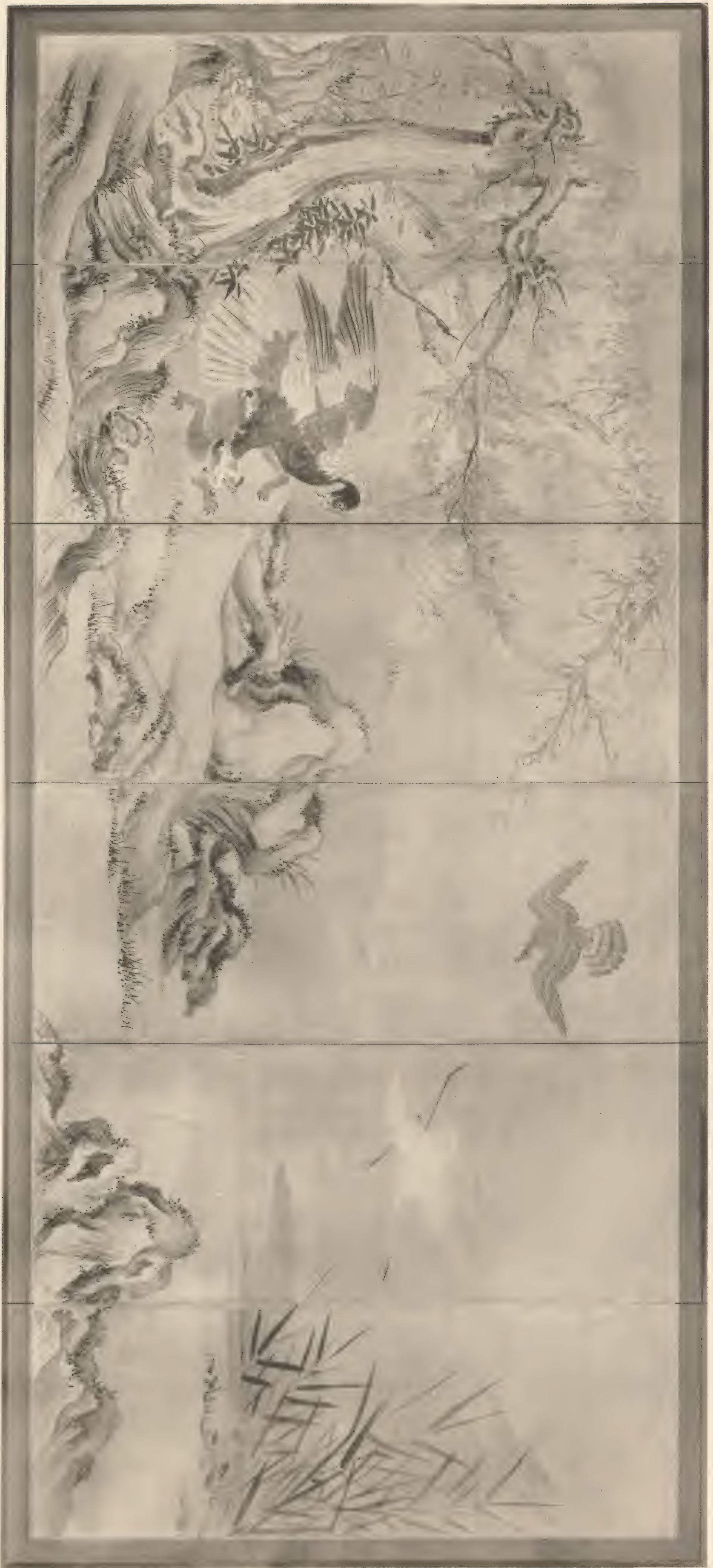
附本小冊

卷百八十八

獵象圖 輞風一雙

後醍醐山樂筆







Painter - San naku.

Owner Count 5. Hiza mashi.

Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百八十九 鷺鶴蒼鷹圖二幅 狩野山樂筆

三幅對中の二幅

紙本著色

各竪三尺八寸七分、横一尺六寸七分

東京伯爵久松定謨君藏

(第百十七頁參看)



東京帝國大學出版部

香煙三斤八十衣褲一斤六十

附錄四

三 讀 本 中 心 二 冊

卷百六十六 藝文四 詩二

東湖瑞保類

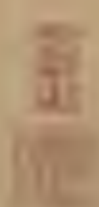
劉子舉年在家在孝經一握中

繪出名鷹勢文雅之極丹鳳一青一仙會永信



寸畫蒼鷹萬里心
惜如金掌小如金
雖然渠有凌霄志
不與王侯作樹陰

東坡詩
蘇軾



Painter - Kaihoku Yusho.

Owner - Megoshinji,
Kyoto.

Blank Page Digitally Inserted

第百九十 文王呂尙及商山四皓圖屏風一雙 海北友松筆

紙本金地著色

各堅五尺八寸六分、横一丈一尺四寸六分

京都 妙心寺藏

(第百十九頁參看)



(卷一百一十五)

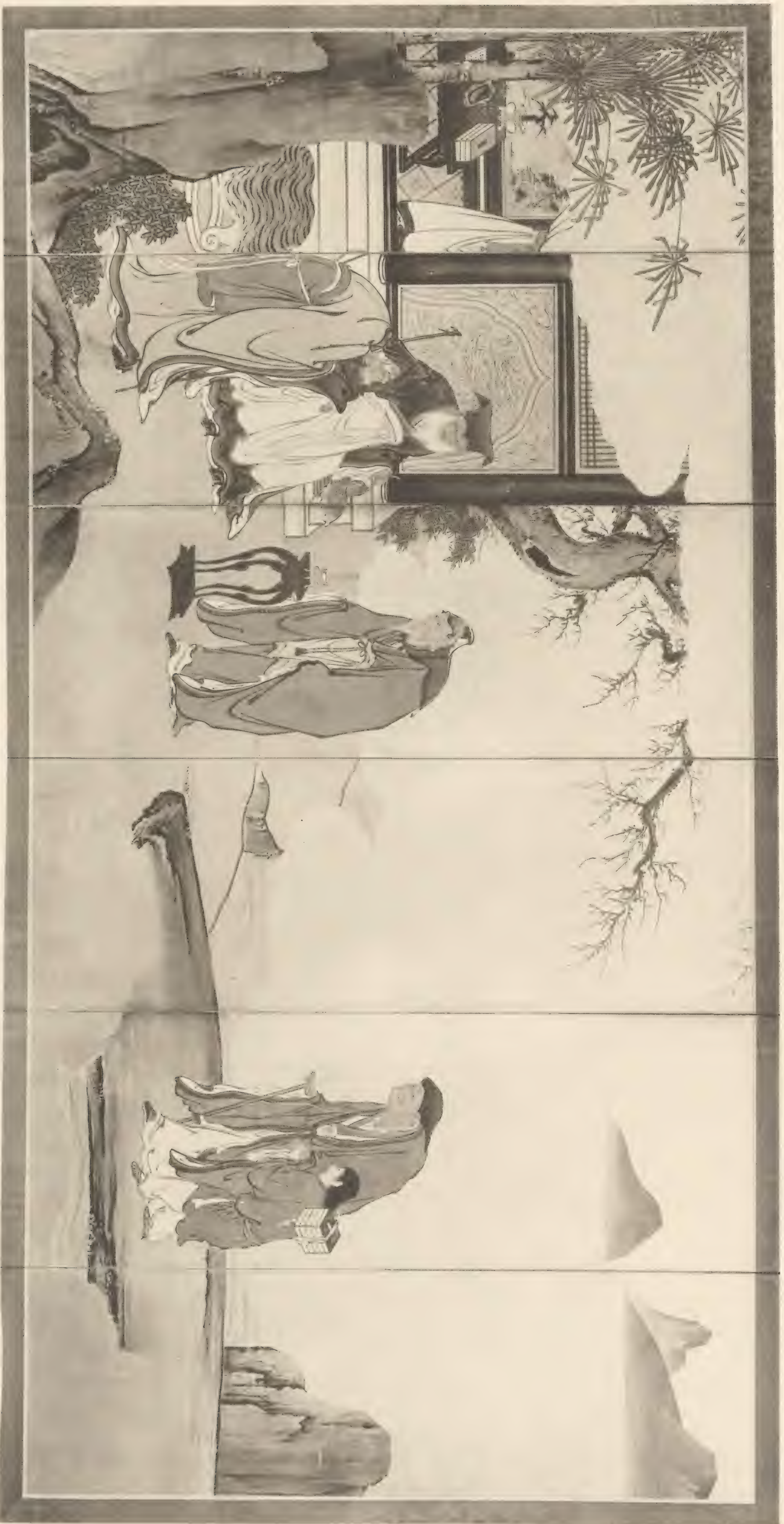
京師志

卷一百一十五

京師志

卷一百一十五 文王呂尚箕子山四神圖風凰一雙 續北史外華





Painter - Kaihoku Yusho

Owner - Myoshinji.

Kyoto.

Blank Page Digitally Inserted

第百九十一 牡丹圖屏風 海北友松筆

紙本金地著色

竪五尺八寸六分横一丈一尺四寸六分

京都 妙心寺藏

(第百十九頁參看)

卷之十一

原明

卷之十一

卷之十一

卷之十一

卷之十一

卷之十一



Painter - Hor Kaku Fogan.

Owner Baron S. Masuda
Susa, Nagato.

Blank Page Digitally Inserted

第百九十二 四季山水圖屏風一雙 雲谷等顏筆

紙本淡彩

各豎五尺二分横一丈一尺九寸二分

第三圖は筆致を細觀するに便せん爲め第一圖の一部分を
大寫したるものなり

長門圖須佐 男爵益田精祥君藏

(第百二十頁參看)

(第三頁二十頁參考)

具門圖座附 世新益山附雜書

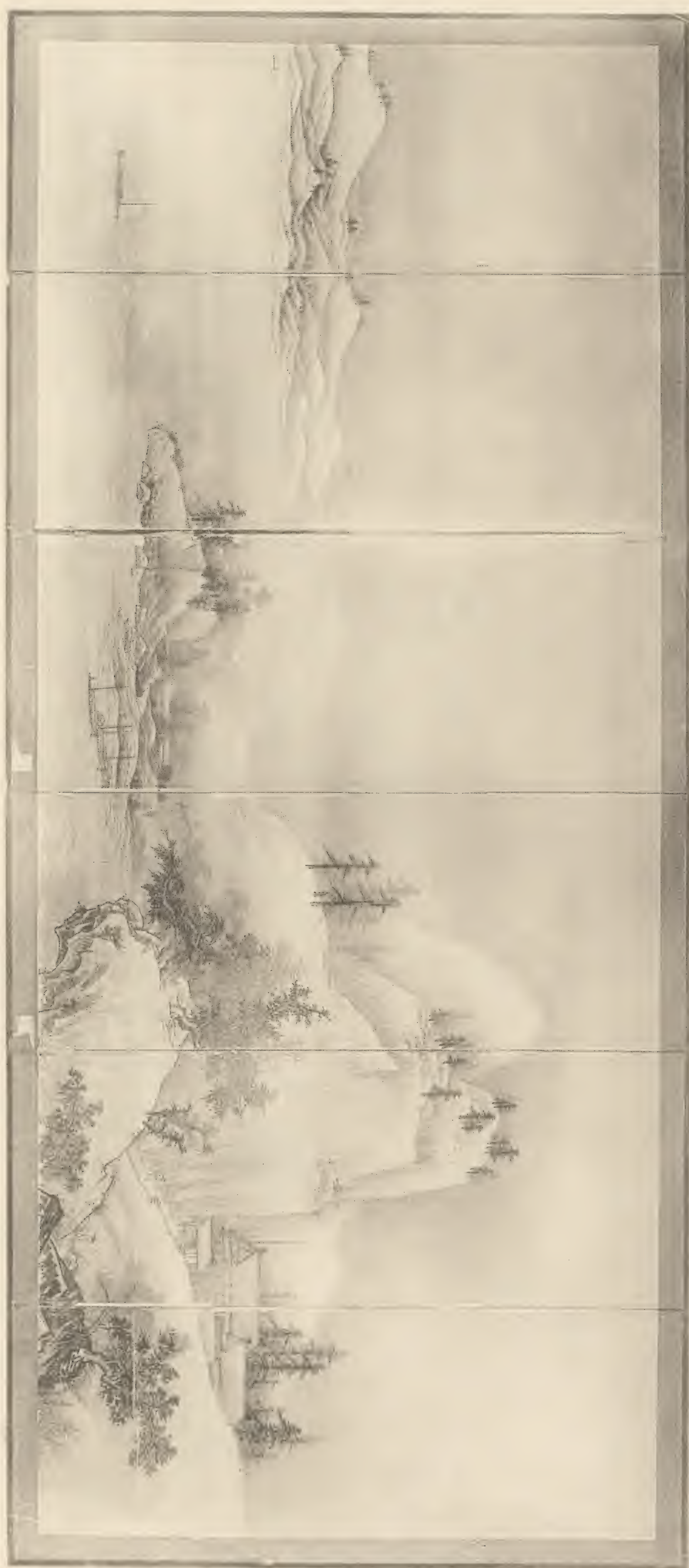
大寫Jつるものなり

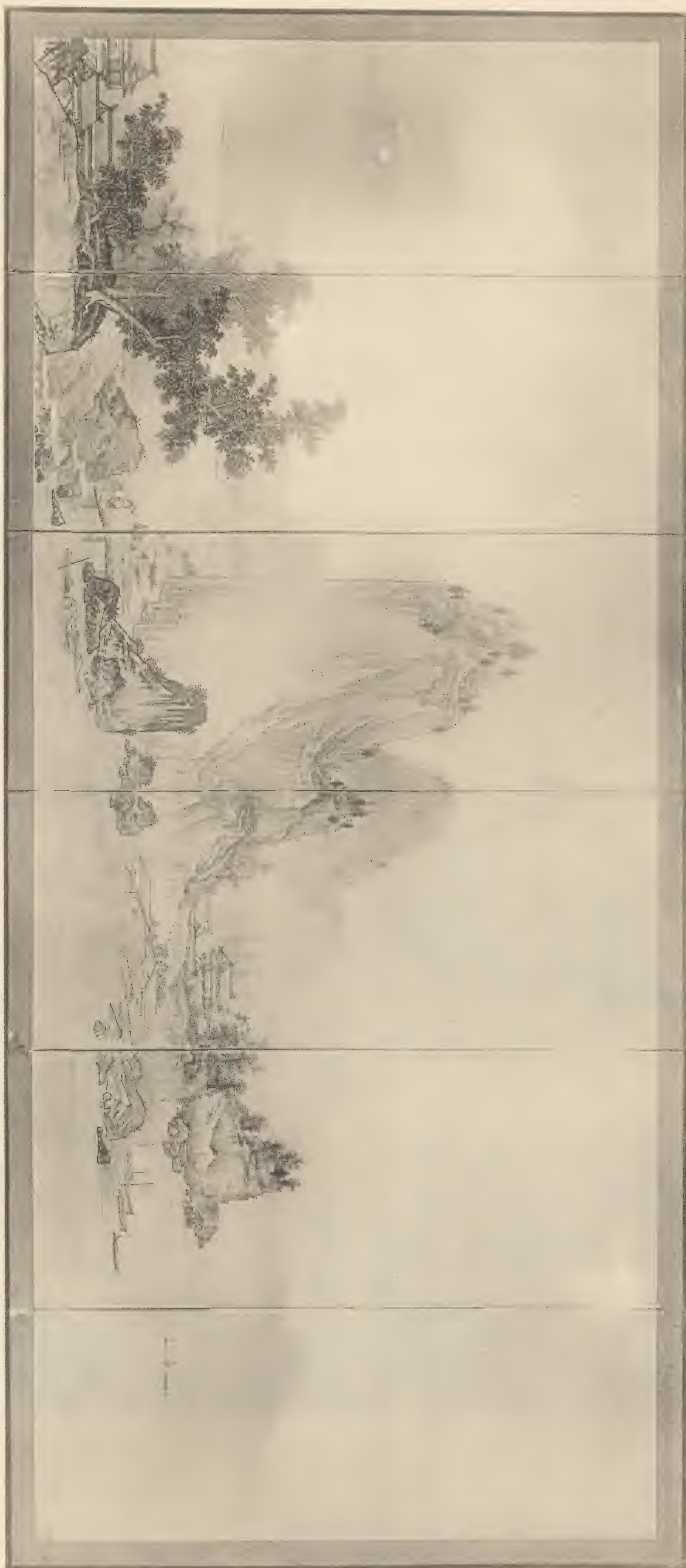
葉三圖の筆迹を聯綿するの形を以て欲也葉一圖の一帯を

若し正入二巻附一巻一以式を二巻

附本附録

葉百廿十二 四季山水圖報風一雙 雲谷筆隨筆







Painter Van Hooker Tozani.

Owner T. Kimura,
Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百九十三 四季山水圖屏風一雙 雲谷等顔筆

紙本淡彩

各堅五尺二寸一分、横一丈一尺二寸八分

第三圖は筆致を細觀するに便せん爲め、第二圖の一部分を大寫したるものなり

東京 木村長七君藏

(第百二十頁參看)

東京木村尋子博士藏

一、關於「大國」的定義

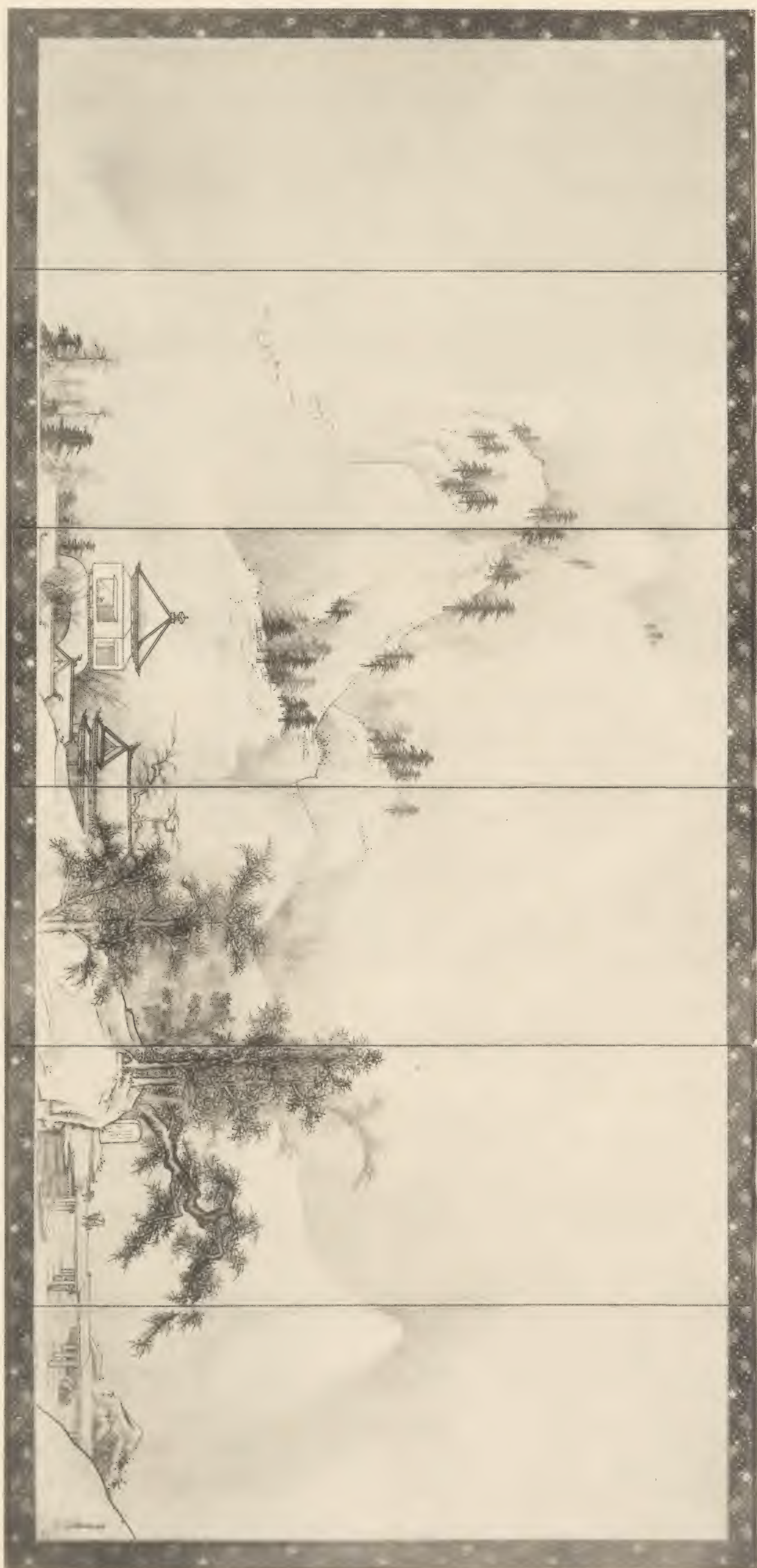
第三輯 華南平壤稿 十二 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 1040 1041 1042 1043 1044 1045 1046 1047 1048 1049 1050 1051 1052 1053

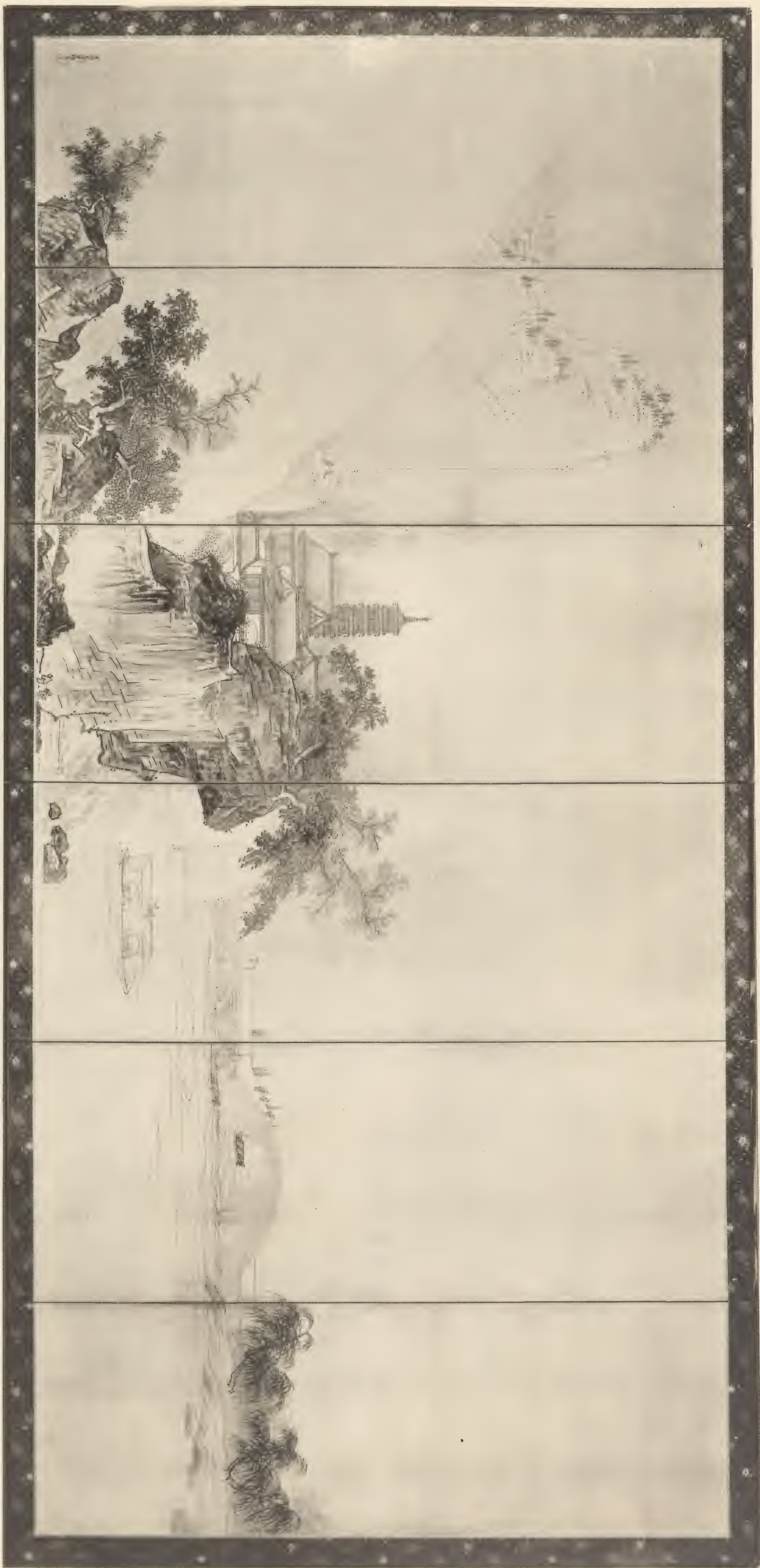
卷一百一十一

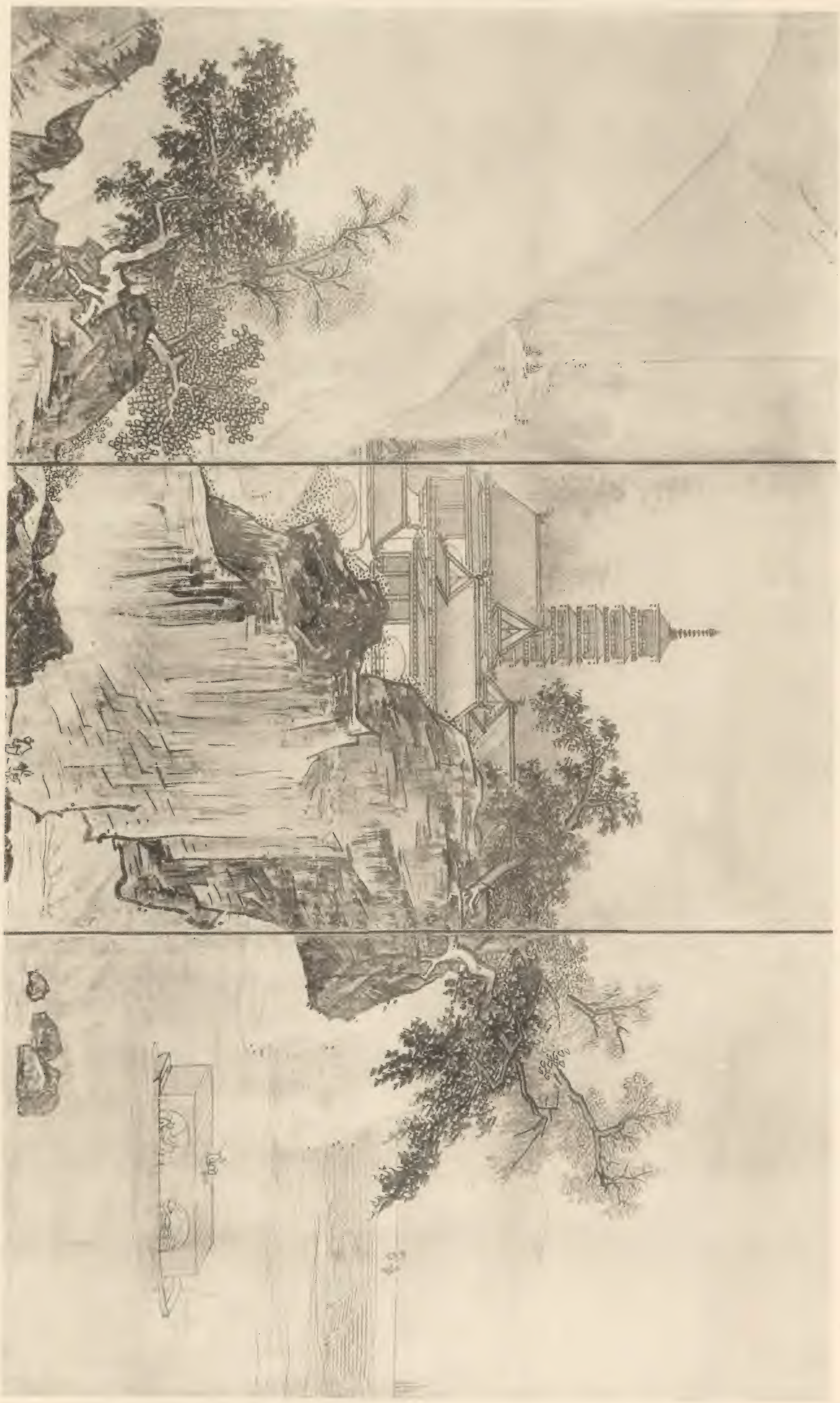
鼎木新綠

卷五十三

四季山水圖 絹一雙 雲谷卷 紙一







Painter Iwakura Tōgō

Deputy Baron S. Masuda

Susa. Nagato

Blank Page Digitally Inserted

第百九十四 春夏吉野山圖屏風一雙 雲谷等顏筆

紙本金地著色

各堅五尺一寸一分、横一丈一尺七寸四分

長門國須佐男爵益田精祥君藏

(第三百二十頁參看)

(張三百二十頁卷首)

張四圖外 供養堂用精刊

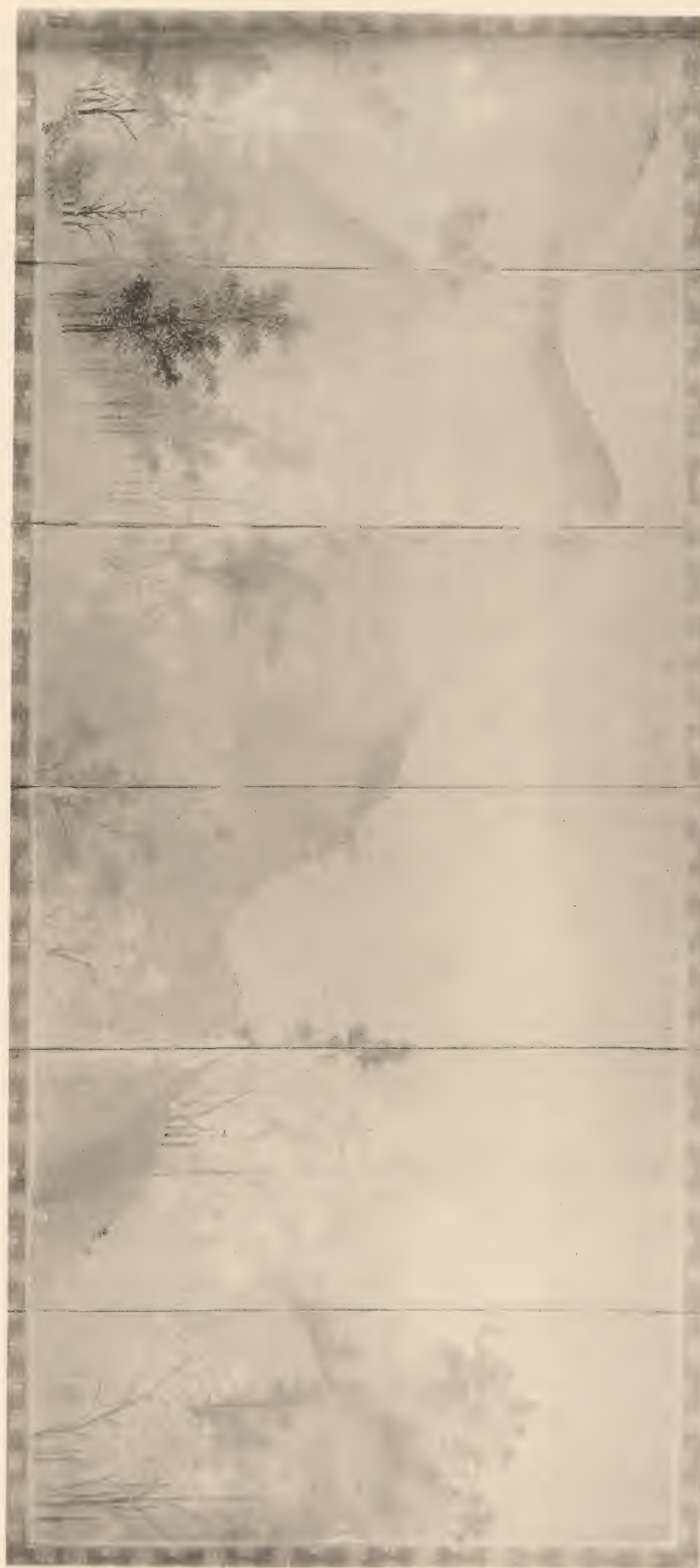
寺觀其外一畫一景一主 外子世國祭

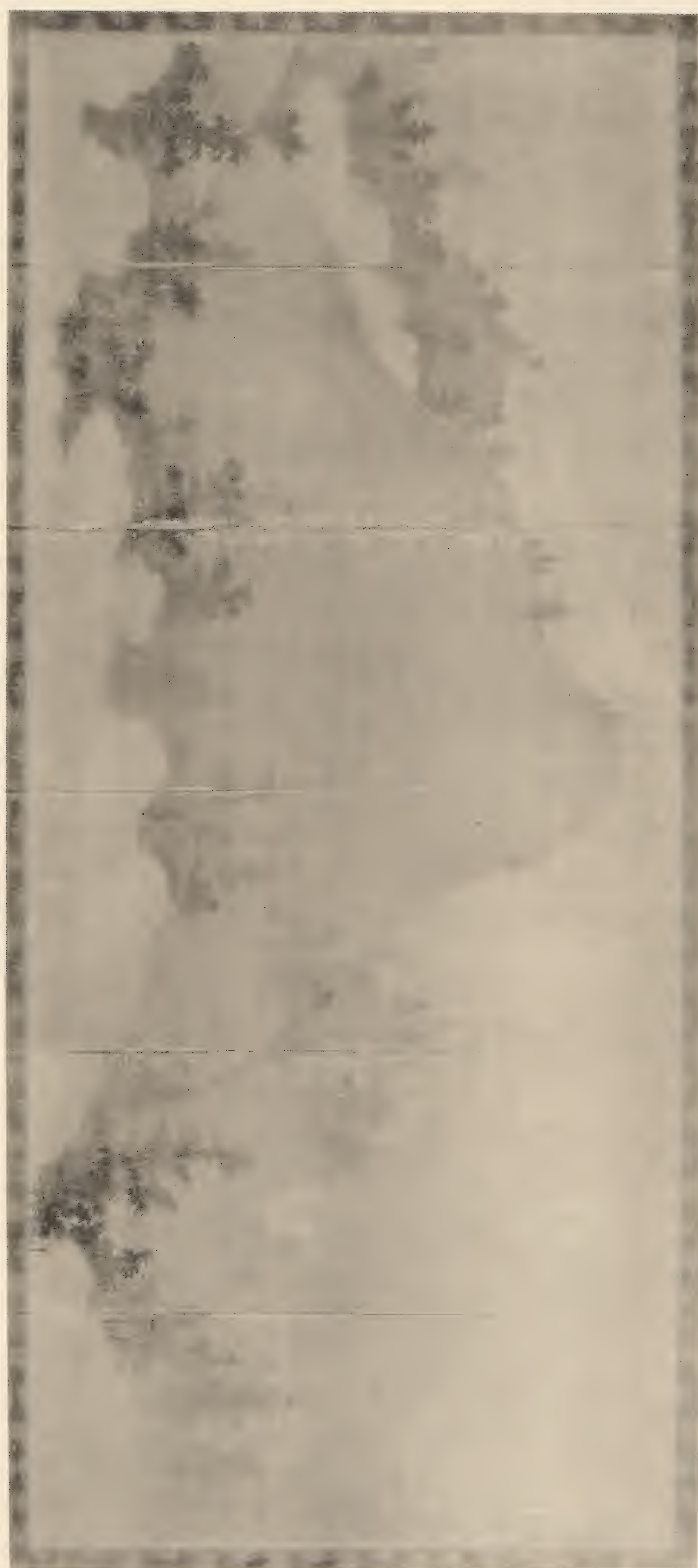
加本全圖事

卷百武十四

符夏吉裡山圖風一雙

雲谷夢龍





Painter Houshaku Togan.

Owner Margino Hosokawa.
Taskeyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百九十五 竹林七賢圖屏風一雙 雲谷等顏筆

紙本水墨

各堅五尺一寸七分橫一丈一尺九寸

東京 侯爵細川護成君藏

(第三百二十頁參看)

（一）

東京 印刷局 印刷

昭和二十一年一月一日

日本

昭和二十一年一月一日 東京 印刷局 印刷





Painter - Blackstone Tanager.

Owner - George M. Moore,
Tokyo.

Blank Page Digitally Inserted

第百九十六 竹林七賢圖屏風 雲谷等顏筆

一雙の中一隻

紙本水墨

竪五尺三分横一丈一尺九寸五分

東京 公爵毛利元昭君藏

(第百二十一頁參看)

(第三百二十一頁從前)

東京 松本 正 國 又 澤 幸 雄

德政以之爲歸 一 式 式 五 分

加 本 水 庫

一 畫 中 一 畫

德政以之爲歸 一 式 式 五 分 雲谷 幸 雄 筆



Painter - Ben Kaku Togan.

Owner - C. Kikuya.

Hagi, Nagato.

Blank Page Digitally Inserted

第百九十七 群馬圖屏風 雲谷等顏筆

一雙の中一隻

紙本淡彩

竪四尺七寸九分横一丈三尺四分

長門國萩菊屋剛十郎君藏

(第三百二十一頁參看)

二第百二十一號

真四郎 藤原氏十郎

四郎 藤原氏十郎

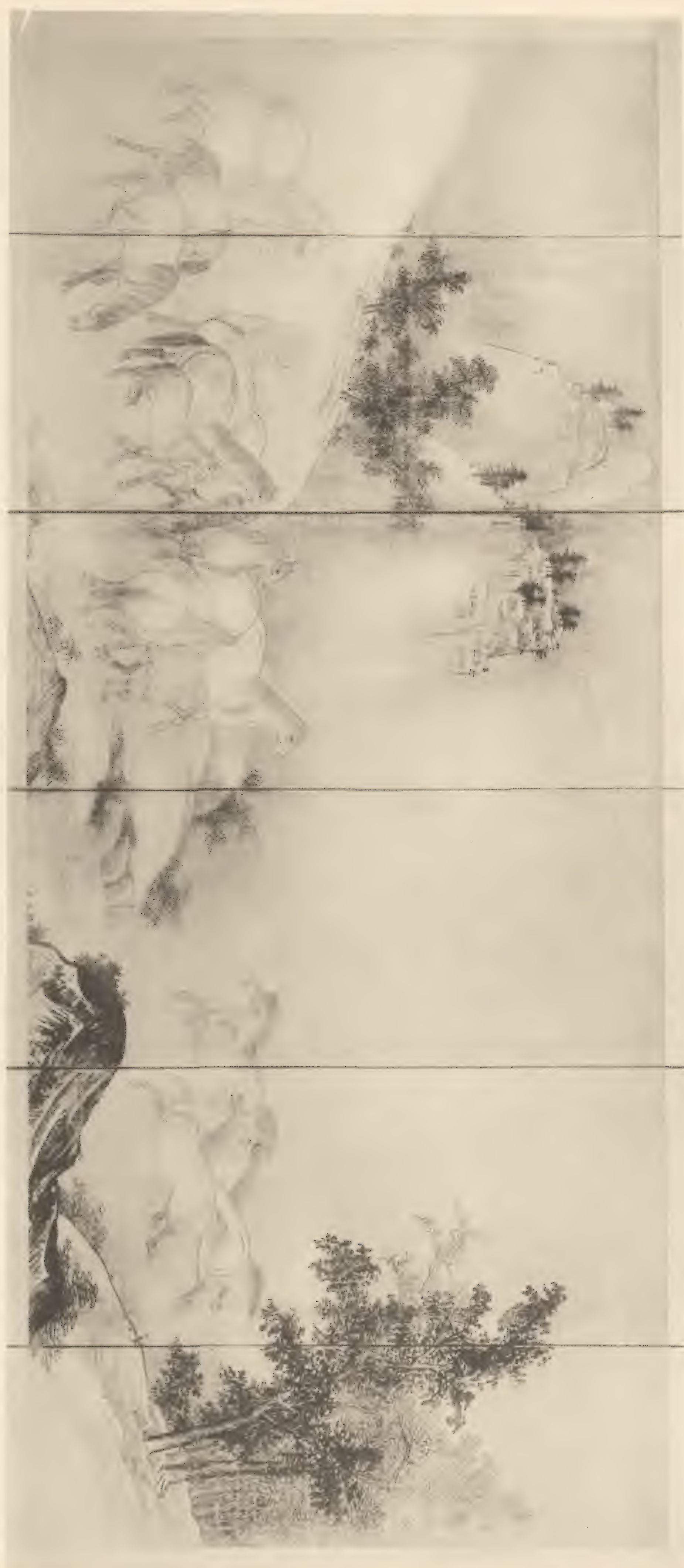
藤本

一雙の中一雙

藤百武十

藤原氏

雲谷



Parents - Hasegawa Toka Kue.

Chorus - His Count Fushie Oka.
Ta Kyo

Blank Page Digitally Inserted

第百九十八 松林圖屏風 長谷川等伯筆

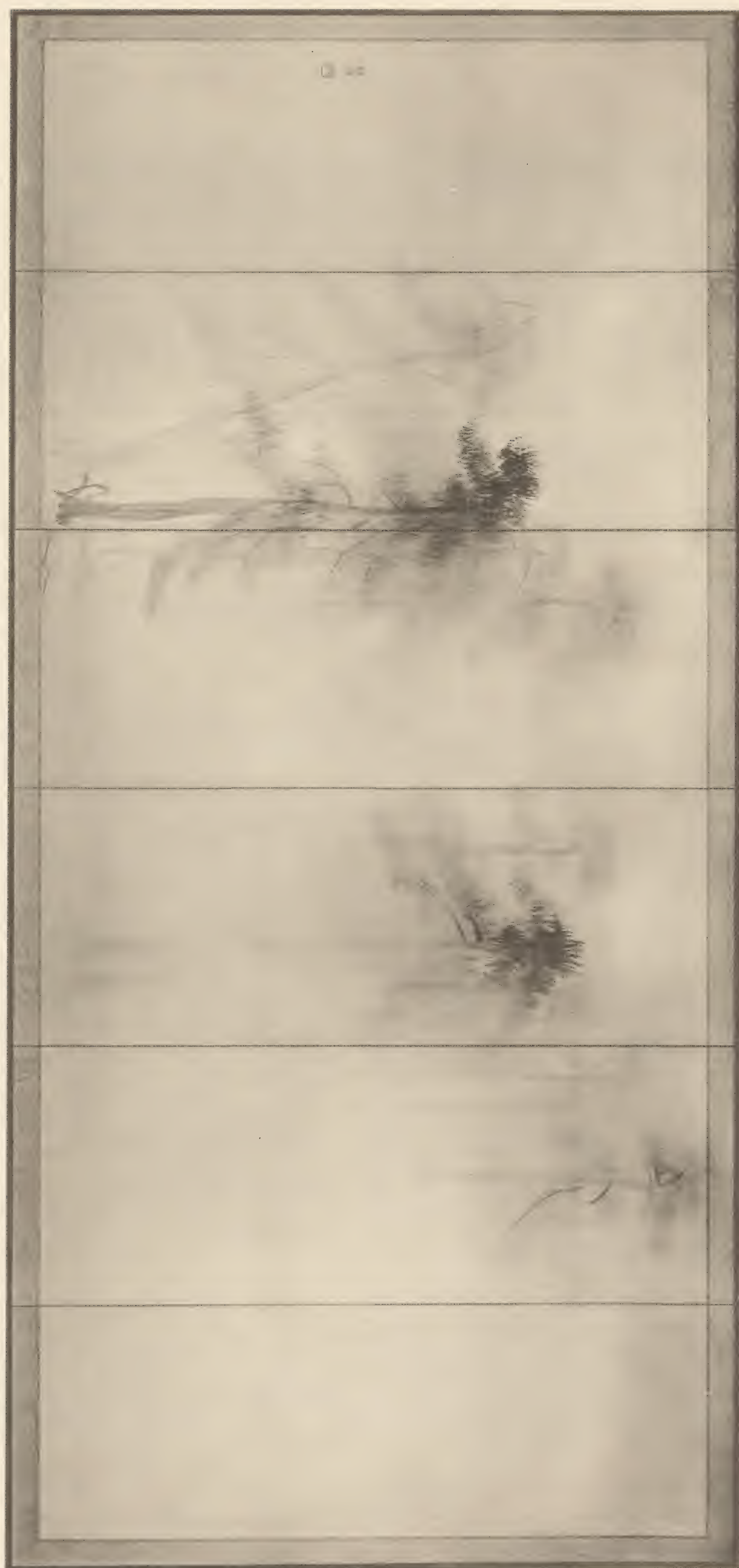
一雙の中一隻

紙本水墨

竪五尺一寸五分、横一丈一尺四寸四分

東京子爵福岡孝弟君藏

(第三百二十一頁參看)



Painter - Hasegawa Tohasu.

Owner - Myoshinji
Kyoto.

Blank Page Digitally Inserted

第百九十九 枯木猿猴圖 長谷川等伯筆

雙幅中の一 幅

紙本水墨

竪五尺一寸二分 横三尺七寸九分

京都 妙心寺藏

(第三百二十一頁參看)

（東京）二二二（日本）

宣明 社 心 書 庫

昭和二十二年三月二十五日

源 本 未 墨

無 誤 作 の 一 冊

源 百 五 十 五 冊 本 部 歸 國 長 谷 川 夢 郎 氏



Painter - Saga Chokkuan,

Owner - Hasei san.

Koyasou, this.

Blank Page Digitally Inserted

第二百 花鳥圖屏風一雙 曾我直庵筆

紙本著色

各竪四尺二寸五分、横一丈二尺六寸五分

紀伊國高野山寶龜院藏

(第三百二十二頁參看)

卷一百一十五

通志卷一百一十五

卷一百一十五

卷一百一十五

卷一百一十五





Parister - Toki Dobson.

Chun - Baron Asano.

Hiroshima Akis.

Blank Page Digitally Inserted

第二百一 子母應圖 土岐洞文筆

紙本墨畫

豎三尺九分、横一尺六寸二分

安藝國廣島男爵淺野忠純君藏

(第二百二十三頁參看)

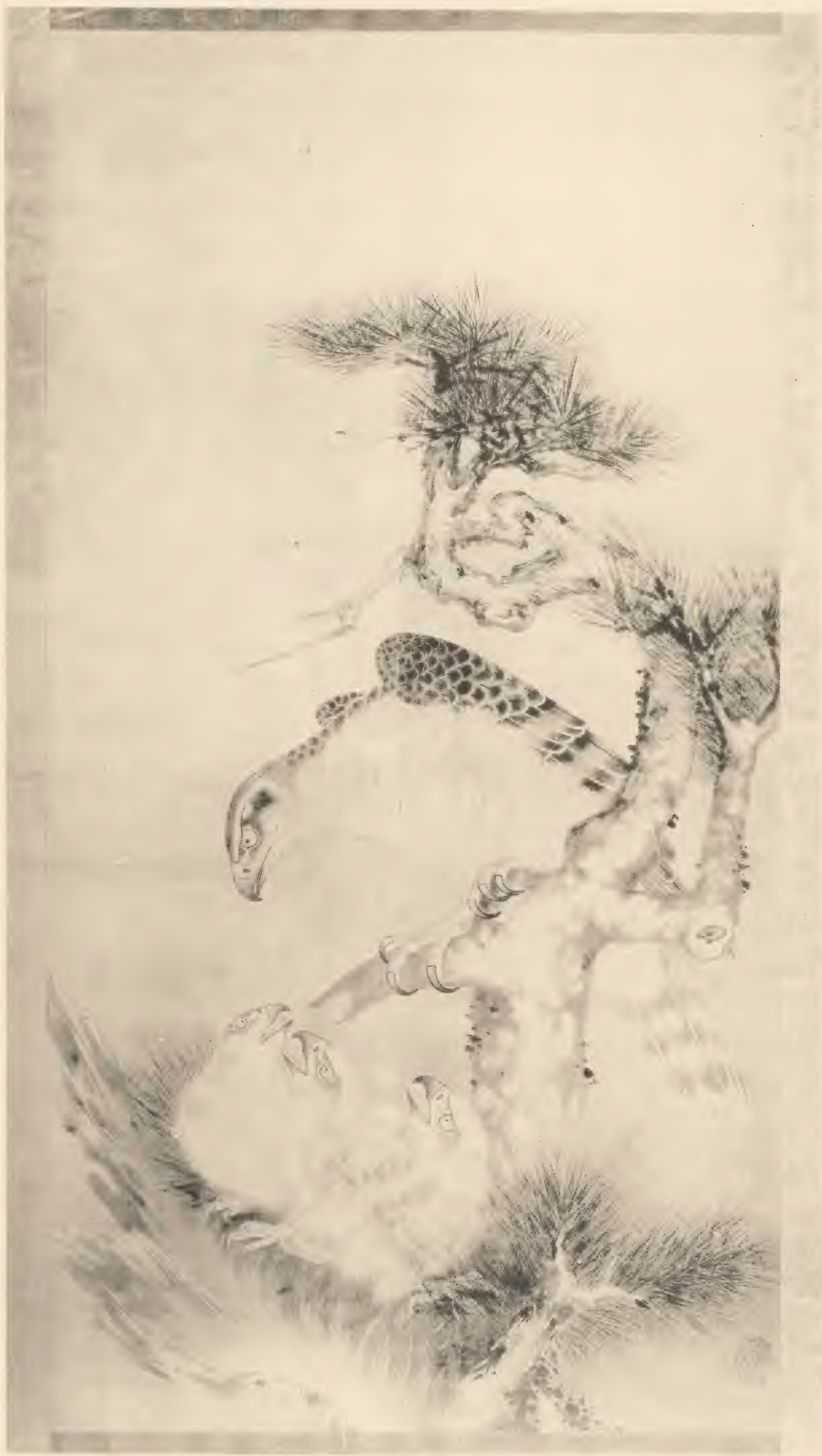
(卷三百二十三頁參看)

突發圖靈品供備發費忠誠保衛

經三引其供圖一以六十二卷

源本墨術

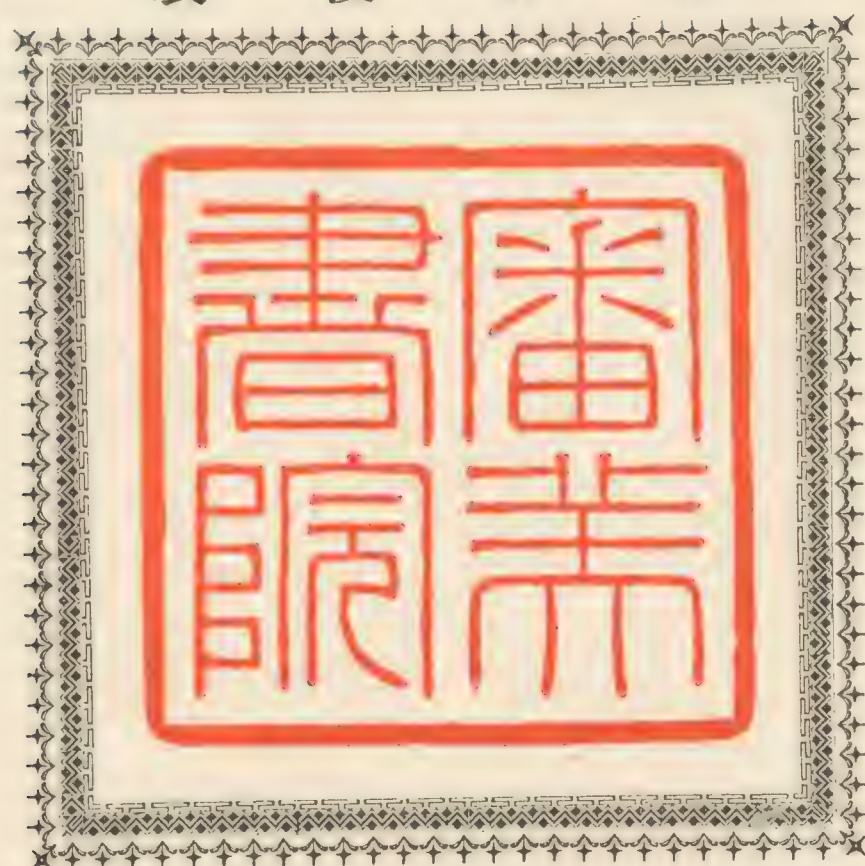
雜二百一 千掛圖 土訓師文筆



明治四十二年五月二十五日印刷
明治四十二年五月二十八日發行

(東洋美術大觀第四冊奧附)

不許複製製



印刷發行所兼

編輯者兼

審美書院代表者

田島志

一

印刷者

審美書院活版部主任

神田輝

夫

東京市京橋區新肴町十三番地

審美書院

(電話 區新橋三〇五五番)

印發
圖行
兼復

東京市京畿區神田區三〇正正帶
審美書
刺

印圖
答
轉
田
取
夫

審美書刺新運器主丑

審美
書
答

審美書刺新運器主丑

一



印圖
四十二
年五月
二十八
日發
印圖

東京市京畿區神田區三〇正正帶



Blank Page Digitally Inserted

SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES



3 9088 01652 2542